幻想転生物語 ～始まり～

白狐のイナリュウ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公、電光　光。

彼女が持っている刀には、謎の何かが取り憑いていていた。

そして幻想郷へと誘う勧誘者が光たちを襲う。

幻想郷に来てしまった彼女は、突如電光　光から電龍　大神へと性格が転換してしまう。

私（イナリュウ）こと電龍　大神が自分の過去についてお話します。

目次

辻斬り侍の狐女 1
勝負 8
転生 12
友人 19
剣士 25
探索 35
発見 45
情報 53
疑問 61
疑い 72
衝突 81
温泉 89
原因 99
せめて、自分も 109
暴走 120
決着 終 番外編（獣神化編） 130
決着 終 （覚醒編） 139

辻斬り侍の狐女

俺の名前は電龍（でんりゅう）大神（おおかみ）、俺は元々悪人を裁く辻斬りの狐女侍だった。

ことはさかのぼってしまうが、俺過去について話そう。

２０ＸＸ年４月１２日、東京。

当時俺は、性格も性別も女だった。

表向きは巫女をしており、神社でよくやるお祓いというのをしていた。

しかし俺の本職は悪人を裁く辻斬り、人斬りに過ぎなかった。

だがある事がきっかけで守りたいものができた。

俺は神社の清掃をしていた、巫女なら掃き掃除くらいなら当たり前だ。

外は春で、桜が舞い落ちる季節でもあり参拝客は多く来るようになっていた。

坊さん「光さん、もう掃き掃除終わりにして学校言っていいよ。」

と言われわかりましたと答えた。

その頃の俺の名前は、電光（でんこう）光（ひかる）と言う名前だった。

学校にも恵まれ、車という機械が好きで工業系の高校に通っていて成績は悪くはないけど皆は天才天才と言って羨ましがっていた。

友人も多くいたけど、話があったのは七色狼（なないろおおかみ）南（みなみ）と雷電（らいでん）ひかるだった。

南は車や日本文化で話しが合い親友な関係だった。また雷電は、日本文化や車のことと俺と同じく剣道をしていて刀も持っているということで話があった。

南「おはよう、光相変わらず眠そうね。」

光「そういうアンタは陽気でいいわね、昨日も明け方まで巫女やってたから疲れてるだけだよ。」

雷電「ところで今日テストだよ、テスト中に寝たりしないでよね？」

光「当たり前でしょ…。」

本当は巫女の仕事ではない、巫女の仕事はいつも１９：００前まで

には終わり家に帰りご飯を食べ、1，2時間くらい勉強しあとは風呂に入り就寝というのが普通の日課なのだが。
俺は侍、ほとんどは普通の日程なのだが23：00から俺は外に出て人斬りを始める。
勿論悪人を裁くのが俺の仕事だと思っていた。
しかし現実は違う、裁いていいものと裁いてはいけないものと見分けなければならない。
ある程度の軽犯罪なら見逃すが、治安を怯え明かすもの特に気に入らないものは裁いてきた。
それが俺だった。
何時しか俺はヒーローだと言われるようになったがそんなことでヒーローになったつもりは無かった。
ただ気に食わない奴は片っ端から斬ってきただけの事だったためヒーローなんてどうでもよかった。
俺達は南と雷電と話している内に、学校へと着いた。
すると、校門に入ろうとした瞬間先生に呼び出された。
先生「光、お前に会いたいって言う人がいるぞ？」
光「誰ですか、朝っぱらから。」
先生「教育委員会の学会さんだと。」
光「うーん、私何かしたかな？」
と言い、客室へと向かった。
???「はじめまして、電光　光ちゃん。」
光「はじめまして、ってどうして私の名前を？」
???「神社で巫女をやってるって聞いたから、それで教えてもらったの。」
光「そうですか、えーと。」
紫「ああ、自己紹介がまだだったわね、私は八雲（やくもゆかり）紫貴方の経歴全て知ってるわ。」
光「それで私に何か…？」
紫「それじゃ単刀直入に言うわ、貴方別世界行ってみたいと思った事ない？」

光「別世界・・・ 外国に留学してみないかってことですか？」
紫「外国・・・ ふふ、違うわ貴方達からすればアニメとかで言う異次元世界みたいな所に住んでみないかって話。」
紫が異次元世界に行ってみないかと言われた瞬間、光は黙り込んでしまった。紫は考え込んでいると思っていたが光が口を開けこう話した。
光「失礼ですが、紫さん・・・ 貴方ホントは教育委員会の学会の方ではないでしょう？」
紫「・・・」
紫はほんの少し驚いたが、想定内だと思い笑みを浮かべた。
紫「ならどうするの？」
光「これ以上ここに長居はしない方が良いでしょう、貴方には妖怪みたいな妖力を感じ取れます…少なくともほかの妖怪では妖力を強く感じ取れることはあまり出来ませんが、貴方は比べ物にならないほどの妖力が伝わってきます。」
光「私も神社の巫女をしている身なので、余計なことをすれば―。」と言おうとすると、紫がこう言い出した。
紫「確かに、私は他人からではわからないけれど貴方は巫女をしているんだからわかる事だけど…向こうの世界は巫女はいくつも居るわ。」
紫「貴方みたいに熱心だったり、めんどくさがり屋だったりね…。」
光「何が言いたいんです。」
紫「私はずっと貴方が見えない所で見ていたのよ、そして貴方には誰にも言えない秘密があるって事も知ってるのよ？」
と言われた瞬間、俺は動揺し持ってもいないはずの刀を持ち抜こうとした。
紫「刀が無いのに戦おうなんて考えはやめておきなさい…少なくとも貴方がこれから行く世界、幻想郷(げんそうきょう)はあなた以上に強い相手がごろごろ居るわ…無駄に攻撃的にならない事ね。」
光「まだ私は行くとは言っていません。」
紫「そうかしら、これから貴方の身に起きることは幻想郷で日々行

われている事…きっとあなたも気に入るわ、貴方が持っている刀には何かが取り憑いているみたいだしね。」
光「？」
俺が疑問に思った瞬間、紫は立ち上がり部屋から出ていこうとした時こういった。
紫「いい返事を期待しているわ、辻斬り…いや、正義の人斬りの狐女さん。」
その時の俺は紫が言った言葉に未だに疑問を抱いていた、〝貴方が持っている刀には何かが取り憑いている〟と。当時巫女をしていた俺は、刀に何かしらの霊力かもしくは妖力があるのなら感じることが出来るはずなのだが。何故何も感じなかったのかが理解ができなかった。
たが今は理解出来る、それは付喪神だった俺だったということなのだから何も感じなかったのに何か見られている感じがあったのはそういう事だったのだ。
そして学校が終わり、俺は南達と帰ろうとしたが。
雷電「ごめ～んおまたせ、ホームルーム長引いちゃって…。」
光「大丈夫だよ、今日は部活も休み貰ってるし久しぶりにみんなで遊ばない？」
雷電「いいね、どこ行こっか…この時間だとゲーセンか光の家くらいしか無いよね…。」
俺は雷電の言葉を無視してまで紫に言われた言葉について考えていた。
雷電「光～もしもーし。！」
光「あ、ごめん何？」
雷電「話聞いててよね～、暇だしゲーセンでプリクラでも撮りに行かないって言ったのに…。」
光「ごめんごめん、ゲーセンねいいよ近くのゲーセン行こ。」
と言い、南を待っていたが南はなかなか来なかった。
なんと1時間も南を待っていた。
雷電「南、遅いね…。」

光「うんかれこれ、1時間は経つ…何かあったのかも。」
雷電「考えすぎだよ、南今日は茶道の日だったとかあるかもしれないし。」
光「だったら私も茶道に行ってるよ、私部活掛け持ちしてるんだし。」
雷電「だよね…どうしたんだろ。」
と思った瞬間、何も無い空間から口みたいな物が空き紫が身を乗り出し出てきた。
紫「私が幻想郷に連れていったのよ。」
光「き、貴様!?」
雷電「知り合いなの?」
紫が出た時には俺の目は戦闘モードへと変わっていた、それは勿論だ紫が勝手に南を誘拐したからそれは当然だ。
しかし、紫はこういった。
紫「あら、そんな身構えないで…自分から行くって言い出したのよ?」
紫「どうやら毎日、退屈していたみたいね…友達をも裏切ってまでね。」
すると俺は隠していたクナイを取り出し、紫に突きつけようとしたが今まであった隙間がいつの間に閉じ消えてしまった。
紫「そうね…南を連れ戻したければ、私が今言う条件をクリアすれば南をここに連れ戻してあげる…失敗すれば貴方も幻想郷に来てもらうわ。」
と言い聞こえていた声はあっという間に消えてしまった。
雷電があいつは何者、なんで南を連れ去ったのと聞いてきた。
俺はわからないけれど、妖怪には変わりないよ隙間から現れたってことはスキマ妖怪なのかもしれないと答えた。
とにかく南を連れ戻さない限り南は生きて帰れないかもしれないと思った俺は雷電を早めに家に返し、神社に向かった。
戦いの支度をしないといけない、それが侍売られた喧嘩は買う。
特に紫はその頃の俺にとって気に食わない奴だった。

だから斬る、それが俺だった。
二支度を終え、俺はとにかくいつも剣道などの練習で使っている誰も立ち入らない草むらにやってきた。
そこは山の中の森、誰も恐怖して入る人はいない肝試し程度でもここに来るのは遠慮することが多い。
頂上まで行くと花畑がありその奥へ行くと、草むらに出る。
ここが俺の剣道場だ。
だから俺はあえてそこを選び、人には秘密の誰も知らない自分の剣道場を作った。
それを言うと子供みたいだが、誰かに見られるよりかはマシだった。
俺はいつも剣道場にしている所についた。
そして俺は正座をし、黙想を始めた。
２時間、まだ紫の声は聞こえない…だが俺は待ち続けた。
すると俺を呼ぶ声が聞こえ、俺は刀を持ち刀を抜き誰かの首元に刀を突きつけた。
だが、それ雷電だった。
雷電「ちょっ、危ないなぁ…あんまりむやみに人に刀を突きつけないの。」
光「雷電か…なんでここに？」
雷電「やっぱり尾行に気がついてなかったのね。」
雷電「私アンタのことが気になって付いてきたのよ。」
光「その刀…。」
雷電「私も一応は刀持ってるし、一族が前に遺した刀だったから切り味もいいし使えるよ。」
光「そうなんだ、言っておくけど自分の身は自分で守ってね…私アンタの分まで守れないよ…。」
雷電「大丈夫、私を誰だと思ってるの？」
光「そうだよね、なったって私と一緒に国内の剣道大会で優勝した剣士だもんね。」
雷電「褒めても何も出ないわよ。」

と雷電はニヤケながら言った。
雷電「それにしても、光やっぱり辻斬りの侍だったんだ。」
光「バレちゃったか…私が怖い？」
雷電「いや、かっこいいなって…服も感じ方も全然…髪も下ろしてるところ初めて見たし、もうクール過ぎるよ。」
光「あ、ありがとう…でもどうせなら可愛い方が好きだよ私は。」
と話していると、紫がまだ何も無い所から隙間ができ出てきた。
紫「ようやく役者が揃ったわね、貴方がここを選択すると思っていたわ…何が起きてもここなら花火程度で済むからね。」
光「さてその条件ってなんなの、嫌な事だったら斬るわよ。」
紫「大丈夫よ貴方が楽しめる条件よ。」
すると突然洋風の女の子が現れニヤリと笑った。
紫「子のこと戦って貰うわ、この子が勝てば幻想郷に来てもらうわ。」
光「逆に私が勝てば南は帰ってくるって事ね。」
ヤン「はじめまして、ヤンデレ・スカーレットと申しますわ、貴方、お名前は？」
光「電光　光だよ、貴方どうやら吸血鬼のようね。」
ヤン「あら、よく分かってらっしゃる…流石は外の世界の巫女さんですわね。」
雷電「それじゃ私も参戦させても―。」
紫「駄目よ、この戦いは1対（サシ）1で戦ってもらうわ…そうで貰わないと楽しくないわ。」
光「そうね、丁度1人で戦いたかったのよ…雷電よく見てなさいこれが辻斬りの恐怖よ。」
ヤン「さぁ、楽しい夜の始まりよ。！」
光「いざっ参る。！」
続く

勝負

戦いは既に始まっていた。
光は、刀を斜め左に振りヤンデレ・スカーレットを斬ろうとした。
しかし、彼女の動きは素早く背後に回られていた。
だがとっさの反応でヤンデレ・スカーレットの攻撃を刀で抑えた。
ヤン「やるわね、相当戦い慣れてるみたいね…だけど。」
ヤンデレ・スカーレットが何かのカードを持ちこう言い、唱えた。
ヤン「だけどこの技、刀1本で受け止められるかしら？」
ヤン「スペル、禁忌【レーヴァテイン】」
剣みたいな物が光の方へと降りかかった、だがその剣は燃えていた。
光「!?」
これは流石に今の刀の力では直ぐに折れてしまうと錯覚し、その場から1度離れた。
光（剣が燃えてる、あいつ…他の〝奴ら〟より確実に別の戦場で育ち他の戦い方で私に挑んできて、かなり戦い慣れている。）
光「なるほど、スペルカードってやつ…相当厳しい戦いになりそうね。」
ヤン「避けられちゃダメよ、普通ならあそこは無理してまで受け止めてダメージを与えなくちゃ。」
光（少々手加減していると、こっちがやられる…多少強引な戦いにはなるけど…。）
光「紫さん、少々手荒くなりますが本気で行かせてもらいます。」
と言われた瞬間、紫は何も言わず頷く事もせずそのまま見ているだけだった。
光「さて、楽しませてもらうよ…ヤンデレ・スカーレットちゃん。」
と言った瞬間素早い動きを見せた。
紫「出たわね…これが辻斬りの本性よ。」
雷電「え？」
紫「あの笑顔、ジャック・ザ・リッパーと呼ばれた彼女は強くてヤ

バいわよ。」
ヤンは攻撃をやめ、その場に立ち止まった。
それに合わせ、光も攻撃をやめ相手の出方を見ていた。
まるでカーボーイの早撃ち対決、どちらかが先に抜いて撃てた方が勝ちみたいな状態だった。
ヤン「流石は電光　光、紫が目を掛けていただけあるわね…普通なら貴方みたいなのは幻想郷に誘ったりはしないのだけれど、貴方は違う…”霊夢”と近いものを感じるわ。」
ヤン「幻想郷の管理人にしておくのは惜しいわ、うちに来てメイドにでもなってくれないかしら？」
光「あいにく、僕は行くとは言っていないし…まだ勝負も着いていない…メイドなんて僕の性にあわないね。」
ヤン「そう…それは残念…ね！。」
ヤンがスペルカードを唱える、しかし。
光「あはは、そんな暇与えないよ？」
ヤンが光の攻撃を受け１００ｍ程飛ばされた。
だが、ヤンのダメージはあまり大きくなく軽傷だった。
光「防御してダメージの少なくしたんだね、けどここからが本番だよ。」
ヤン「なるほど、追い詰められちゃったってわけ…これ以上強くなられても困るし…さっさと片付けましょう。」
ヤン（相当やるわね、長引かせると後がなくなってくるわね…でもまだまだ倒せる範囲内、攻撃力が互角とはいえど勝敗はもう着いてる…これならウォーミングアップ程度で終わりそうね。）
と思った瞬間、紫が光の刀に触れ何かを解放させた。
それは刀に１枚だけ貼り付いていた封印用の札を剥がしたのだ。
光「な、何を!?」
紫「解放させたの、貴方が封印していた力を…私も楽しませてよね？」
すると、体の底から力が漲るような感触に見舞われ肉体が崩壊しそうな程の激痛や快楽がやってきた。

光「うわあああああああああああああああ！」
雷電「光！」
ヤン「紫、どういう風の吹き回し？」
紫「貴方の戦い方を見てると互角の勝負をしていると思うの、でもこの子の本当の本気で限界をしたらどうなるか気になるじゃない？」
ヤン「そうね…まぁいいわ、ウォーミングアップ程度で終わらすのも気に食わなかったし…こちらも限界まで本気で相手させてもらうわ。」
光（まずい、こんな所で〝ヤツ〟を出してしまえばキレてココをけしかけない…でも意識がどんどんと奴へと置き換わっている…ダメ、せめて雷電や人間だけには手を…だ…さ―。）
どんどん光から俺へと置き換わって行き、俺になった。
姿は光のままだが、髪はかきあげられ第1段階の電龍　大神になった。
付喪神の大神「俺を起こしたのは誰だ…？」
紫「この人です。」
ヤン「はぁ!?」
大神「ほう、なるほどこの状況だと…俺と勝負したいと？」
ヤン「ツ―！」
大神「ふはははは、いいだろうウォーミングアップには丁度いい。」
大神「光の言いつけで人は殺せん、被害が出ない程度で相手をさせてもらおうではないか。」
と俺が述べていると、ヤンが剣から包丁へと持ち替え俺に襲ってきた。
ヤン「悪いけど、これが終わらない限り私帰れないからさっさとくたばって？」
またヤンが襲いかかってきたが、〝時を止め〟背後に回った。
時が動いた時には、俺はヤンの腹へと横に斬っていた。
雷電「やったか!?」
ヤン「グハッ、…甘く見ないでよね…？」
横から斬られているので致命傷だった。

しかし、俺は悟った。
大神「斬れた感触がしなかった…もしやお前。」
ヤンは倒れたが、何かが来るのを悟った俺はヤンが倒れた周辺を見渡した。
だが、それが運のツキだった。
続く

転生

何か気配に気づき、大神が後ろを振り向いた。
大神「！」
するとそこにあろうはずもない所に、何も変哲もない扉がそこにひとりでに立っていた。
大神「なんだこれは、何かの扉か？」
大神「しかし、いつの間に…さっきまでなかったはずの扉が何故。」
大神「まぁいい、扉に化けているのだろう…斬っておけばどうということは無い。」
と言い扉を斜め左に斬ったのだが、後ろから同じようなダメージがやってきた。
大神「なっ、ダメージが返ってきた…いやこれは！」
ヤン「残念、それは囮の扉よ…惜しかったわね。」
大神「その扉、次元転移する扉なのか!?」
ヤン「正確には違うけど、死から蘇ることが出来る扉よ。」
大神「なんだよそれ、なんでも有りか!?」
ヤン「時止めとか使える貴方に言われたくないわ…（汗）。」
大神「くっ…　傷は浅い、まだ戦える。」
とは言ったが、背中から斬られたダメージは凄く今にも出血多量で死ぬ寸前だった。
しかし、俺はそんなのもお構い無しに戦いを続けた。
雷電「ダメ、光あなた死んじゃうわ！」
紫「無駄よ、この決闘を楽しんでる…話し掛けても反応すらしないわよ。」
ヤン「なかなか、やるじゃない…でもその身体で何処まで持つかしら？」
大神「はぁ…はぁ、まだまだこれからだ…。」
ヤン「往生際が悪いわね貴方、さっさとくたばればいいのになぁ。」
大神「悪いけど俺は諦めが悪くてな、まだ死ねないんでね。」
光（大神、何かが来るよ。）

大神（チッ、人間か…。）
紫「誰か来たみたいね、早めに終わらせないと私達の存在知られちゃうわよ。」
ヤン「それじゃケリをつけよ！」
ヤン「神槍『スピア・ザ・グングニル』」
大神「終焉『神の雷』」
ヤン「なっ！」
紫「スペルカード、こんな短時間でよく覚えたわね…やはりこの子は”霊夢”張り合えるわ。」
大神「ウガアアアアアッ！」
俺はライオンみたいに唸り、ヤンに迫った。
しかし、それが間違えだった。
???「え、何事!?」
リスみたいな獣人が現れ、俺達が戦っていることを悟られてしまった。
それどころか、俺達の攻撃の射程範囲内…喰らえば即死だった。
それだけは避けなければと思った瞬間、先に体が動き俺が攻撃した雷とヤンのスピア・ザ・グングニルが俺の背中に直撃し血反吐を吐いた。
ヤン「自ら助けに行くとか、紳士過ぎるわよ貴方…。」
ヤン「まぁ楽しかったわ、成らずして叶わない犠牲を貴方はその女の子を守った、それだけでも英雄よ。」
大神「貴様…まさか、来る、のを分かっ…　てたな。」
ヤン「どっちにしろ、貴方とその子のその傷は致命傷よ…観念なさい。」
???「ッ―…。」
そして俺は立っていられずに、その場に倒れ込んだ死ぬか死なないかの瀬戸際に紫からこんなことを言われた。
紫「結果条件をクリア出来なかったから、貴方を幻想郷に連れていくわけだけど光ちゃんのままじゃ何仕出かすか分からないから、人格はそのままにさせてもらうわ…大丈夫、不死身になれるし不老不死だ

から歳もとらない。」
紫「ただし、一応だけど彼女が死んだという記憶も消させてもらうわ、今後に支障をきたす恐れがあるからね。」
と言わ地面に隙間が開き、俺は奈落の底まで落とされた。
大神「うわあああああああああああああ！」
紫「さてと帰るわよ、ヤン。」
雷電「ちょっと待て、私が相手だ…。」
ヤン「どうする？」
紫「ほっときなさい。」
雷電「おい待て！」
紫「貴方も時期が来れば幻想郷（こう）に行けるわ、それまで待ってなさいな。」
１０月中旬　ＰＭ１９：００頃　幻想郷　魔法の森
大神「????（，ω，）うわあああああああああああああ！」
地面に叩きつけられた瞬間、腰骨が折れる音が俺の耳に響いた。
大神「ホォア→ア←!?」
だが、空から落ちたのにも関わらず痛みは一切感じずに感覚だけが来て折れているはずの骨が折れてはいなかった。
大神（おかしい、普通なら折れているはずなんだけど…いやさっき落ちた時にはもう折れてた、なのに治っている？）
大神「って、あれ？」
大神「ここ…どこ？」
起き上がり地面を見てみると、地面はクレーターみたいな凹み方をしておりどれくらい自分が速いスピードで落ち、自分がどれだけ重たいのかよくわかった。
大神「嘘だッ!!」
大神「有り得んだろ…どんだけ体重重たいんだよ俺（汗）。」
すると風が吹き身の肌の寒さを感じた。
大神「サーブゥィー（寒い）！」
大神「ええ、なんで服き…　て…。」
大神「ヴェ!?」

自分の姿を見てみると下着だけで着ていたはずの着物が消えていた。
大神「嘘だろ、なんで転生するとすぐ消えるのか？」
大神「そういえば、俺の刀…。」
と言い刀を見たら急に頭痛がし、ふとリスの彼女を思い出した。
大神「そうだ…俺、何者かに後ろから斬られて…あの子大丈夫かな、ちゃんと生きて帰れたのかな。」
大神「とにかく、辺り一面森…この感じだと家どころか村もなかなか見当たらない可能性も―。」
と思った瞬間、遠くの方から人の声が聞こえてきた。
その声は女性で、光と同じ歳の声だとわかった。だがその声はかなり遠く、僅かしか声が聞こえなかった。しかし神社があるとわかっただけ収穫だと思いその声がする場所まで歩いていった。
???「今日は楽しかったぜ、久しぶりのメンツで飲めたわけだし。」
???「アリスは何かと忙しったみたいだし、妖夢は幽々子の世話でお疲れだったみたいだしね。」
彼女達の名前は、霧雨魔理沙（きりさめまりさ）と博麗霊夢（はくれいれいむ）魔法使いと巫女だ。
霊夢は当時”博麗の巫女”と呼ばれていた。
霊夢「にしても魔理沙…あんた飲み過ぎじゃない顔真っ赤よ？」
???「あまりお酒強くないのに一気飲みするからだよ…。」
???「まぁ顔真っ青になって吐き出すまで行ってないんだからまだいい方よ。」
そして彼女達の名前は、魂魄妖夢（こんぱくようむ）とアリス・マーガトロイドだ。
アリスは人形使いで魔法使いだ、そして妖夢は幻想郷の中では最強の剣士らしい。
妖夢「そろそろ帰るよ、”幽々子様”も心配しているだろうし。」
魔理沙「ご主人のお世話も大変だな。」
妖夢「昔よりかは動けるようになったよ、”あの人も”時々来てくれるしかなり手間が省けたよ。」
霊夢「”あいつ”か”幽々子”に似て付き合いにくいタイプなのよね…。」

アリス「その分キレてる時の顔がほぼ笑顔で恐ろしいけどね。」
すると妖夢がアリスの裾を掴みこういった。
妖夢「あ…あのさ、実は1人じゃちょっと…。」
アリス「はぁ…わかったわよ、途中までね。」
霊夢（今日のアリスはなんか優しいわね。）
妖夢「それじゃ霊夢、魔理沙。」
アリス「また会いましょ。」
2人「それじゃお疲れ～。」
と言いながら妖夢とアリスは霊夢の神社を後にした。
霊夢は魔理沙にしばらく居るのかと聞き、魔理沙はまだ居るといい神社に居座った。
魔理沙「さてと、飲み直すぞ～！」
霊夢「あんたさっき5杯も飲んだじゃない、倒れるわよ？」
すると霊夢の耳に草木が靡く音が聞こえた。
だが、魔理沙にはそれは聞こえなかった。
魔理沙「だってよ～、机に乗ってるやつまだまだ残ってるぜ～？」
霊夢「全く程々にしなさいよ、うちで泊まりとかやめてよね。」
魔理沙「大丈夫大丈夫、あと5杯で済ませるからよ～。」
と魔理沙が言った。
霊夢は立ち上がり、ちょっと散歩してくるから1人で飲んでといい森へと歩いていった。
異常に草木が靡く音が気になったのか、霊夢は札を持ち周りを見渡した。
霊夢「誰、誰か居るの？」
霊夢「居るのはわかってるのよ、出て来なさい。」
と大声で言ったが返事が無かった。
しかし、霊夢は動かずその場に止まったまま動かなかった。
すると、俺が霊夢の後ろから出てきた。
大神（人…巫女の服を来た人みたいだな、いや妖怪か？）
すると霊夢は後ろを振り返った。
だが振り向いた先は俺の下着姿、あまりにも何が起こったのかわか

らなかったのか俺達は漠然とした。
とりあえず俺が先にこう言い出した。
大神「あのぅ、こ→こ←何処ですか。」
霊夢が状況を理解した瞬間、霊夢の顔が真っ赤になり真っ先にスペルカードを俺の方に撃った。
大神「アブナッ！」
霊夢「その口調、直してから出直しなさいな…ていうかなんであんた素っ裸なのよ!?」
大神「るっせぇ、俺も好きでやってる訳じゃねーよ！」
霊夢「ああもう、紫ったら面倒臭いこと持ってきやがってぇ…。」
霊夢「とにかく、来なさいな見てるこっちが恥ずかしいわ（汗）。」
俺は見知らぬ女性に連れられ博麗神社という所に連れてこられた。
大神「ナンダコレ。」
霊夢「はい、あんたの！」
魔理沙「なんだお前、海水浴する季節じゃねーぞ、ていうか。」
魔理沙「誰だお前。」
大神「いや向こうから自己紹介ナシでいきなり誰だお前とか酷くない？」
と言いながら霊夢に渡された巫女用の服を貰い、着替えた。
魔理沙「あっ、すまねぇな…私は霧雨魔理沙魔法使いだぜ。」
霊夢「泥棒の間違えでしょ？」
魔理沙「人聞きの悪いこと言うなよ。」
霊夢「私は、博麗霊夢…巫女よ。」
大神「えと…。」
大神（ああ、まずいなぁ付喪神は自然に出来た物…〝電光大神夢刀〟と言うのは流石に皆に疑問を与える。）
大神（これが今の俺の名前だが…どうするか。）
霊夢「どうしたの、もしかしたら名前を忘れたとか？」
大神「いや、忘れてないんだけど…ちょっと言うのに抵抗が。」
大神「でん…電龍（でんりゅう）大神（おおかみ）だよろしく。」
霊夢（偽名ね、明らかに苗字が珍しすぎるわ…。）

霊夢（かと言って、怪しいけど彼女を退治する理由がない…。）
霊夢（でも、何故彼女から人間ぽい力を感じないのかしら…霊力と言うよりかは妖力？）
霊夢（まさかだけど妖…いや、まさかね。）
霊夢がこう考えていると、大神が霊夢の方を見つめこう言い出した。
大神「あのさ、霊夢…俺実は人探ししててな…いや人って訳じゃないんだけどさ。」
と言い、目の前にあった日本酒を手に取り茶碗につぎ飲んだ。
魔理沙「あ、私の日本酒!!」
霊夢「いいじゃない別に、日本酒くらい。」
霊夢「で、人探しね…獣人探してるのかしら？」
大神「ああ、そうだ…狼女で頭に青いタオルを巻いている女の子なんだけどそいつ見かけたりしてないか？」
すると霊夢が何かピンと来たのかこう言い出した。
霊夢「それって…〝七色狼　南〟かしら？」
大神「お、おお、そうだそいつだよ、どこに居るんだ!?」
大神（ていうかなんで南知ってんだ？）
霊夢「それなら、人里をちょっと通り過ぎたところに大門があるからそこに行くといいわ。」
魔理沙「これ地図だぜ、どうせ持っててもも村の場所とかもう覚えてるし上げるぜ。」
大神「あ、ありがとう…恩に着るよ。」
大神「この借りは必ずいつか返すぜ、ありがとう～！」
大神「アデュー！」
２人「なんだその言い方!?」
と言い、博麗神社を後にした。
霊夢「電龍…大神ね～。」
魔理沙「どした？」
霊夢「いや、なんでもないわ。」
続く

友人

しばらくして、歩いていると村が見えてきた。
その頃の俺は”飛ぶ”という事を知らずに村へと歩いていた。
それは当然、俺が妖と気づくまでは空を飛ぶ事や増してや自分が1度死んでいた事さえ知らなかったのだから。
ようやく村の奥まで来れたが、途中で子供達に遭遇してしまった。
現在ＰＭ２０：３０ぐらいの事だった、何故子供が居るのかわからなかったが周りを見渡すと何かの祭りが行われていたらしい。
女子供「うわぁ、凄い尻尾…ねぇ触っていい!?」
男子供「なんだこいつ、全身毛むくじゃらだぞー!?」
大神「こ、こら、お兄…お姉さんね今すぐに行かなきゃ行けないところあるんだ、だからそこ退いてくれないかな?」
と大神が優しく言ったのだが、子供達は全く引かなかった。
大神がもう1回優しく注意しようとしたが。
???「こら、君達その人が困っているじゃないですか!」
子供達「うげぇ、四季映姫だ!」
子供達「逃げろ逃げろ～!」
???「全く、子供は世話が焼けます…嫌いではないのですが。」
大神「あ、ありがとう…わざわざこんな俺に構ってくれて。」
???「いえ、当然の事です。」
大神「えと、こんな事聞くのもあれだけど…あんたの名前は?」
四季映姫「申し遅れました、私、四季映姫・ヤマザナドゥと申します。」
大神「ヤマザ…なんだって?」
四季映姫「ヤマザナドゥです。」
大神「ナンダソレ。」
四季映姫「今、私の名前侮辱しました!?」
大神「いいや…凄い名前だなと思っただけだよ。」
四季映姫「貴方ね、人の名前を侮辱するということは―。」
大神（ああ、これ面倒くさくなるやつだ…適当に言って去るか。）

大神「別に侮辱してないよ、俺の名前は電龍　大神…よろしくな。」
四季映姫「あ、ああ…よろしくお願いします、って自己紹介する前に――！」
大神「またな～。」
と言い去っていった、四季映姫はこう思った。
あの人には悪というより善の物がありますね、でも白黒決めるとしたら彼女は黒ですね…どっちとも片寄ってない感じなのですが、悪い方によって行く傾向がありますね、彼女にはと。
そしてまたしばらく歩くと、神社とかよくある門をくぐり大玄関の方へと着いた。
中は思ったより静かで、祭りで騒いでいた村とは全然違う感じだった。
誰かいないかと思い、俺はドアをノックした。
しかし、誰も返事はしなかった周りを見渡すと門番らしきものも居ない。
だが俺は諦めずにドアを再びノックした。
大神「トントン（裏声）」
すると誰かがドアを開け、こう言い出した。
???「誰よこんな時間に…。」
その声は俺がよく知っている声、南の声だった。
小玄関のドアがめいいっぱいに開き、南が出てきたが南は理解できなかったのかその場を立つしかできなかった。
大神「よ、よぉ…じゃなかった、やっほ…き、来ちゃった…（必死）」
南「ひ。」
大神「ひ？」
南「光ーーーーーーー！」
大神「うわあああああああああああ??????（，ω，）?????」
急に南は俺に会えたのがとても嬉しかったのか、俺に抱きついてきた。その力は１０倍にも２０倍にも及び自分の骨がボロボロに砕け散る音が俺の耳に入った。
若干痛かったが、死ぬ程では無かった。

しかし。
大神「い〝や〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝痛い痛い、ヤメロン！」
と大げさに言ったのだが南は一向に離さなかった。
南「好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き。」
大神（ええ…何コイツ怖い…と、とにかく絞め殺される前に振りほどかないと…。）
すると突然時が止まり、南の行為は停止した。
時が止まったことに気づくと、南の腕を振り下ろし南の背後へと回った。
そして時が動き出した。
南「あれ…居なくなった…。」
大神「ふぅ…危なかった…。」
南が大神の気配に気づくと後ろを振り向いた。
大神「ヤメロォー、死にたくなァい（必死）！」
南「いや、何もしないわよ（汗）。」
大神「嘘だ!!!、抱きついてきたあげく絞め殺そうとしただろ、腰骨からあばら骨が粉々に粉砕されたかんな！」
南「あ、ごめんつい…あまりにも嬉しかったものだから…って、え？」
大神「まぁいいや、普通に骨〝再生〟するから。」
南「貴方…なんで男の口調なの…それに、〝再生〟って…。」
大神「あー…、話せば長くなるんだけど…。」
すると南が小玄関の方のドアを空け、こう言った
南「いいわ、中に入って。」
中に入るとそこは、まるで京都にある江戸村みたいな感じでかなり豪華な村だった。人はそれなりに多く、秋の紅葉がとても綺麗で感動する程だった。村の奥へと付いていくと紅く塗られた大門が見えてきた、そこで南は立ち止まった。
南「えーと、何処から話聞けばいいのかしら…。」
大神「まぁそうだな…事の発端はあの〝八雲　紫〟が俺の目の前に

来たことかな？」
そして俺は南に全ての事情を話した。（1話～3話を参照）
南「それで刀の力で性転換しちゃった…と？」
大神「そう、だから俺は電光　光の成れの果てだ…とにかく名前は、えと…電龍　大神って呼んでくれ。」
南「そう…とりあえず…お、大神と呼ばせてもらうわ、よろしくね。」
大神「よろしく、にしてもココは何処なんだ。」
南「そうね、まずはそこから説明する必要があるわね。」
南「ここは幻想郷、人間と妖怪が住まう場所…プラス私達みたいな獣人と獣人の妖怪が住まえる場所。」
南「ここにはいくつもの場所があり、今私達がいる所が夕幻町…そして人間の里、紅魔館、永遠亭、白玉楼、地図に載っていることが様々よ。」
大神「なるほどなぁ…えと、その白玉楼（はくぎょくろう）って何処にあるんだ？」
と言った瞬間南は人差し指を上げた。
大神「え…1、えと、マジでどこ何処？」
南「上よ、冥界にいるの…もし良かったら行きましょうか。」
南「実は見掛けは人間の里に見かけた村…でも実はココも冥界なのよ。」
すると謎の階段に辿り着き南は登りだした。
南「ここから登っていくと白玉楼に行くわ。」
大神「マジで上んの…山とか勘弁してくれよ？」
南「冥界なんだから山に登るわけないでしょう？」
2時間後、南達はまだ階段を登っていた。
大神「な、なんだよこれ…年寄りに優しくねぇ階段だな…。」
南「あんた、まだ17じゃない…。（汗）」
すると白玉楼が見え、門にあるドアを叩いた。
南「南よ、開けて頂戴！」
と呼びかけた瞬間ドアが開き、女性が出てきた。
???「お久しぶりです、南さん…そちらの方は？」
南「私の友人よ、名前はでん…電龍　大神って言うの。」

妖夢「はじめまして、白玉楼へようこそ電龍さん…私魂魄妖夢（こんぱくようむ）と申します。」
大神「はじめまして、俺は大神って呼んでくれいいよ。」
妖夢「はい、それで南さんどう言ったご要件で？」
南「このコね、貴方と勝負してみたいらしいのよ。」
大神「ヴェ!?」
妖夢「良いですね、大神さんは見たところ私と同じ侍みたいですし…どういう強さかかなり気になります。」
南「よし、決まり…妖夢と大神が戦ったらどうなるか…とくと拝見させて頂くわよ？」
大神（強引だなぁ…まぁいい、相手にとって不足はない…こういう奴は結構単純で同じパターンなのが多いんだ。）
大神（負けることは無いはずだ…）
大神「わかった、多少は手加減してやるから…見ててな。」
２人は妖夢が修行用に使っている場所に着いた。
すると、もう１人女性が亭の中から出てきた。
幽々子「貴方が電龍　大神ね、紫から聞いているわ…はじめまして西行寺幽々子（さいぎょうじゆゆこ）よ。」
大神「あいつから？」
南「知ってるの？」
大神「ああ、南を誘拐した張本人さ。」
噂をすると空間に隙間が開き、紫が顔を出してきた。
紫「それは聞き捨てならないわねぇ、実はあれあの子が行きたいって直接言い出した事なのよ？」
……
大神「ゑ？」
大神「あれれー聞いてた話と違うぞー。（棒）」
南「えと…その刀持ってこっち来ないで…怖いです…（震え声）」
大神「俺は南が何も言うことなしに、誘拐されたって聞いて必死になって戦ったって言うのに～？（激怒）」
南「やめてください死んでしまいます。」

大神「待て、逃げるなぁ！」
南「ごめんなさーい、みんなに言うの忘れてたの～（泣）！」
大神「ごめんで済むなら警察もいらねーよ！」
南「ヤメロォー死にたくなァい（泣）！」
南「俺のそばに近寄るなぁあぁぁ（泣）！」
幽々子「何あれ…。」
紫「天然さんよ。」
幽々子「ごめんちょっと言っている意味が分からない（汗）。」
３０分して、南と大神は息切れをしてもう走れない状態だった。
幽々子「あなた達走りすぎよ…ただでさえ南はあんまり体力なって言うのに…なんで息切れするまで走ったのよ（汗）。」
南「だって怖いんだもの…不死身で不老不死と言っても流石斬り殺されちゃうわ…。」
大神「と、とにかくそれは追々、１対（サシ）１で話そうか（汗）。」
大神「さてと、ルールはどうする？」
４人（回復早っ！）
大神「？」
妖夢「え、えと…じゃぁ…少しでも刃が首、もしくは胴や腕に当たったらそこで負けということでどうでしょう。」
妖夢「いわゆる剣道みたいな物です。」
大神「いいね、やろうか…剣士同士どういう強さかをお前に教えてやるよ。」
続く

剣士

???「あやや！」

一眼レフカメラを持った彼女の目の前に1個の弾幕が落ちてきた。

だがそれがどうしたと言うようにそれを素早く華麗に避けてみせた。

???「一体なんの騒ぎですか…。」

1人の一眼レフカメラを持った女性は、砂利の剣道へと現れた。

その時にはもう既に勝負は始まっていた、妖夢の服はボロボロになっており体中に僅かだが傷が出来ていた。

しかし大神の方はかすりともしておらず、まるでそこら辺を散歩したような感じだった。

南「文じゃない、久しぶりね？」

文「どうも南さん、毎度お馴染み・新聞記者射命丸文（しゃめいまるあや）です！」

幽々子「丁度よかったわ、今回妖夢とあの子の事記事にしてもらえないかしら？」

文「誰です、あの獣で狐みたいなのは？」

南「私の友達、電龍　大神。」

文「電龍　大神さんですか、ちょっと変わった名前ですね。」

南「それ私の時にも言わなかった？」

文「いやいや、とんでもない貴方のは他にいない名前だったからですよ。」

文達が話している間に、妖夢が吹っ飛ばされ壁にめり込んでしまった。

幸い、骨に異常はなく直ぐに出られた。

だが、妖夢はこのままだと勝てないと思いある切り札があることを思い出した。

大神「どうやら、5戦やって5回俺の勝利って所かな？」

大神「ほぼ我流、俺もそうだが…伊達にその白玉剣を使い回している訳だな。」

大神「だが、隙だらけだ…これじゃまだまだ初心と変わらない。」

妖夢は自分の内ポケットに隠していたスペルカードを出した。
妖夢「確かに…白玉楼の剣術指南役庭師であるけどで、半人半霊で、お化けとか怖いけど…。」
妖夢「私には、そんなものはあんまり無い！」
南「変身カード…。」
幽々子「どうやら本気になったようね、さぁ思う存分屋敷を荒らさない程度に暴れなさい。」
妖夢「勿論です、幽々子様！」
南「どうするの、大神…もうここで使う訳？」
そう、実は大神には色々と秘密がある。
だが南はそれを何故か知っていた、それはよほど危険な存在だからだ。
その時大神は思い出した。今自分が顔につけている眼帯のことに。
冥界、階段に上がっている時の頃。
南『いい、大神…今の貴方はいつ光の能力が現れてもおかしくないわ。』
南『下手をすれば、幻想郷がこの世から消える可能性もあるの。』
南『だから、私が思うに…発症場所はその紅くなっている左目よ、オッドアイになってるのは自分でも気付いてたでしょ？』
大神『あ、ああ…でも片目から発症することなんてあるのか？』
南『大いにあるわ、だからこれをあなたにあげるわ。』
といい裾から取り出したは、真っ黒な海賊が使っていそうな模様が入っていない眼帯だった。
大神『なんだよ、ただの眼帯じゃねぇか。』
南『これはただの眼帯じゃないわ。』
南『これは彼女を封じ込める魔法を掛けているの、風呂と寝る時だけ外していいわ。』
南『必ず勝負してどうしても使わなきゃ行けない時や、どうしても負けそうな時以外は外しちゃダメよ。』
大神『わ、わかった、肝に銘じるよ。』
南『必ずよ。』

大神が思い出している隙に妖夢は突然手を空高くてっぺんへと上げこう言い放った。
妖夢「私はあなたに勝つ、斬れ無いものなどあんまり無い！」
妖夢「幽玄『超死回生』！」
妖夢がスペルカードを唱えると、服の色が深緑色に変色し顔に左目に傷らしき紋章みたいな跡ができた。
すると妖夢が急に前に飛び出してきたと思ったら真後ろに周り、大神の首の項の所に刀を当てようとした。
しかし、大神の刀が妖夢の刀を止めてしまった。
それも冷静に、正確に。
大神「なんだ、俺が本気になんなくても勝てそうじゃん。」
妖夢「馬鹿な…私の一撃を刀で止めるなんて、これは楽しい勝負になりそうですね！」
大神「来るなら来な、今まで手加減してきた分…さっさと終わらせてやるよ。」
大神が先頭切って前飛び出した。その速さは先程の妖夢以上に速い。
そして背後へと回り、刀を振ろうとした瞬間妖夢の刀が大神の刀を止めた。
妖夢は背中に隠していた刀をもう一本抜き、大神の胴から頭まで斜め上に切ろうとしたその時。
大神「おいおい、俺がこの刀1本で勝負しに来たとでも？」
大神「実はここにもう一本あんだよ。」
大神はそう言うと、腰につけていた刀を見せてきた。そして妖夢はあることに気づいた。
左ある刀は確かに1本だけしかないが…右に僅かだが刀が見えた。
妖夢（まさか、やられる！）
大神（この溜め攻撃は1発でないと上手く決まらない、しかしそれがミスでもしたら俺は斬られてしまう。）
大神は刀を抜くのを少し躊躇していた。
妖夢はやられると思っていたが、やられないと確信し安心した。

そして胴に到達しようとしていたその時。
大神が妖夢の隙をつき刀を抜き攻撃を弾いた。
当然、両者の刀は場外へと飛ばされ南達の前に刀が刺さった。
妖夢「そ、そんな馬鹿な！」
大神「やるねぇ、俺の刀をぶっ飛ばすなんてな。」
大神「よし、今度はこっちのターンだ。」
南「ずっと俺のターン状態はやめてあげなさいよ？」
大神「そこまで酷いやつじゃねーよ。」
すると大神の攻撃が始まった、最初は妖夢にとってはどうって事ない程の攻撃だったがどんどんと素早くなり、次第に妖夢には焦りと余裕が消えていた。
ついには妖夢は息が切れるほど疲れ切っていた。
妖夢（こいつの隙をつくんだ…そうしないと確実に負ける、今も力で押し負けてしまっているし…。）
妖夢（考えろ、考えるんだ私。）
しかし、攻撃は強まるばかり。ここまでやると自分の刀が持たないと妖夢は考えたが同時に攻撃パターンがわかってきたのか隙が妖夢には見えてきた。
大神「おいおいどうしたんだよ、どうして攻撃してこない。」
大神「ずっと俺が刀振っててもも意味ねーぞ？」
妖夢「いや、意味なんてあるね…貴方の弱点はそこにある！」
妖夢（そう、きっとそこだ…足で刀を掴んで斬りかかってくる時その体勢に入る時に少し時間のロスがある、そのあとは速くてまるでダンスでもしているかのように攻撃をしてくる。）
妖夢（でもそこなんだな、弱点は！）
それに気がついた妖夢は大きく刀を振りかぶって横に振った。
目掛けた場所は、大神の足だった。
しかし、その攻撃は一瞬にして防がれてしまった。
その反動で刀が下に落ちてしまった。
妖夢「なっ！」
大神「悪いがそこは弱点じゃない、まんまと引っかかったな。」

妖夢「いや、まだだ！」
大神「…。」
２人共違った刀を持ち刀を首に近づけた。
妖夢「ッ―…ウッ―。」
大神「刀返してもらおうか。」
と言われた瞬間、妖夢は大神が持っていた刀を大神に返し大神は妖夢が持っていた刀を妖夢に返した。
幽々子「引き分けね。」
大神「いや負けたわ、刀を持ち替えた際俺の刀を使って呪いかかっているのにも関わらず…マシな顔して俺に俺の刀を近づけた。」
南「またそんなこと言って、前も他の奴と勝負してそういった時あったじゃない。」
紫「やはり、他のものが刀を持つと気が動転しそうになるのね…やはりその刀幻想郷の中でも１番危険なものじゃないのかしら？」
妖夢「まぁ、適わない相手だったし私の負けということで良いですよ…ですがまた今度貴方を越すことが出来るように頑張って再び勝負しに行きますよ。」
大神「おお、そん時は正々堂々と勝負しような。」
南「今度は大神が目標になったわね。」
幽々子「私はその方が嬉しいわ、あの子が成長する度にどんどん前へ進んでいっているんだもの。」
南「私のしもべ達もあの子みたいに強くなってくれないかしら？」
大神「そろそろ帰ろうぜ、どっと疲れたわ。」
南「そうね、今日は面白い勝負が見れてよかったわ。」
紫「そうね。」
幻想郷　幽幻村　ＡＭ３：２５
南「ここがあなたの家よ、ずっと使ってなかった神社だから次の持ち主ずっと探してたのよ。」
大神「へぇ～、って神社って住んでいいのかよ（汗）。」
南「大丈夫大丈夫、貴方は神様として崇められるんだから当然よ。」
南「それにもう１つ家あるしね。」

大神「ていうことはつまり、ここは神や妖などの集まりなのか？」
南「簡単に言うとそうだけど、突然実現した神話上の獣とか伝承などで伝えられたもの達が住まう場所…私達がこの力を得たのも偶然とは言えないわ。」
大神「どうしてだ、だって気にするような所あったか？」
南「だって考えてもみなさいよ、私達が幻想郷（ここ）に落ちて直ぐに能力や今まで全く使えなかった力がついていた。」
南「貴方は不死身…いや少なくとも不老不死にもなっているし、私は全く技や能力なんて全く持っていない極普通の女子高生だったのに…いきなり幻想郷に来て水、いや液体を操ることが出来るようになってるし。」
大神「まぁ、確かに偶然とは考えにくいわな…でもそれは朝になってからでも考えられるだろ。」
南「え、いやでも―。」
大神「南は、なんでも物事を考え込んで全く話聞かないやつだからな。」
大神「少しは休んで、朝から忙しくなるかもしれないだろ…だからその話はまた今度しよう、な？」
南「う、うん…。」
南は少ししょんぼりし、大神の住まう場所を紹介しようとしたその時。
大神は南のことを呼び南が振り向いた瞬間。
南「え？」
大神は突然手を頭に乗せ南が頭に身につけていたバンダナを撫でた。
大神「やっぱ犬みたいで可愛いな、お前…。」
南「／／／!?」
大神「さてと、寝床見してくれよどういうのか気になるからさ。」
南（わ、私胸きゅんしたの…光に!?）
南（ど、どうしよ～、撫でてもらっやちゃったぁ～／／／。）
と顔真っ赤に照れて両手を顔に当て首を横に振り続けていた。

大神がどうしたと声をかけると南はずくに素に戻りなんでもないと答えた。
南の案内でついて行くと、６ＬＤＫ程ある広場に連れてこられた。
月がきちんと見え、刀を置く台も綺麗に置かれていた。タンスも茶道が出来る用具も新品だった。
南「ここが寝室よ、貴方にはピッタリな場所ね。」
南「ここなら不満は出ないはずよ、明日、あの大きなお寺で会議をやるの貴方も同席してね。」
南「それとお迎えと着替えは私の優秀なしもべちゃんが来るからよろしくね。」
大神「え、お前の下っ端が俺の家の鍵開けに来んの？」
南「あら嫌かしら、でも１人でまだここ歩けるかしら？」
大神「いやそうなんだけどさ、下っ端には全員に持たせてんの？」
南「いいえ、私の優秀なしもべだけよ。」
大神「そうなのか、随分立派な村だな。」
南「それじゃ、おやすみなさい大神。」
大神「おやすみ。」
次の日、朝の日差しが眩しかったのか大神は起きた。
すると、色違いの巫女用の服が布団の隣に畳んで置いてあった。
大神は寝巻きから用意された服に着替え、刀ようの台から自分の刀を出し刀を洗っていた。
文「新聞でーす！」
大神「俺新聞なんて頼んだ覚えないんだけど…。」
文「ここでは新聞は毎日配る事にしてるんですよ、ここにはそれなりに電子機器などが発達していますが【てれび】という機械などはまだここにはないんです。」
文「なら、新聞を書けばいいじゃないと思ったんです。」
大神「なるほどねぇ、まぁ火で家の中明るくしてるんだ…わかる気がするけど。」
大神「所であんた、名前は？」
文「申し遅れました、私新聞記者の射命丸　文と申します。」

大神「よろしく、俺の名前は―。」
文「知ってますよ、電龍　大神さん…妖夢さんと勝負して5回も勝利した狐さん。」
大神「なんだ、知ってんのな…。」
と新聞を開くと大神の記事が乗っており、大神は驚いたが少し照れた。
大神「べ、別に載せろなんて言ってないだろ、な、なんで載せたんだよ。」
文「照れてますねぇ、幽々子さんと南さんのご指名でお書きさせていただきました。」
と話していると、ドアをノックする音が聞こえた。
大神は返事をし、出していた刀を刀用の台に戻した。
文「それでは私はこれで失礼しますね～。」
???「大神様、誰かいらっしゃっていたのですか？」
大神「ああ、ただのカラスさ気にすんな。」
???「そうですか…最近不法侵入する物が多くいるので、いつも以上に警戒しておかないと村の秩序が保てないんです。」
大神「そうなのか、えと、あんたは？」
桜「申し遅れました、私…潮風（しおかぜ）桜（さくら）と申します。」
桜「種族はスカンクではありますが、近くの山のレンジャーをさせて頂いております。」
桜「今日は南様のご指名で、朝の晩餐をしてから会議をするという事なので…幽幻寺までお連れ致します。」
大神「そうか、ありがとう。」
桜「いえ、貴方は南様のたった一人の友人ですので…逢瀬のままに。」
大神（すげぇ、こいつ…礼儀正しすぎて迫力ってやつに負けちまう…。）
大神（これが、南が言っていた優秀なしもべ…守ってくれそうな感じが凄い…自分の身は自分で守れるけど、南はそういうことはあまり出来ない…そういうことで南や俺の護衛をしているって訳か。）

桜「どうされました、そんな深刻な顔して…何か思い悩んでいることあるようでしたら私で良ければご相談に乗りましょうか？」
大神「いや、なんでもないよ…にしても優秀なしもべか…君凄いな…俺より年下だろ？」
桜「えと、今年で１４歳になりました…しかしそうでもありません、私まだまだ他と比べると半人前ですから、もっと強くならないとそう思って南様の下に付いておりますので。」
大神「半人前か～、そうしたら俺もまだまだだよ（汗）。」
桜と大神が話しているうちに、桜が持っていた懐中時計を取り出し時間を確認した。
桜「ああ、まずい遅刻だ！」
大神「ええ？」
桜「朝の晩餐、実は朝の７：３０からだったんです！」
桜「急がないと～、空飛べば…いや私まだ飛び方わからないし～…。」
大神「…仕方ない、時間止めて幽幻寺まで行くか。」
桜「ふぇ、時止められるんですか？」
大神「まぁ、ほんの1時間ちょいかな～…最近この能力使えるようになったから…あんまり長いこと使えないけど。」
と言いながら、指を鳴らし歩き出した。
桜「あれ、特に変わりないような…。」
大神「時計見てみ？」
桜「あれ、７：４２で止まってる…秒針も全く動いてない。」
大神「周りのやつも止まるからあれだけど、俺に触れていると時は止まらないんだ。」
桜「咲夜さんみたいですね…まさか貴方の能力って、他人の能力やスペルカードをコピーする能力では…。」
大神「さくや？」
桜「紅魔館にいるメイドさんです。」
大神「へぇ…。」
しばらくして階段が見え、桜は登りだした。

大神（また、年寄りに優しくない階段…。）
桜「どうされました、階段登るのはお嫌いで？」
大神「うーん…まぁね、特に長い階段はちょっと登りたくないなぁ…。」
桜「今度、空の飛び方お教え致しましょうか？」
大神「え、マジで？」
桜「幻想郷では空を飛ぶのは当たり前ですので、もし良ければお暇な時間にお教え致しますよ？」
大神「それじゃ、今度お願いね。」
桜「承知致しました。」
そして、大神達は幽幻寺の玄関前に着き下駄を脱いだ。
桜「どうぞ、お上がりください。」
大神「ありがとう。」
桜「食卓場は４階でございます、４階までご案内致しますが時止めは解除をお願い致します。」
大神「流石に、ずっと時止めしてたら瞬間移動したような感じになるし…誰も動かないからな。」
再び大神は指を鳴らし、こう言い出した。
大神「さて、案内してくれ。」
続く

探索

桜「失礼します、電龍　大神様をお連れしました。」
と襖を開け、声をかけた。
???「遅いですよ、今７：４２ですよ？」
桜「申し訳ありません、以後気をつけます。」
???「まぁ、今回が１回だけなんやしそれぐらい良いやろ？」
南「さぁ、席につきなさい…みんな食べているわ。」
桜「はい、ただいま。」
と言うと、２人は空いている席に座り箸を持った。
大神「凄いなぁ、南この中で女王様なのか…。」
南「まぁ、私は５代目みたいだからね。」
???「七色狼家が先にこの幽幻村を作った御方なんです。」
???「そこから２代目がこの幽幻寺を建てたんだ。」
大神「へぇ～、なかなか歴史ある所なんだなぁ。」
南「でも私は女王でも無いわ、みな平等で暮らしてる訳なんだしみんなが王様みたいなものよ。」
大神「あ、そうなの…（汗）」
ＡＭ８：３０、皆が食事を終えると一斉に巻物が配られた。
南「さて、今回の会議の事なのだけれど…先に、新しくこの晩餐に加わっていた彼女…今日から一緒に同じ屋根の下で暮らすことになったから会議を始める前に自己紹介から。」
大神「俺の名前は、電龍　大神だ…南の友人だけど普通に接してくれ。」
大神「よろしくな。」
大口「はじめまして、私大口（おおぐち）　真神（まがみ）です。」
クシナダ「はじめまして～、クシナダ、ヒック、ですよ～。」
大神「朝から酒飲んでんの？」
南「この子は麦・米などの神様でお酒なんてしょっちゅう飲んでるのよ。」
大神「ナンダソレ、ていうかそれっていいのか？」

南「神様だから大丈夫（キリッ。」
大神「あーハイハイ、凄いね～（棒）。」
大口（ツッコミを放棄した!?）
鵺「えと、あてのこと紹介しても良いか？」
南「あ～、どうぞ自己紹介して。」
鵺「あての名は、鵺（ぬえ）て言うんや…もしあての歌ぁ不気味言うんやったら承知せぇへんで。」
大神「歌い方は人それぞれだし、そんなこと言わんよ。」
銀閣・金閣「そして、金閣と銀閣…２人で姉弟なんです。」
南「そして、改めまして…妲己の生まれ変わり七色狼　南よ。」
大神「みんな獣人なんだな…。」
南「当たり前よ、ここは鳥・猫・狼・狐などが住まう場所…神話上の獣人から伝承から伝えられている獣人までいる、だから幽幻村って言うのよ。」
大神「それは昨日聞いたけどさ、こんなに居るとは思わなかったわ。」
南「それはそうよ、人間の里より２倍以上の数の獣人達がここに集まってきてるんだから。」
南「人口、人間の里の５倍よ？」
大神「マジで？」
鵺「せやで、だから私達がここの秩序守らぁんといかんねん。」
南「さて、みんな自己紹介が済んだかしら…それではこれより幽幻村の町内会議を始めることとするわ。」
そして、時間が経つにつれて時間はＡＭ１０：００になっていた。
大神はとりあえず訳も分からず聞くしかなかったが、とにかくこの村のことをいち早く知ろうと努力していた。
しかし、聞い取れない部分が多くよく分からないことも多かった。
そして議論タイムに入り、皆は駄目なところを長所し、他のものは駄目な所は却下する。
大神はただその現状を見届けるしかなかった。
桜「はじめましてな事をはじめてするから、どうしていいか分から

ないって感じですね。」
大神「まぁ、それもそうだけど…この現状を見てるとさよく思うんだよ。」
桜「何を思うんです？」
大神「こうやって争ってるヤツらって、アホくさく思えるんだよねぇ。」
大神「確かに村の秩序の為に必要なことかもしれないけどさ、俺にはこの会議無意味だと思うんだよね…別に俺はまだひと握りにしか見てないんだけど、ここまで発展してるんだったらホントに必要だと思った時だけ会議をやるってことした方がいいと思うんだよ。」
大神「それに、緊急会議を朝の晩餐のあとにやってるんだろ…ならこの会議いらないと思う。」
すると皆は何も言わずに大神の方を見ていた。
大神「え、なに…（汗）。」
南「確かに大神の言う通りだけど…こうするのが日課になっちゃってね、みんな辞められないのよ。」
南「みんなそんなに大神の事じっと見ないであげて、大神はこの会議初めてだからしょうがないのよ許してあげて。」
鵺「まぁええけど、いきなりこんなことゆーて驚いてしもうたわ。」
大口「まぁ、大神さんの言う通りかもしれません正直これは意味がある事なのかと思いましたし…本当に必要な時にしか会議はしないことし、交流会みたいな感じでお話出来れば私は良いと思います。」
大神「…では賛成のあるもの。」
と言うと１１人中１０人が手を挙げたが、１人は手を挙げなかった。
それは鵺だった。
鵺「さっきはあんなことゆーたけど…私は反対や、ここに来てまだ間もないってゆーのに勝手に仕切ってこの会議が意味ないなど…少し勝手すぎるとちゃうか？」
大神「気に触ったなら別にこの事は無かったことにするけど、そんなに嫌かい？」

鵺「私は嫌や、この会議は村の発展の為に全て提案を出しまくったんや…そんな会議を辞めるなんて、私が頑張って考えに考えた事が全て水の泡になってしまうなんて、ごめんや。」
南「鵺…気持ちはわかるわ…でも賛成多数、異議あるものは1名だけ…決まってしまったものはどうしよも出来ないわ。」
南「…賛成多数、反対1名ということでこの会議は本当に必要だと思った時だけ、緊急の時に行うということで異議はないわね。」
と言うと皆は異議なしと言った。
しかし、鵺は割り切れなかった。
だがそれも無駄なことだった、いくら南に伝えた所でまた会議を行われる訳もないと鵺は考えたのだ。
鵺は出来る限り割り切り自分の心の中に怒りを閉まった。
幽幻寺、出入口前。
南「とんだ会議になっちゃったわね、やっぱりあなたが居ないと始まらないかも。」
大神「そうか～、俺は別にこんなことして意味あんのかなって思っただけだし。」
南「まぁ、それもそれで光…いや大神らしいけど。」
大神「さてと～、霊夢の所行くか…霊夢の着物返さないと借りっぱなしじゃ気持ち悪いからな。」
南「それはいいんだけど、あんた霊夢の神社知ってるの？」
南「それに飛び方も知らないでしょ、どうやって行くのよ？」
大神「うわわわっ！」
大神がジャンプし飛ぼうとした瞬間、バランスを崩し石階段から落ちてしまった。
南「全く言わんこっちゃないわ…。」
南「大丈夫～？」
すると大神は黒いコウモリみたいな翼を広げ飛んでいた。
大神「すげぇこれ飾りじゃなかったのかよこれ（汗）。」
南「いや、知らなかったの!?」
大神「だってね～。」

大神「とりあえず地図あるし、そこまで行けば大丈夫だろ。」
南「それなら、行ってらっしゃいな。」
と南が言った瞬間、大神は前に進んだが加減がわからなかったのか人間の里まで吹っ飛んでしまった。
大神「うわあああああああああああああああああああ!??????」
桜「大丈夫デスカネ（，ω，）？」
南「大丈夫デショ（，ω，）。」
人間の里の奥まで吹っ飛んでしまった大神は、頭が地面に埋もれていた。
すると、魔理沙が現れ大神に声をかけた。
魔理沙「だ、大丈夫か～？」
大神「ムグー（抜いてー）！」
???「何やってるのかしらあの子…（汗）。」
魔理沙「しょうがねーな、アリスお前も手伝ってくれ。」
アリス「はいはい、抜くわよ～！」
２人「せいのっ！」
２人が大神を地面から引っ張りだそうとしたその時、骨が引っ張られ腰骨がいくつか骨折した。
当然痛みはあまり無かったが、地面に埋れている自分には苦しくて息が出来なくなってしまいそうだった。
大神「ムグームグー、ムグムグムグムグー（痛い痛い、早く抜いてくれー）！」
２人「もう１回、せいのっ！」
大神「あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛（激痛）！」
大神はようやく出れたが、白目を向いたままその場で倒れてしまった。
魔理沙達はその悲惨な現場を見るしかできなかった。
大神「ユ、ユルサン～、マジデユルサンゾ～、オマエ～（震え声）。」
魔理沙「お前が抜けって言うからだろ、助けてやったんだからお礼くらい言えよな。」

大神「ありがとうございます（震え声）。」
アリス「大丈夫、随分顔色悪そうだけど？」
大神「大丈夫ばない、骨が戻らない（泣）。」
アリス「何言ってんの？」
魔理沙「ああ、なんかこいつ不死身で不老不死らしいから怪我しても強制的に治癒するらしいぜ。」
アリス「何それ、あなたホントに妖怪なの!?」
大神「やっと戻った…そうだよ、一応妖怪さ。」
アリス「にしても、不死身で不老不死の妖怪ね…つまり歳も取らないわけでしょ？」
アリス「まるで妹紅みたいね。」
大神「もこう？」
魔理沙「そういえば、お前が行こうとしてた方向って霊夢の神社だよな？」
大神「そうだよ、昨日は随分世話になったし…そのお返しとして巫女服と霊夢の手伝いをしようかなと。」
魔理沙「巫女服は別に大丈夫だろうけど、霊夢の手伝いはやめとけ…霊夢は必ず1人でやりたがる、そういうのは余計なお世話って言うもんだ。」
大神「そうか、とりあえず霊夢に巫女服だけでも返そうと思ってな。」
魔理沙「どうせなら一緒に行こうぜ、私達も丁度博麗神社に行こうと思ってたんだ。」
大神「んじゃ行こうぜ。」
と言った大神は魔理沙と一緒に博麗神社に行こうとした。
しかし、博麗神社ではかなり殺伐とした事になっていた。
霊夢「…。」
霊夢（九尾で侍の女狐に明らかに偽名だってわかるような名前、そして怪しく恐ろしくなりそうな異常なまでの妖力…。）
霊夢（雰囲気とか性格的には異変を起こしたりはしなさそうだけど、いつ何時異変を起こすかわからない…ホントに妙な感じだわ。）

霊夢（これは紫に頼るしか無さそうね…。）
霊夢「紫。」
紫「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャジャーン。」
霊夢（いつになくテンション高いわねコイツ…。）
紫「それで何かしら？」
霊夢「電龍　大神についての事なんだけど教えてくれないかしら？」
紫「…それは無理よ、私もやっと彼女のことわかってきたって言うのに…貴方に教えなければならないわけ？」
霊夢「別に、変なことは言ってないでしょ？」
霊夢「教えなさいよ…話せる限りでいいから。」
紫「…分かったわ、出来る限り教えてあげる。」
と言うと紫は口を開け、霊夢に話した。
しかし、何を言ったのかは当の本人に聞かなければわからない。
だが、霊夢は今までの表情が一変し怒りが込み上げてきた。
霊夢「何それ、それってあの―」
と言う前に3人が博麗神社に辿り着き、霊夢の名前を呼びかけた。
すると紫は隙間を閉じ何事がなかったような状態になった。
魔理沙「お、いたいた。」
アリス「さっき誰か居なかった？」
魔理沙「気のせいだろ、とにかく行こうぜ。」
霊夢「あら、二人共お揃いで…それに新しい妖怪もね。」
アリス「ちょ、私は別に！」
魔理沙「そうだぜ、私達はそういう訳じゃ…！」
大神（アリマリ頂きましたっと。）
大神「えと、霊夢にこれ返したくてさ。」
と言うと大神は霊夢が着させた巫女服を渡した。
霊夢「ありがとう…いま幽幻村に暮らしてるんだって？」
大神「そうさ、南には感謝してしきれないけど…霊夢と魔理沙達はもっと感謝してんだ。」
魔理沙「そりゃ嬉しいぜ、私はただ地図上げただけなのに。」

霊夢「別に下着のままで幻想郷を出歩かれたら嫌だっただけよ。」
霊夢「まぁ、新しい住民なんだし…今度宴会やるから、いいお酒持ってきてよね。」
大神「お、宴会やんのか…それじゃ有難く参加させて頂くよ。」
すると階段の方から足音が聞こえ、神社は静まり返った。
帽子が見えてくると、大神は頭痛とめまいを起こし頭を抱えた。
そして大神に1部の記憶が蘇ってきた。
そう、それはヤンデレ・スカーレットの対戦中だった頃の記憶だった。
それを思い出した瞬間いきなり殺意が湧いてきた。
アリス達は大丈夫かと聞いたが、大神は大丈夫だといい刀を抜き”ヤンデレ・スカーレット”によく似た吸血鬼に飛びかかった。
???「え、ちょ!?」
刀を振り落とし斜めから左に斬ろうとしたが、その刀は受け止められてしまった。それもナイフでは絶対受け止められないはずの攻撃を一瞬のうちに。
???「何をするおつもりで?」
大神「なんだ知らねーのか、こいつは俺達をこんな目にした張本人…俺がこんなにもキレてるのにも関わらず、こいつは”ヤンデレ・スカーレット”だ、アイツを見て殺意が湧かねー訳がねぇ!」
???「な、何故その名前を…!?」
レミィ「それに人違いじゃないの、私はお…ヤンじゃないわ…現在紅魔館当主の”レミリア・スカーレット”よ!」
大神「は?」
大神「え、なに…ってことはお前、あのヤンデレ・スカーレットの妹か!?」
レミィ「そうよ、勘違いは困るわ!」
大神「…なんかごめんなさい、あまりにも似てるからついやってしまった…。」
レミィ「酷いわぁ!」
大神「それにしても良い腕だな、ナイフの扱い方をよく知ってる…

あんた名前は？」
咲夜「咲夜…十六夜咲夜（いざよいさくや）、と申します。」
霊夢「恐ろしい奴ね全く…。」
霊夢「それで、私達に何の用？」
レミィ「実は出来ないことかもしれないけど…貴方に頼みたい事があるの。」
霊夢「…久しぶりね貴方が私に頼み事なんて。」
霊夢「いいわ、話して頂戴。」
レミィ「ええ…実は、私のお姉様…ヤンデレ・スカーレットを探して欲しいのよ。」
魔理沙「ヤンデレ・スカーレットって元紅魔館当主の？」
レミィ「ええ、ねぇ魔理沙…何かないの目撃情報とかでもなんでもいいの！」
魔理沙「待て待て、その前にどうして居なくなったとかそういう理由がないと私達も話様がねーんだよ。」
レミィ「そ、そうね…わかったは話すわ。」
レミィ「事の発端は、紅い霧の異変から始まったの。」
私は、幻想郷を自分のものにしたかった…その時は太陽が憎たらしかった時の頃だったし、仲良く暮らして過ごしたかったから。
そこでお姉様…いやヤンは”紅魔館会議”をやろうと言い出した。
フランが牢屋に閉じ込めてたのが余程気に食わなかったのね…そうして紅魔館会議が始まった。
その頃の私はみんな仲良く暮らすのは幻想郷を支配という考えしかなかった。それは人間が太陽の下で暮らしていけてるのが羨ましかったのもあってそう言ってしまった。
しかしヤンは仲良く暮らす為に幻想郷を支配なんて馬鹿げてると言った。
それに反発して私は反論した。
そしたらひっぱたかれてしまった…そしたら怒って私が居なくなってしまえと言いヤンは出て行ってしまった。（悪魔と天使　裏・幻想紅魔郷を参照）

レミィ「ホント、馬鹿よね私って…皆が仲良く暮らす為に幻想郷を支配なんて、皆が仲良く暮らしたいのなら色んなコト思い付いたはずなのに…。」
レミィ「今思えば、自分が憎く感じるわ。」
霊夢「貴方…本当に変わったわね、前の異変の時より家族思いになったって言うか…自分がしたことを反省するようになったって言うか…。」
レミィ「これもカリスマのお陰よ！」
大神「今ので台無し…。」
魔理沙「そういえば…前にヤンデレが私んちに来たぜ？」
レミィ「そうなの、もっと深く教えて頂戴！」
魔理沙「紅魔館で嫌なことあって家出してきたはいいが、行く宛もなくて森をさ迷ってたって言ってた…とりあえず泊めてやって、次の日の朝起きてみたらヤンデレがいなくなってて紙だけ置いてあったんだよ。」
咲夜「そしたら？」
魔理沙「昨日は世話になったわ、あとは1人でも暮らしていける…1晩泊めてくれてありがとうねって書いてあったぜ。」
大神「うーん、とにかく情報が少なすぎる…もっと多くでも情報があればいいんだが…。」
アリス「そこは魔法の森でしょ、ならそう遠くには行ってないと思うけど。」
霊夢「でもヤンデレが消えたのは、紅い霧の異変…17年も前よ？」
大神「となると生死も問われるわな…スマンが死んでいたら俺は何もしてやれない、レミィ…お前に報告するだけだ。」
レミィ「わ、わかった…別に生死が問われても構わない、私はただヤンに謝りたいだけだから…。」
咲夜（今さりげなく、お嬢様のことをレミィと呼んだわよね…？）
続く

発見

レミリアがそう言うと大神は下へと歩き出した。
魔理沙「何処に行くんだぜ？」
大神「このまま帰るのも暇になるだけだし、少し幻想郷を探索しようと思ってさ。」
レミィ「貴方…！」
大神「あ、そうだ…レミィに自己紹介すんの忘れてた…俺は電龍大神、侍だ。」
大神「じゃーな。」
魔法の森
大神「にしても、魔法の森から行方晦ましたのか…流石にもう魔法の森にいるとは思えないが…。」
大神「でも…あれか、霧の異変からもう年経ってんだし前に来たってことは…いやでもそれは無いか。」
???「♪～。」
大神「あ、おーい。」
???「どーしたのだー？」
大神「この写真のヤンデレ・スカーレットってやつ、どこ行ったか知ってるか？」
???「うーん、知らないなぁ～。」
大神「そうか…ありがとう…そうだ、君の名前は？」
ルーミア「ルーミアだよ～、そっちの名前は？」
大神「電龍　大神、最近幻想郷に越してきたんだ。」
ルーミア「そーなのかー。」
大神「そーなのだー。」
２人「わはぁ（＊。▽。）ノ」
大神（何やってんだ俺は…。）
ルーミア「さらばなのだー。」
と言うとルーミアはどこかへ走りに行ってしまった。
しばらく探索していると森の奥へと歩いていた。現在１５：３６、

そろそろ大神の腹が泣く頃だった。そして疲れたのか木の丸太の上に座ってしまった。
大神「あ～、腹減った…。」
大神「さてと、南から貰った特性きびだんごでも食うか。」
と言うと大神が袋からきびだんごを出した色は黒くまるで黒団子みたいな感じだった。すると大神を呼ぶ声が聞こへ、立ち上がった。
大神「アリスじゃん、どーしたよこんな所で。」
アリス「どーしたって、貴方がウチの近くにいたから何やってんのかなって。」
大神「あ、ここら辺てお前ん家の私有地なのか？」
アリス「いや別に私有地ってわけじゃないんだけど、こんな奥まで来てまだ探索してるの？」
大神「まぁ…な、色々借りがあるし…。」
アリス「それってどんな借りなの？」
大神「あんまり言いたくないなぁ…。」
と言うと大神の顔が少し薄暗くなり拳を深く握った。
アリス「…まぁ、聞かないでおくわ…。」
アリス「さて私はまだやる事があるから、それじゃあね。」
と言うとアリスは森の奥へと行ってしまった。
大神「…変なアリスだな、まぁいいか。」
5分後、大神は結んでいた袋を内ポケットにしまい探索始めた。
大神（なんか、変な味の黒団子だったなぁ…まぁいっか不味かった訳じゃないし）
大神（しかし、どうしたものか…手掛かりか何かあればいいんだが、今ある情報からして魔法の森にいた…だがそれだけじゃ見つけようがない。）
大神「どうするべきか…。」
???「うわあああああああああ!!」
すると遠くから叫び声が聞こえ奥の方から落ちた音が聞こえた。
大神「さ、叫び声!?」
大神「こっからだと近い…急ごうまだ助かるかも！」

と言い音が聞こえた所へと走っていった
すると目の前で殺されそうになっていた人がいた、もう1人はナイフを持っており紅いフードを被っていた。
???「それじゃ、いただきます！」
???「やばい！」
状況が理解できなかった大神だが、直ぐにそのナイフを止めた。
瞬間ナイフと刀が当たり、ナイフがどこかへ飛んで行った。
???「ッ――！」
大神「間に合った…大丈夫か～？」
???「あ、あんたは？」
大神「俺は電龍　大神、侍さ」
???（まさか…あの時のやつ？）
大神「って紹介してる暇もねーよな…あいつはナニモンなんだ？」
???「あいつは、あんたも知ってる通り赤ずきんさ。」
大神「赤ずきんなのに、なんでお前を狙ってくんだ。」
???「こいつは普通の赤ずきんじゃなくてブラッド赤ずきんって言うやつで、スペルカードが全然効かない！」
???「でも物理攻撃なら効果はある。」
大神「やけに物知りだな…まぁいい、任せとけ直ぐに片付けるさ。」
???「こ、殺さないように…な。」
大神「難しいこと言うな…。」
大神（ていうか今の声…まさかな。）
ブラッド「貴方が私に血をくれるの？」
大神「悪いがあんた、殺すなという注文はどうやら無理そうだ。」
ブラッド「あははは、いただきまーす！」
すると、大神の腕にナイフが刺さり少しダメージを負った。
しかし、赤ずきんがナイフを抜くと直ぐにその腕は治癒していった。
そして大神は刀を斜めから振り下ろし、時が止まったように早く斬り付けた。
ブラッド「な…何が起きた…の？」

そう言うと、赤ずきんは消えていった。
大神「勝った。」
大神「もういいぞー、上にいるのはわかってんだ、出てきてくれ。」
と言うとそいつは下へと降りてきた。
???（こいつ…やっぱりあの斬り方はそうだ…外の世界で1戦勝負した奴に違いない…向こうは全くわかってないみたいだが。）
???「なんでわかった？」
大神「妖力さ、お前にはちょっとした妖力を感じる…それを感じ取ってな。」
大神「そういえば君の名前聞くの忘れてたわ。」
ブラック「あ、ああ、ヤ…ブラックだブラックって呼んでくれ。」
大神「よろしく…ってなんで木の影に隠れてんだ？」
ブラック「み、巫女が怖いんだよ～…。」
大神「はぁ？」
自分の服を見てみると黄色の巫女服を聞いてたことに気づくが、自分は侍だと必死に問いかけた。
大神「いや、俺は侍だ…お前に何も危害は加えない。」
ブラック「嘘だ!!!」
大神「いやホントだって（汗）。」
ブラック「俺のそばに近寄るなぁァァァァ（ 。 Д。）！」
大神「（ ・ω・、）」
するとブラックの方から腹が鳴った。
ブラック「（ ??・ ―・?? ）」
大神「腹…空いてんのか？」
ブラック「うん…。」
大神（うーん、このままヤンデレ・スカーレット探すわけにもいかねーし…仕方ない今日は中断しよう、そのままにしておくのも可哀想だ。）
大神「うちに来るか、簡単な料理しか出来ないけど…人間の里まではこっからだと全然近いから、付いてきな。」
と大神に誘われると大きな大門を潜り大玄関の方へと辿り着いた。

大神「あれ、なんだ桜居ないのか…まぁいいか開けちゃっても。」
ブラック「…。」
ブラックは思わず息を飲んだ。
大神は大きな村に住んでおり、その中の神社を1つ使っていいと言う旅人には優しい気遣い。彼の中には優しさと温もりを感じたのだ。
村には大神みたいなケモノばかりで、人の姿は全く見えなかった。
ブラック「凄い所だ、村中ケモノだらけだ…。」
大神「ここは幽幻村と言って、伝説上の獣達や伝書で伝えられた獣がここに集まってくる村なんだ。」
大神「飯食べれば少しは落ち着くだろ？」
すると大神が住んでいる神社へと辿り着いた。
しかし、大神が開けて入るとブラックは入るのを躊躇った。
大神「どうしたブラック、遠慮せず入れよ。」
大神「…なにか妙な物があったか？」
ブラック「い、いや…和風な家初めて見たからちょっと…。」
大神「あぁ…こういうとこ入んの初めてか、昔の日本人は畳の上で食事したり寝たりしてたんだ。」
ブラック「へぇ～…。」
ブラックが大神の家に上がると、大神は直ぐに料理をし始めた。
料理が得意なのか、包丁を取り出すと野菜を繊細に切りフライパンを取り出し卵を割った。
ブラックは何が出来るのかと少し楽しみにしていたが、大神が不味いものを出すのでは無いかと思い不安がった。
大神（お揚げも作りますか。）
数分後、料理が出来上がりちゃぶ台の上に乗っかった。
ブラック（た、卵焼きにお揚げにキャベツの千切り上げ…そして鮭…。）
大神「さてと、骨は全部取ってあるから遠慮せず食べな。」
大神「いただきます。」
ブラック「…こ、これが日本文化…（ボソッ）。」
大神「ん？」

ブラック「い、いやなんでもない…いただきます。」
ブラックは箸が少し持ちづらかったためか手が震え、箸を1本落としてしまった。直ぐに拾い上げ真っ先に卵焼きを口に入れると、美味しさが広がり懐かしい感じがした。
すると、ブラックは徐々に涙を流し始めガツガツと出されたものをペロリとたいらげた。
ブラック（う、美味い…こんなに美味しい料理食べたのは何ヶ月ぶりなのだろうか…ここまで美味しい物がこの世に存在するなんて思わなかった…。）
ブラック（しかし…電龍　大神、ただの侍だと思って甘く見てた…料理が出来てしかもこんなに美味しい物が作れるなんて…将来、いい人生を歩みそうだ。）
大神「そ、そんなに泣くことじゃねぇだろ…そんなに美味かったのかよ（汗）。」
ブラック「あ、ああ…さ、最高さ…グスッ。」
大神「な、なんか照れるなぁ…そう言われると…（照）。」
2時間後、料理を終えたブラックは空を見上げ夕陽を見ていた。
その時もうすぐ大神の皿洗いが終える頃だった。
ヤンデレ・スカーレットは見つからなかったが、おかげでブラックと言う珍しい妖怪と出会え良い一日になったと大神は思った。
そして幻想郷はあまり退屈しない場所だと、大神の中に確信が生まれた。
だが、まだわからないことがあった。
ブラックはどの種族で、どういう能力を持っているのか等が彼の中に疑問が生まれた。
大神「なぁ、お前の種族ってなんなの？」
ブラック「俺？」
ブラック「俺の種族は堕天使だよ、能力は無限コンティニュー。」
大神「なにそれ…ゲームですか？（汗）」
ブラック「能力だよ、の、う、り、ょ、く！」
大神「嘘だろお前、チートじゃねーか（汗）！」

ブラック「チートじゃねーよ、至って普通の能力だ（必死）！」
大神「ありえねぇ…。」
大神「まぁでも…幻想郷なら当たり前の事か…。」
と大神が言うとふとヤンデレ・スカーレットの事を思い出した。
大神「なぁ、ブラック…。」
すると大神が懐から写真を見せこう言ってきた。
大神「”この写真のヤンデレ・スカーレットって言う吸血鬼少女、見てないか？”」
ブラック（ッ―！）
ブラックが動揺し、しばらく話すことが出来なかった。大神は何かあるなと思いもう一度問いかけた。
大神「見たとか、何か情報とか…なんでもいい教えてくれないか？」
ブラック「…ら…ない…。」
大神「ん、落ち着いてもう一度言ってくれないか？」
ブラック「知らない…見たことも無いなぁ、この姿ってあの紅魔館に居る姉妹のやつ？」
大神「ああ、そうだけど…知らないならごめんな、変な事聞いちまって。」
ブラック「大丈夫さ、”あんなやつ”俺は…。」
大神「”あんなやつ”？」
ブラック「いや、なんでもない…ごめんなわざわざ飯まで貰っちまってさ。」
大神「別に大丈夫さ、また腹が減って困った時はうち来いよなまた何かご馳走させてやるからさ。」
ブラック「それは嬉しいな…それじゃありがとな！」
と言うと空を飛んで幽幻村から出ていった。
すると入れ違いで桜が大神の方へと飛んできた。
桜「大神様、先程の妖怪は？」
大神「ああ、堕天使のブラックだ…腹減って困っててな流石に見捨てる訳にも行かなかったから食べさせてたんだ、別に妙な事はしてないから大丈夫だ。」

桜「そうなんですか…しかし南様が凄い殺気と凄い妖力を大神様の家から感じたとおっしゃっていたので、もしかしたらと思い飛んできたのですが…安心しました、しかし先程のブラックと言うお方は警戒しておいた方がよろしいですね。」

大神「やっぱり恐ろしい妖力を感じ取ったのか？」

桜「ええ…他の妖怪とは違った妖力を感じ取れたので…大神様もお気をつけを。」

大神「あ、ああ…。」

桜「って、大神様…危ないと思ったら普通に連れて来ないでくださいよ…（汗）。」

大神「いいだろ飯くらい（、ε、）。」

続く

情報

大神は、未だにブラックの事を忘れる事が出来なかった。
しかし、彼から手紙が届いた。
その手紙にはこう書いてあった。
『俺を心配しているみたいだが、心配しなくても大丈夫だ。』
『現在、自分に合った仕事に付いており食事なども安定した暮らしをしている。』
と記されていた。
しかし、住所などは教えておらず何故送られてきたのかしばらく理解できなかった。だが手渡しなら住所などは知らなくても、直接渡せば何の問題もないと思いホッとした。
大神「にしても…どの仕事に付いたんだ？」
大神「肝心なところが書いていないが、そのうち分かるか。」
と思い、ヤンデレ・スカーレットを探し始めた。
次は人間の里を探索しようと大神は思った、何故ならばほとんどの妖怪は人間の里以外買い物かもしくは噂のお店などに来る所はありえないのだ。
人間の里に行く前、突然誰かの声が聞こえた。
その声はブラックだった。
ブラック「よぉ～、偶然だな大神。」
大神「ブラック、仕事の帰りか？」
ブラック「え…う、うんそうだよ。」
大神「？」
大神「…。」
大神は何を疑問に思ったのか、人間の里より違う方角へ向かい竹林へと降り立った。
ブラック「どうしたんだよ、こんな所に来ちゃってさ。」
大神「なぁ、ブラック…昨日お前に食わせた料理のメニュー覚えてるか？」
ブラック「え…お揚げでしょ？」

大神（こいつ…やはりブラックじゃない、ブラックならその一品一品覚えているはずだ…それに狐臭いニオイが嗅がなくても分かるし、それにこいつの妖力はブラックよりかは強くはないがよく分かる。）
大神「他は？」
ブラック（？）「他？」
大神「ああ、俺が食わせてやったのはお揚げだけじゃなかったはずだ…昨日涙流しながら食ってたんだから、それくらいは覚えいるはずだろ？」
ブラック（？）「何言ってんのさ、私は”普通に”大神から貰った料理食べたでしょ？」
大神「しらばくれんな、お前”ブラック”じゃねーな…ブラックなら自分の事を俺と呼ぶ、男なら当たり前だ。」
大神「それに、俺が覚えている限り”泣きながら”美味そうに食べてやがった…それを”普通に”食べた？」
大神「メニューくらいは言えるやつだと思ったんだが…お前は俺が昨日食わせた料理を知らずに、俺が食いそうな物を当てずっぽうで言った。」
大神「それで本物か偽物かわかる事もあるんだぜ、それに少しは臭いを隠したらどうだ…狐のニオイがプンプンするんだよ、お前から。」
ブラック（？）「口を開けばグチグチと…まぁそこに私は惚れてるんだけどね。」
するとブラックの姿をしていた謎の妖怪は、黒色の髪をした黒い狐でとても美しい姿をしていた。
大神「それがお前の正体か。」
???「そうよ、私は魔法の森の住民…黒い狐、月夜（つきよさくら）桜貴方と同じく侍よ。」
大神「ブラックに何をした…。」
月夜「感がいいのね、土に還えしてあげたのよ。」
月夜「もしかしたら、魔法の森でその子の死体がまだ転がっているかもね
。」

大神「何ッ！」
大神「聞いてもどうなる事じゃねーけど…どうしてブラックを斬り殺した…。」
月夜「あの子、貴方にばっかりくっついて！」
月夜「許せない…貴方とくっついていいのは私だけなのに！」
月夜「今の気持ちをここで言うわ！」
月夜「私は貴方の事だけを見ていた、貴方が外の世界にいた事も知ってる…貴方の名前が偽名だってことも知ってる…その刀が付喪神がついていることも、貴方が好きな物も、貴方の事もすべて！」
月夜「だから、私のことも好きになって…電光　光ちゃん！」
大神「!?」
すると突然刀を抜き大神に襲いかかってきた。
月夜「って言ってもどうせ断るんだろうし…斬り付けて分からせてしまえばすべて私のモノ…。」
大神（こいつ…ヤンデレか、相当やべぇぞ。）
大神（俺がもし丸腰のまま人間の里に行っていたら…多分数十回は死んでたな。）
大神「悪いが、俺も暇じゃねーんでな…ぱっぱと片付けますか。」
大神「だが…お前がしたことは、許せねぇ…1回自分がした事を教えてやらねぇとダメそうだし、1戦勝負してやるよ。」
月夜「大丈夫よ、痛みなんて感じる暇もなく斬り付けて…あのヤンデレ・スカーレットの事なんて探させないんだから。」
月夜が笑いながら、大神へ再び襲いかかってきた。大神は流石に危険だと思ったのかバク転して月夜の一撃をかわした。
そして大神が反撃。だが月夜は刀でその攻撃を防御し、弾いた所を横腹から斬りつけようとした。
しかし、大神は刀でその攻撃を防御した。
大神「悪いが…こんな俺を好きになっても意味ねぇぜ、それに俺はお前の事は全然知らない。」
大神「それで愛してもらいたかったら、普通は俺にもお前の事教えるだろ？」

月夜「私は知っているわ、貴方の胸の大きさもね。」
大神「!?／／／」
月夜「何を恥ずかしがってるのよ、でもそこが好・き・♡」
大神「やっぱりお前やべぇ奴だよ！」
と言うと大神は回し蹴りをし、月夜が体制を崩した。
月夜「貴方の性別だって知ってるの！」
すると大神に月夜の刀が横腹に刺さってしまった。
だが、大神は表情をひとつも変えずに月夜の太ももを斬り付けた。
大神は余裕そうだった。
それはそうだ、彼女と彼だと強さと体力の違いが信じられないほどにあったからだ。
大神「脚にダメージ…これで攻撃パターンが限られたな。」
大神「いくら俺に精神攻撃をしても無意味だ、俺の事が好きなら…辻斬りだってこと、知っといた方が身のためだぞ？」
月夜「はぁ…はぁ…それなら貴方にも忠告しておくわ…私だって侍よだから、これくらいのこと肝が据わっていてもおかしくないのだけれど？」
大神「ほぉ～、言ってみ…その忠告。」
月夜「私の左手見てみなさいよ。」
すると月夜の手には刀が握られていなかった。
月夜「上にあげておいたのよ、つまり貴方の方向からして背中ら楽に殺せるってわけ。」
月夜が上にあがっていた刀に能力を念じると、刀に重力が無くなり大神の方へと刃が落ちてきた。
しかし、大神は鼻で笑い落ちてきた刀を弾き飛ばした。
その刀は月夜に見える位置に落ちたが、月夜が刀を取りに行く時には横腹を斬られていた。
月夜「あ…あはは…やっぱり貴方には勝てない…なぁ…。」
月夜「惚れて…正…解…だ…わ。」
すると月夜は大神の目の前で倒れてしまった。
すると、隠し持っていた江戸時代に使われていたキセルン式煙草に

火をつけ煙草を吸い始めた。
大神「ふぅ～…しょうがねぇ色々と知りたいこともあるし、今日も人探しは中止だ。」
幽幻村、月夜は大神の家にいた。　包帯は脚と腹に巻かれており布団の上で寝ていた。
その場には、潮風　桜と南そして大神がいた。
月夜が気がつくと、見慣れない場所にいる事に気が付き南が幽幻村の人間だと気づくと、無いはずの刀を抜こうとした。
月夜「な、ない!?」
月夜「ッ～！」
桜「落ち着いてください、傷口が開いてしまいます。」
月夜「…な、何故私を助けたの…私は貴方に嫌われてしまったのに…。」
大神「まぁ、色々と聞きたいことがあるし…南も何故か俺の事が好きなのか知りたいみたいだから、ちゃんと質問には答えてくれよ？」
大神「じゃ、１つ目の質問だ…殺しはしないから安心しな。」
大神「何故、ブラックを殺した？」
月夜「あの子が貴方にばっかりくっついて…妬ましかったのよ。」
大神「だからってブラックを殺していい理由にはならねーよな？」
月夜「でも、私は！」
大神「俺が好きなのは分かる、けどな…ブラックがいない時に俺とくっつけばいい、俺はお前の事を全く知らない…しかし、お前が俺の事が好きなのは認める。」
大神「あいつは死んでない。」
月夜「なっ！」
桜「ええ、大神様の指示で魔法の森へと向かいましたが…ブラックの死体は全くありませんでした。」
大神「何故あいつの死体がないのか、それはあいつの能力で消えた事が判明した。」
月夜「”無限コンティニューができる程度の能力”…。」
大神「おお、よく知ってるな月夜　桜…全てを見通す程度の能力、ブ

ラックの事なんでも知ってそうだな。」
月夜「…そうでも無いわ。」
大神「そうか…それじゃ２つ目の質問だ。」
大神「何故俺の本当の名を？」
月夜「全てを見通す程度の能力は貴方の過去も見通すことが出来る、前貴方が博麗霊夢の神社に来た時私は隠れてみていた…そして貴方の過去を見えみたのよ。」
大神「そしたらお前にとっての条件が揃ってて、俺に惚れた訳か。」
月夜「ええ、その刀にもある１種の呪い…いや付喪神と言うのかしら、それが取り憑いているのも知っているわ。」
月夜「貴方も大神の事が好きなようね、でも私がいる限りそれは―。」
南「それ以上言うと貴方の首を掻っ切ることになるわ。」
南「私だって、その気になれば貴方のことを殺ることが出来るわ。」
月夜「…。」
南「…大神、質問に答えたんだからそろそろ帰した？」
南「もう動けそうだし、足の傷はまだ浅いし歩けるでしょ？」
月夜「え、ええ…。」
月夜「でも…私、まだ…。」
南「帰りなさい…。」
南は月夜に威嚇し、その場の空気が凍りづいた。
月夜「…また来るわ、今度は貴方と勝負することにするわ。」
南「その時はタダじゃ済まないわよ？」
月夜「それまでに力を付けておけばいいのよ、それじゃ…。」
と言うと月夜は空へと飛んで行った。
現在１４…３０、かなり月夜の相手をしていたので時間が刻々と過ぎているのに大神達は気が付かなかった。南に呼ばれ南と桜しか知らない湖まで連れてこられた。
南「貴方…ホントに面倒事持ってくるわね…。」
大神「おいおい、あれは俺のせいじゃねーだろ？」
南「まぁ、そうだけど…あのヤンデレ・スカーレットを探してるの

もそうだけど…何故”あの子”にこだわるの？」
大神「”あの子”って、月夜　桜の事か？」
南「ええ、あの子どう見ても普通じゃないし…私も狼だから嗅覚で分かるのよ。」
大神「血なまぐさい臭いがだろ、ひょっとしたらあいつは俺以上に…。」
南「まぁ、その事は霊夢達（あの子）に任せておけばいいわ。」
南「それにしても、貴方が侍に説教とは珍しいわね。」
大神「…あいつは、本当は嫌われて来たんだと思うんだよ。」
南「嫌われて来た？」
大神「あいつは全てを見通す程度の能力を持っている…噂で聞いた地霊殿の主と同じような能力、それを憎んでいて人に嫌われたか…もしくは”辻斬り”ということを皆は恐れて近づかなかったか…その二択のせいで自分はああいう生き方しか出来なくなってしまっているのではないかと…ね。」
大神「過去はどうあれ俺は侍だ、けれど…電光　光が辻斬りだったって事は忘れ去られることは出来ないし、記憶は全て光の物だ…無実とは言いきれないからな。」
南「だから、新しい人生を送ろうと必死にここに慣れようと頑張って…。」
大神「ああ、俺は過去を忘れたい…でも何故かな…この魂は長くは続かないと思うんだ。」
南「え…どうして？」
大神「まだほんの1％だが、光と融合し始めてる…もしくは刀に戻ろうとしている。」
大神「だから、出来るだけ長く南を女として…そして自分が物にした出来事や価値観を思い出を…残しておきたい。」
すると、南は大神の胸に手を置きこう言った。
南「…大丈夫よ、融合したとしても貴方の記憶は消えることもないし…私達の記憶から忘れ去られることなんて有り得ないもの…電龍
大神は生き続ける…たとえ融合してしまっても、光の魂が光本体の

身体の元へ戻ったとしても。」
続く

疑問

ヤンデレ・スカーレットを探して3日目。
未だに大神は彼女を見つける事が出来ず困っていた。しかしまだまだ探索の余地がある、そう思った大神は人間の里へと飛び立ちヤンデレ・スカーレットを探し始めた。
人間の里を出来る限り多くの人に話、ヤンデレ・スカーレットの事について問いかけた。
だが、皆は口を揃えて”知らない”もしくは”あんな妖怪いなくてもいい”と言うばかりだった。それはそうだ幻想郷は妖怪と幽霊などが住まう場所、極普通の人間に取って妖怪や妖精などは邪魔でしかなかったのだ。
それに、人間は妖怪には恐怖をしながら幻想郷を暮らしてきた。
それを思うと心が痛くなった。
でも、今の大神は妖怪そのもの。くよくよもしてられない。
今度は人間の里に訪れていた、妖怪や巫女にヤンデレ・スカーレットの事を問いかけた。しかし、大神が話しかけた人間が発した言葉と同じ知らないの一点張りだった。
大神「やっぱり、みんなヤンの事目撃したとか…ヤンのことについてとか全然知らない…やっぱりもうここにはいねーのかな。」
大神「東風谷早苗とかにも聞いたけどやっぱり知らなかったし…。」
大神「藤原妹紅って奴には竹林で月夜と勝負したの言ったら怒られちゃったし…。」
大神「他に情報ねーのかねぇ。」
とだべていると、ブラックがマジシャンの前に勝負をしていた。
その後ろには霊夢と見しらの男性がゲームに参加していた。
どうやらポーカーのようだった、大神も参加しようか迷ったが流石に今回は暇がないと思ったのかその場を去ろうとした。
しかし、突然霊夢から魂みたいのが現れ自分の事がわからなくなってしまっていた。
大神「なッ!?」

大神「霊夢、大丈夫か、霊夢！」
霊夢「貴方は…？」
???「駄目だ、完全に記憶が消えちまってる！」
大神「あんたは？」
霖之助「森近霖之助、魔法の森で質屋をやってる。」
大神「俺は電龍　大神、最近越してきたんだ…って自己紹介している暇もないな、近くに飲み屋とかないのか？」
霖之助「団子屋ならすぐそこにある、どうするつもりなんだ？」
大神はそう言うとふと思いついた。霊夢は記憶を吸い取られてしまい気分も良くない、そう思った大神は直ぐに団子屋に連れていき横にさせた。
そして、出来る限り霊夢にマジシャンが行っているポーカーを見せないように色々な事を話した。
ブラック「大神！」
ブラック「霊夢を…頼んだぞ？」
とブラックが大神に言うと、大神は親指を立てグッドサインを出した。
霖之助「やめろ、ブラック、相手の記憶を全て奪う能力…お前まで記憶を吸い取られてしまう！」
大神「いや、こーりん…奴に任せてみようじゃないか…あいつの目見てみろよ。」
すると、霖之助はブラックの目を改めて見てみると目が本気だった。だが霖之助の目は曇っていた、それはブラックがそこまで自信を持って自分の記憶を賭けてまでポーカーをやったことがあるのか、ポーカーに勝てた事があるのか霖之助には疑問ばかりだった。
しかし、大神は霖之助にこう言い出した。
大神「安心て、任せておこう…あいつの気高き覚悟とダイヤみたいな勇気に俺達も賭けてみようじゃないか。」
スペード「ほー、君は賭け事がお好きなようだね…私は、スペードと申します…是非ポーカーに参戦してみませんか？」
大神「生憎だけど、俺はこいつの面倒で暇じゃないしそこまで賭け

事には強くないんでね…それにお前はブラック相手で充分なんじゃないか？」
スペード「ふっ、そうですか…残念です…。」
スペード「それでは、始めましょう…Ｏｐｅｎ　Ｔｈｅ　Ｇａｍｅ（ゲーム）を始めよう！」
スペード「それでは…カードを切らせて―。」
ブラック「ちょっと待った、そのトランプカード…俺に切らせてくれないか？」
スペード「…よろしいでしょう、その代わり貴方の記憶を取るより…そこにいる方々も記憶を貰うことにしましょう。」
ブラック「なら、俺が勝てたら霊夢の記憶を戻してもらうぜ。」
スペード「勿論です…しかし勝てたらの話ですが…。」
すると、ブラックはカードを切り始めた。カードを切り終えると、スペードがカードを配り、それを終える。
スペードが先にカードを５枚取りスペードはカジノ用のコインを渡した。
スペードはこう言い出した、コインは全部で１０枚、１ゲームに付き１枚、コールで賭け金を増やす事もアリにしましょう。
やり方は貴方が知っている通りですと。
スペードとブラックには相手同士のカードは見えない、勝てるか勝てないかの運試しゲーム。ブラックは勝てるという絶対的な自信がある、それはスペードも同じ。しかし、これから行うゲームは既に勝敗が決まっていた。
スペード「それでは…私はレイズと行きましょう。」
ブラック「チェンジだ。」
スペード「もうチェンジですか、もしや貴方本当は初心者なのでは？」
ブラック「いいから、そっちのターンだぜ…早くコールするか決めてくれ。」
スペード「…フッ…まぁこれなら、早くケリが着きそうですね…勝負と行きましょう。」

ポーカーは配られたカードで相手の勝敗が付く、それに1コイン賭けることをコール。2枚以上のコインを出すとレイズ、1人が勝負に出た場合相手もそのカードを見せ合う。しかし、相手側の権利が終えていない場合は勝負に出ることは不可能。カードによってはノーペアからロイヤル・フラッシュまでありハンド、つまり役がどれだけ強ければ強い程勝負の見分けが着きやすい。ポーカーは、心理戦。どれだけ平常心で相手にどこまでプレッシャーを与え勝ちに持っていくかも勝負の別れ目なのだ。

これに現在行っているとおり、賭けが入ると凄みがまし盛り上がるゲーム。ブラックは1ベントスペードは2ベント、コールした。

勝負。

スペード「フルハウスです、勝負ありましたね…当然貴方のカードはワンペア…もしくはツーペア以外は有り得ないのですから。」

ブラック「ツーペアがどうしたって？」

ブラックの手札にはストレート・フラッシュ、スペードよりも強いカードを差し出した。これを見た全員が驚き、これにはスペードも驚きを隠せなかった。ただ一人を除いては。

それは大神だった。

大神はポーカーやチェスなどのボードゲームやカードゲームの賭け事を得意としない、それはババ抜き以外は大神が負けて勝負にならないからだ。

だが、多少だが疑問に残る点がいくつかあった。

1つ目は、2枚チェンジしてどうやってストレート・フラッシュを出せたのか2つ目は、何故わざわざレイズして賭けなかったのか。

この2つの疑問が、大神を悩ませる結果となった。

スペード「嘘だ、有り得ない…私の予想ではツーペアだったはずなのに!!」

ブラック「勝負は最後までわからない、あまり早とちりしない事だな。」

スペード「ま…まぁいい、このゲームは5回勝負…あと残り4回残っている。」

スペード（その間であと４回勝てばいい話だ、焦るな！）
その後も、３回勝負しスペードはスリーカードやフォアカードを出したがブラックはストレート・フラッシュやロイヤル・フラッシュばかりで全く勝負にならなかった。
すると、突然スペードがこう言い出した。
スペード「…イカサマだ…。」
スペード「ブラック、お前イカサマをしているな!?」
ブラック「何言ってる、俺がいつどこでイカサマしたんだ？」
スペード「と、時々カードをチェンジしているだろ、そこに１番下のカードを引き上の カードを私に来させる…すると私にはワンペアやノーペアしのカードしか与えられない、それがお前のイカサマだ！」
ブラック「そんなこそずるい事するか？」
ブラック「俺には、負けが怖くて結果にこだわってるようにしか見えねーけど？」
ブラック「さぁ、Ｌａｓｔ（最後の）Ｇａｍｅ（ゲーム）…お前にハンデを与えるよ。」
スペード「ハンデ？」
ブラック「そう、俺が１戦負けたらその時点でお前の勝ち…それがお前に与えるハンデさ。」
ブラック「俺が優しいやつで良かったな。」
最後の再戦、スペードの残りベント数は３枚。ブラックは１６枚ある、ここでスペードは挽回しにコールした。今度は今まで以上にさらに慎重に１枚コール。しかし、ブラックはカードを変えたり手札を持ったりはしなかった。ただ、それ以上の自信だけが彼に大いにプレッシャーをかけた。
スペードが、何故手札を持たないと言うとブラックはハンデだとしか言わない。ブラックはようやくレイズ、賭け金は５枚出した。
霖之助「お、おいブラック、何故わざわざここでコインを５枚出した!?」
霖之助「何故コインを返す!?」
大神「大丈夫、ここまで勝ってきたやつなんだ…信じよう。」

霖之助「さっきから大神はそればかりだな、ブラックが1戦でも負けてしまったら俺達の記憶が奪われるんだぞ!?」
大神「俺はそんなに賭け事には強くないタチだが、あいつはやる…あいつなら勝てる気がする…今の俺の勘がそう言っている。」
大神「それに、ここまで来てあいつの負けはない…もうこれで4勝、あいつの頭脳には驚かされる…頭の中でどういうカードなのか読めているみたいなんだからな。」
スペード「ならばコールだ。」
ブラック「俺もコールだ。」
最後の勝負。
スペードはストレートフラッシュを出した。ブラックは、これ以上のカードは出せない。当然スペードの勝ちだ、そう思うとスペードは笑みを浮かべ笑いだした。ブラックの方へ顔を向けると、ブラックの目の前に1本ずつ酒瓶を置いた。それは彼にとって最大の勝利を意味する。
それを思ったのか2人は絶望した。記憶を取られ自分が何者か、それがわからなくなってしまう。大神は深く恐怖した、その酒瓶の蓋を開ければ大神の魂は抜かれ”彼女”が起きてしまう。大神に取ってはそれは幻想郷の終わりを意味していた。
しかし、ブラックは冷静にカードを見てニヤついた。
ブラック「ククク…あはははは!」
スペード「な、何がおかしい…お前はもう既に負けている、もしや吸い取られるのが怖くて笑う事しか出来なくなったかぁ!?」
ブラック「ばーか、よ~くお前と俺とのカードをよく見てみろ。」
スペード「何ぃ、これ以上カードは出せないはず当然―。」
スペードはカードをよく見ると、驚くべき光景が。
ブラックがロイヤル・ストレートフラッシュと言葉を放った。再びスペードはそこに置かれていたカードをよく見るが、現状は変わらず2人の勝敗を決める事となった。そこの机の上に乗っかっていたブラックが出したカードはロイヤルのストレートフラッシュだった。大神達は希望を持ち、ブラックの勝負に喜びを感じた。すると霊夢の

魂が本体の方へと帰っていった。
スペード「馬鹿な、そんなことがあるなんて…私のマジシャン歴の中で最悪な事だ、何故そんな手札が作れるんだ…何故!?」
ブラック「お前の敗因は、早とちりだ…負けを恐れてなんでも結果で持っていこうとし、結果俺に勝てなかった。」
スペード「お、教えてくれ…何故貴方はストレートフラッシュやロイヤル・フラッシュばかり出せたのか…。」
スペード「私の理解を超えている…教えてくれ。」
ブラック「…それは自分で考えるこったな。」
スペード「ッ―!」
霊夢を起こしたあと、ブラックはスペードから何かを貰った。
先がとんがっているように見え、ナイフだと大神は思った。
大神は、ますますブラックのことについて調べることにしたが霊夢に後で神社に来て欲しいと言われ言われるがままに。
霖之助には霊夢の面倒を見てくれたお礼に、気に入った物は1個だけ持って行っていいと言われた。
霖之助「それにしても、どうやってあんなにストレートフラッシュとかロイヤル・フラッシュとか出せたんだ?」
ブラック「簡単な話さ、やつは何回も自分でカードを切っていたおかげでどこがどうやったら完璧なカードが来るか完全に知り尽くしている、けど他人がカードを切ると当然あいつが思っていた通りにならずにカードがバラバラになる、相手を挑発させ勝たせる…でもあとから自分が勝つそんな当たり前のようにやつはポーカーをやり続けた、それを見破った、あいつは最初から大きなミスを犯していたのさ。」
ブラック「だから、ストレートフラッシュやロイヤルのフラッシュが出たんだ。」
霖之助「…な、なるほど…。」
大神「まぁ、要するにあいつは自分の思った通りの勝負展開じゃないと勝てないって事なのか…相当なやつだな。」
ブラックが魔法の森へと戻っていくと、大神は霖之助の質屋へと着

いて行った。
霖之助の質屋に入ると武器や外の世界でしかない機会など色々なものがあった。大神は自分に見合った物がないかと探した。
大神「なぁ…これって、電光家しかない…。」
霖之助「ああ、それ結構古い刀で江戸時代で使われていた刀なんだ。」
霖之助「でも、それはやめておいた方がいいと思うよ…以前使っていた人がこう言っていたんだ。」
霖之助「”こいつは呪われていて、触ったものは完璧魔物へと神化してしまう…”と。」
大神「そいつ、何人目なんだ?」
霖之助「刀を触れて魔物になってから3人目らしい、最初は悪い冗談かと思ったけど…前から視線を感じるんだ、その人は1度魔物になっていて刀を手放したら何かから解放されて身が軽くなったらしいんだ。」
大神「…面白い、有難くこいつを貰うことにするよ…俺だって今持ってる刀、何かが取り憑いているんだ…これくらい慣れっこさ。」
霖之助「止めはしないけど、ヤバくなったら処分したほうがいいと思うよ…これから霊夢に逢いに行くんだろ?」
大神「ああ、別に戦う気はないさ…大丈夫。」
といい、大神は霖之助の質屋から出て霊夢の神社へと飛んで行った。
空に飛んでしまえばそこまで時間は掛からず、およそ3分くらいで到着した。霊夢になんの用かと大神が聞くと、霊夢は何も喋らずただずっと大神を睨んでいた。２０分後、ようやく霊夢が口を開いた。
だが、大神はその言葉を聞くと衝撃を受けた。
霊夢「貴方…電光　光でしょ、外の世界で有名な辻斬りの…。」
それを堂々と言われ、大神は驚き動揺してしまい持っていた刀を抜こうとした。その瞬間で霊夢の決意は確信に変わった。
霊夢「やはり、そうなのね…でもその感じからして別人なのには変わりない、でも異変でも起こされちゃ…あなたを退治することになる

わ。」
霊夢「場合によっては、殺すこともあり得る…幻想郷を滅ぼされたくないしね。」
大神「な、何故わかったんだ…。」
霊夢「その刀でわかるわ、年々刀を作る人間が電光家が何代目と変わるのと同じにころころわかってるんだから…その人間もここ幻想郷に来ていて、妖夢の刀や里の侍もその同じような作りで売りに出されているの。」
霊夢「でも、その人は立派に刀が扱える物にしか売りに出さないの。」
大神「それは知ってる、誰でも振り回せるような刀じゃないし…普通の刀より創者物の刀は数十g以上重たいんだ。」
霊夢「それに、”季節刀・大神稲妻・雷”…創者はわざわざ名前をつける…代行が亡くなったら刀を処分されるか、保存されるか。」
霊夢「それしかないのよ、それにあなたの名前はなにか妙だから色々調べさせてもらったのよ…紫に。」
霊夢「電光　光、18歳高校生朝は巫女の仕事をしていて神社の掃除や売り場の店番をしているら昼間は普通の学生で優等生…誰よりも正義感が強く皆から親しまれている。」
霊夢「しかし、夜になる自分の刀を持ち悪人を裁きにいく侍…悪人を斬るうちに正義の辻斬りとまで噂され、罪の軽いものは寸止め程度…罪が重いものには裁きと変わった人斬りでもあった、でもそんな中1度ヤンデレに倒され性格が入れ替わってしまったわけね…いや紫が言うには半分性転換…かしら。」
大神「だからなんだ…俺はただやつを探してるだけだろ？」
霊夢「だからなのよ、しばらくはあなたのままたまけどもし、その刀に取り憑いている魂が電光　光だったならば…大神に乗り移ってヤンデレと貴方で幻想郷を滅ぼしかねないの。」
霊夢「だから、もしその時が来たら…いいわね？」
大神「…腹はくくってるさ、お前に何されようと…例え間違った方向に行ってしまったとしても…霊夢に殺されても構わないさ。」

といい大神は自分の村へと飛んで帰って行った
霊夢「…いい覚悟だけど、貴方が何を仕出かすかなんて目に見えている…私がいる事、忘れないでね。」
大神が村へと戻ると南が突然大神の家から飛び出して出てきた。
大神と南が叫ぶと飛び付いて強く抱きついて来た。しかし、前よりかは力は強くなかったが肋骨が粉々になっていく音が聞こえた。
大神が離せと言っても南は一向に離す気配がない。
南はやめろと言われれば手を離すが今回の南は何かが違かった。
大神「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！」
南「嫌よ～、会いたくてしょうがなかったんだから～！」
大神「痛てぇんだよ、離してくれ！」
南「大神～！」
大神「((^ ω^ ≡^ ω〈ギャアアアアアア」
すると、白猫の魔法使いが家から出てきた。
???「ごめ～ん、呪文の仕方間違っちゃって…恋の呪文しちゃったみたいにゃ。」
大神「はぁ、お前魔法使いなの!?」
大神「ていうかお前の仕業だったのかよ、こいつ引き剥がすの手伝ってくれよ！」
???「え～、後1分で治るんだから待ってなさいよ～。」
大神「その前に内臓まで出てきそうになるから～！」
すると、大神の口から血が出てきてしまった。
大神「は…早くしてくれ…はち切れそうなんだよ～。」
???「もう…せっかちな人ね～。」
すると白猫の魔法使いが魔法を唱え、南の手の力はすっと抜けていった。
呪文を唱え終わると、南は自分がしていたことに気づき謝り出した。
南「私ったらまた…ごめんなさいごめんなさい！」
大神「いや、悪いのはお前じゃねーし…そもそも魔法の実験なんて何しようとしてたんだよ？」

???「治癒能力魔法、1度傷をつけて治るか試してみたかったんだけどまさか恋の魔法だったとは思わなかったのにゃ。」
大神「まぁ…いいけどさ…今度から気をつけてくれよ？」
???「以後気をつけます…。」
大神「んで…お前名前は？」
???「あ…え、えと…。」
南「エヴァンっていうの、紅魔館のパチュリーと同じ魔女よ。」
大神「魔法使いの魔理沙と魔女のエヴァンね…やっぱりそういうのって変わり者が多いんだな。」
南「彼女は他の魔女や魔法使いよりかは有能よ、パチュリーより知識は豊富なんだから。」
エヴァン「た、大したことなにゃよ…パチュリーより強くないもん。」
大神「まぁ、でも魔女で自分から出来ないことから伸ばして率先してやってるいいことじゃないか。」
エヴァン「で、でも…。」
大神「強さなんて関係ないさ、努力した奴が強くなるんだから…世の中そんなもんだし。」
エヴァン「う、うん…私頑張るね。」
大神「おいおい、さっきの元気はどこいった…もっと胸張っていいんだぜ。」
エヴァン「あはは、大神凄い強そうだからちょっとびっくりして縮こまってたよ。」
続く

疑い

次の日、ヤンデレ・スカーレットを探してもう1週間立ち。幻想郷に居ないことが判明した。
何故ならば、村や神社等を探してみたがどこにもいないのだ。
仕方ないと思った大神は、紅魔館に行くことにした。
紅魔館には人間の里と幽幻村の近くで、霧の湖の方にそびえ立ってる。
幽幻村から飛べば、1分もかからずに着くことが出来るので飛んでいこうとした。
エヴァン「紅魔館に行くんでしょそれなら一緒に行こうよ、紅魔館はかなり広いし…最初ここに来た人はよく紅魔館で迷う事があるの。」
エヴァン「私なら結果紅魔館に行ってるし、図書館で借りないといけにゃい本があるからさ。」
大神「その為に本返しに行くのか？」
エヴァン「そうにゃよ、いわゆる物々交換ってやつかにゃ？」
大神「まぁ、あの館地下までありそうだしな…お願いするか。」
エヴァン「帰りは、咲夜に玄関まで送ってってもらってね。」
大神「なんだ、お前は一緒に帰らないのか…。」
エヴァン「パチュリーとお話するからさ、ごめんね。」
大神「別にいいよ、1人でも帰れるからよ。」
エヴァン「わかったにゃ、貴方は結果カッコイイしエスコートしてくれそうよね大神は。」
大神「おいおい、俺がいくら侍だからって俺に守ってもらうなよ。」
エヴァン「にゃはは、冗談よ本気に、した？」
大神「いや、流石に冗談なのはわかってたけど。」
エヴァン「にゃ～んだ、つまんにゃいの。」
と言うと、エヴァンは箒に跨り空へと飛んだ。
それに続いて、大神も空へと飛んだ大神とエヴァンは適当に面白い話をしながら紅魔館へ行った。

ブラックは魔理沙の家に行き魔理沙のきのこシチューを食べていた。
昨日の夜、大神は魔理沙の家に行ききのこシチューを頂きに来た。
何故魔理沙の家に行くのかと言うと、ブラックの新聞配達時に手紙を貰い魔理沙の家できのこシチューパーティーをやるから来て欲しいと書いてあった。
大神は常に暇だったので、飛んで魔理沙の家に着いた。
魔理沙「よぉ、来てくれたんだな。」
大神「まぁ誘われたんだから、参加しない訳には行かないだろ。」
魔理沙「そうだな、ありがとな。」
大神「いい匂いだな…シチューか？」
魔理沙「ああ、きのこシチューさ家の近くでいっぱいキノコが採れたからよりをかけて作ったんだ。」
大神「ほぉ～、もしかしてマツタケとか入れてる？」
魔理沙「もち、まぁ入って座っててくれよまだ他にも来るからよ。」
大神「それじゃ、有難く―。」
魔理沙「ただし、先にシチューに手は出すなよ？」
大神「なんだよ…ケチ…（、ε、）」
魔理沙「いや先に食うとか失礼に程があるだろ…（汗）。」
と笑いながら、話していたら霊夢やブラックが魔理沙の家にやってきた。
ブラック達が、魔理沙の家の中に入ると真っ先に霊夢が魔理沙に飯は何処だと攻めた。大神やブラックは霊夢が今まで見せない所を見せたので驚きを隠せなかった。ブラックはその霊夢の食いじに驚きを隠せなかったのか止めに入った。当然のこどく魔理沙も待てと言って霊夢を止めた。
それを見ていた大神は、その状況が面白く感じたのか笑いだした。魔理沙達が笑ってないで霊夢を止めてくれといい大神も参加した。
大神「こいつ、歯止めが効かなくなった犬かよ…どんだけ飯食いたかったんだよ（汗）。」
魔理沙「こいつ、飯の事になると幽々子以上に飯食うんだよ…多分

おにぎり1個1秒もかからずに食べれると思うぜ。」
大神「いやいやいや、有り得ねぇって！」
ブラック「そんなことより、早く食わせた方がいいんじゃないのか…霊夢がスライムみたいにへこたれてってるぞ？」
大神「ホントにこいつ巫女なのかよ…。」
大神「ちゃんと飯食ってんのか？」
魔理沙「そこん所は私にも謎でな、金も有るのかも不思議でしょうがないんだぜ。」
すると、魔理沙がシチューを台所から持ってきてテーブルの上に置いた。
2人「おぉ、美味そうだ！」
大神「それに、この香り…マツタケ以外の匂いがする…あまり嗅いだことの無い匂いだな、どんなの入れてんだ？」
魔理沙「バグタケとかだったかな…毒はあるけど一時的なもんだから他のきのこは毒も全くねーし大丈夫だぜ。」
大神「ホントかよ…まぁ魔理沙のことは信用するぜ？」
幽幻村・幽幻寺。
南は1人で出されていた昼食を食べていた。しかし、もう1皿南の目の前に置かれていたのだ。南はその皿には一切触れず無表情で食事をしていた。すると、何もない所から隙間ができ紫が出てきた。
南「あら、昼の晩餐に遅れるとは…何かあったのかしら？」
紫「外の世界でちょっとね、珍しく1人じゃない？」
南「皆、自分の国へ戻っているのよ…向こうも向こうで色々あるみたいだし。」
紫「それで、どうなのかしら最近の光ちゃんは…いや、今じゃ電龍大神くんだったわね。」
南「変わりないわ、巫女の仕事をしてはどっかに行っちゃうのは光と変わりないわ…ただやっぱりヤンデレ・スカーレットを探しているみたい。」
紫「やっぱりね、ここに来る前色々あった訳なんだし…その殺しちゃったリスちゃんもこの世界に来ちゃってるわけなんだしね…。」

南「あの子の事言わなくてもいいの？」
紫「あの子には身が重すぎるわ…幻想郷に来てあの子が殺したって事覚えてたらすぐにこの世界がパーよ、その為に記憶を消したって言うのにわざわざ”ヤンデレ・スカーレットが貴方のスペルカードとあの子のスペルカードであのリスちゃんも殺してしまった”なんて言っても彼が混乱するだけ。」
紫「どうせなら、知らない方が身のためよ。」
南「でも、ずっと知らない訳にもいかないわ…いずれかあの子の事を知ることになるんだから…。」
紫「…別に言う言わないは好きにすればいいわ、でもどうせ言うなら幻想郷が消える事も覚悟しておくのね。」
南「紫…もし、あの子がヤンと接触したら…どうするわけ。」
紫「あの子達に任せるわ、もし”あの刀”を使うことになったら霊夢が殺ることになってる…霊夢も一応釘は刺しておいたみたいだし。」
南「…。」
魔理沙の家、きのこシチューを食べ終わった大神は席を立ち上がろうとした。すると、魔理沙の家にいるはずもない女性がそこに座っていた。それに驚いたのか刀を握り抜こうとした。だが、喋り方は変わらずブラックの声が聞こえる。これはバグタケのせいだと思いもう一度見渡した所、やはり魔理沙の家にいるはずもないヤンデレ・スカーレットがそこにいるのだ。幻覚か、それとも現実なのか。彼にはわからなくなってしまった。
すると、ヤンデレ・スカーレットに見えていたブラックが大丈夫かと聞いた。大神は心を落ち着かせ、刀から手を離した。
大神「あ…ああ、大丈夫だ…魔理沙が言った毒が出ただけだ…。」
大神（…幻…覚か？）
そして現在、ヤンデレ・スカーレットが居ないことに気づくとすぐ様レミリアがいるとされる紅魔館へとエヴァンと一緒に向かった。
だが、大神はまだ居ないという確信が持てなかった。そう、ブラックがヤンデレ・スカーレットではないかという可能性があるからだ。

疑問だらけのブラック、まずポーカーが異常なまでに強いということ、そして幻覚のせいでなったことではあるがいるはずもないヤンデレ・スカーレットがブラックの席に座っていたのは事実。ブラックがヤンデレ・スカーレットでは無いという可能性もないとは言いきれない。とにかくまずは現状報告をし、可能な限り自分で探りを入れることにした。

大神「済まないが、やはりお前さんの実の姉を見つける事は出来なかったよ…手掛かりは全て探したが…。」

レミィ「そう…お姉様は自分から手掛かりを残したりはしないわ、仕方ないわよ何年も前の話だもの…無理な事言ってごめんなさい。」

大神「いや、いいんだ俺も俺なりに色々探し回ったんだから…もしかすると別世界にいるか…もしくは亡くなっちまったか…。」

レミィ「生きてるわよ！」

レミィ「生きてるわよ…。」

大神「すまない…でもまだ俺は諦めた訳じゃない、もうちょい広い範囲で探りを入れてみるよ。」

レミィ「…よろしくね、絶対に…。」

と涙ぐみながらレミリアは大神に言った。大神は真面目な顔で頷き、部屋を後にした。

咲夜「…大神、お嬢様に言った言葉…本当なのよね。」

大神「ああ、まだ確信は持てないが何処を探してもいないんじゃどうしよもないが…。」

大神「これはレミィ以外には言わないでおいてくれよ、さっきはレミィの様子から見れば俺から話せる状況では無い…元気が出てきた時に話して欲しいんだが。」

咲夜「いいけれど、私はお嬢様を悲しませるのなら何も話さない方がお嬢様の為だと思う。」

大神「まぁ、話したくなければ話さなくてもいいさ…まだ俺の憶測に過ぎないしこの話をしてあんまり期待して欲しくないからな。」

大神「…多分なんだが、ブラックがヤンデレ・スカーレットの可能性があるんじゃないかと疑ってる。」

咲夜「この間の？」
大神「ああ、何故そう思ったか理由を説明する。」
大神「一、レミィから聞いたところヤンデレはカードゲームに強い特にポーカーらしいな、人間の里で起きた事件俺はあの時その場にいた…そのマジシャンに勝負を挑み簡単にそいつを倒してしまったそこから俺はやつを疑った。」
大神「二、姉妹と似て負けず嫌い、そして好きになった奴は何としてでも手に入れたいと思う習性がある。」
大神「ブラックはそんな感じの性格をしている、ここからさらに疑いが大きくなった。」
咲夜「…つまり、その、ヤンデレお嬢様とブラックにはその共通点があってもしかしたらブラックがヤンデレお嬢様の可能性があると？」
大神「あんまり期待しないでくれよ、ホントに憶測に過ぎないから。」
と言っているうちに地下の図書館まで降りてきた。
その図書館はかなり広く、大きい。本棚には小説から魔道書まであらゆる本がズラっと置いてあり、大神は適当に本を開いた。
その開いた本は、ドイツ語で書かれており大神には何が書いてあるかさっぱりだった。さらに下へ降りるとエヴァンと図書館の管理人なのかパジャマを来た女性がそこに立っていた。
すると本を持った悪魔の女性が大神の元へと舞い降りた。
???「あら、お客様ですか？」
咲夜「ええ、エヴァンと一緒に付いてきたのお客様のおもてなしよろしくね小悪魔。」
小悪魔「はい、それではご案内します。」
大神は言われるがまま大神が行こうとしていた方向へと案内された。
エヴァン「もう話は済んだかにゃ？」
大神「まぁな、随分待たせちまったな。」
エヴァン「別にいいよ、魔法の使い方教えてもらってたから。」

???「あんた、いつも”にゃあにゃあ”言ってるわね…。」
エヴァン「これは癖にゃの、余計なこと言わなにゃい！」
???「はいはい…。」
大神「なぁ、ここに電光家の代々伝わる小説とか教科書とかアルバムとか無いの？」
???「貴方誰？」
エヴァン「紹介するにゃ、最近幻想郷に越してきた電龍　大神にゃ。」
大神「よろしく…。」
パチュリー「私はパチュリー・ノーレッジっていうの、本は持ち出し禁止ね…なんて言っても持っていく奴は2名ほどいるけれど…。」
エヴァン「私はちゃんと返してるじゃん。」
パチュリー「別に貸してやるなんて言ってないんだけど…まぁいいわ、魔理沙より魔法の知恵も付いてるしちゃんと返してくれるから。」
大神「よろしくな、パチェ。」
パチュリー「その名前は私が本当に友人と認めた奴だけにしか使わせないようにしてる…その名で呼ばないで…。」
大神「…。」
大神（なんか、合わせずらい性格だな…なんて言うか接しにくい…。）
しばらくして、パチュリーとやっと気が合うようになったのか魔法の使い方について教えてもらった。防御魔法ではあるが大神は魔法を使えるようになった。エヴァンがまだパチュリーと話す事があるから先に村に帰っていいと言われ大神は紅魔館を後にした。
大神は特に行くあてもなく適当な所を探索していると花畑へと出てきた。
幻想郷にも花畑があるとはと思った大神はどんな花があるかと見学をした。季節ごとに別れた花の匂いが大神を誘った。
広場へと出ると一輪の花が咲き乱れていた。その花の目の前に立つと一輪しかなかった花が突然辺り一面に咲き乱れて行った。
すると、後ろから声が聞こえた。

???「綺麗でしょ、この花はヒガンバナと呼ばれているの。」
大神「ヒガンバナ？」
大神「あの、ごんぎつねとかでで来るあの花か？」
???「そうよ、貴方花に興味あるなんて面白い狐さんね。」
幽香「私は風見幽香、ここの管理人。」
幽香「貴方のことは、紫から聞いているわ電龍　大神くん。」
大神「あいつから…知り合いなのか。」
幽香「紫とは友達なの、貴方に忠告しておくわ。」
大神「忠告…自己紹介されていきなり忠告とは。」
幽香「いい、ヤンデレ・スカーレットについてこれ以上調べるのは辞めた方がいいわ。」
大神「何故…俺はただ真実を知りたいだけなんだ。」
幽香「知っちゃいけないからよ、それを知れば…貴方は後悔することになる、幻想郷が消える事になる。」
幽香「幻想郷、妖怪と人間が住まう場所…異変が起きれば博麗の巫女、博麗霊夢が正しい道へと導くそれがあの子の仕事。」
幽香「でも、幻想郷が滅び妖怪達が外の世界へと放出されてしまったら…里にいる人間はそれを良いとしても、外の世界の住民は愚か里にいる人間もさらに恐怖のどん底に落とされる。」
幽香「幻想郷の存在を知られてはならない、もしくは破壊しては行けないこれが幻想郷の管理人が決めた絶対ルールの1つなの。」
大神「けど…俺は何かを犠牲にしても奴にッ…！」
幽香「復讐は後悔を生むだけ、良い判断だとは言えないわ。」
幽香「恨みつらみで、復讐して、悪い方へと方向は進んでいかない。」
幽香「彼女の事は忘れて、ここでの平和な生活をして南と一緒に暮らすといいわ。」
大神「なぜ、あいつの名を…。」
幽香は日傘をさし、その場を後にした。
大神はヤンデレ・スカーレットの事を忘れる事は出来なかった。それどころか、ますます彼女の事が知りたくなった。
だが、大神は確信した。

ヤンデレ・スカーレットは幻想郷の中で最強な吸血鬼だと。
桜「大神様！」
大神「どした～桜、見ろよヒガンバナ綺麗だぜ？」
桜「そんなことより、里の方で異変です！」
大神「異変…どうしたんだ。」
桜「月夜様が、大神様の刀を持って里の方で暴れていて…私達だけではどうしよも出来ないんです！」
大神「あいつッ…！」
続く

衝突

大神達は幽幻村へと向かい、大神が住んでいる神社に足を運んだ。
地下に行くと、金閣寺みたいに周り一面江戸時代に描かれたであろう絵がありその展示用の箱には大神が保管していた呪いの刀が消えていた。
桜「大神様が言った通りの警備をしていたのですが…昼食の時間帯だったので地下へ行く鍵を掛けておいたのですが。」
大神「警備が手薄になった時に月夜が侵入、俺の刀を手にしちまって行方をくらましちまったって訳か。」
桜「申し訳ございません…昼時でも警備をしておくべきでした全て私のミスです。」
大神「いや、別にお前は悪くないよ…封印の札を貼って置かなかった俺が悪いんだからよ。」
桜「よく探しましょう、月夜様は夜は狼ですが朝は狐になって全くの別人になってしまっています…手分けして探します！」
大神「頼む、俺もまだ行ってないところ探してみるよ。」
大神達は二手に別れた。
桜は冥界や地霊殿の方へと探し、大神は妖怪の山周辺をくまなく探した。
しかし、どこを探しても月夜は見当たらない。大神はさらに範囲を広げ魔法の森へと行った。何故魔法の森に向かったのか、もしブラックがまた月夜にやられてしまっていたらと思い必死に大神は探した。
だが、魔法の森にも月夜はいない。大神が博麗神社もしくは紫の家にいないか、出来れば探してもらえないかと思い飛び立とうした。
ブラック「大神、待てよ！」
大神「ブラック…。」
ブラック「どうしたんだよそんなに焦って。」
大神「えと、俺の大事な物が何者かに盗まれてよ…手分けして探してるんだ。」
ブラック「そんなに大事な物なのか？」

大神「あ、ああ…正直無いと困る物で何か怪しいやつ見たりしてなかったか？」
ブラック「いや…見てないなぁ…。」
大神「そうか、ありがとな俺はもう行くよ。」
ブラック「待てよ、そんなに大事な物なんだったら俺も手伝わせてくれよ。」
大神（ダメだ、ブラックがヤンデレ・スカーレットの可能性があるうちは下手に接触しない方がいい…適当に誤魔化して行こうと思ったのに、それにあの刀はお前は見たちゃ行けないんだ…見たら虜にされちまう…だから連れて行けねぇ。）
そう、洋風のブラックには大神が霖之助からもらった呪いの刀は刺激が強すぎて虜になってしまう。その刀は取っ手が黒く刃の先まで血の色に赤く染っている。その刀を見た物は虜にし刀を触ってしまった者は取り憑かれてしまう。その刀は血を欲しており切り続けなければその刀の力に負けゾンビにされてしまい非常に危険な刀だった。
ただ、何故か電光家の人間であれば簡単に取り憑かれずに振り回すことが出来る、それは代々電光家に伝わる刀であり刀を作る職人も一人一人違った刀を作っている大神が持っている刀も例外ではない。しかし、大神は一応電光の人間ではあるが電龍　大神と名乗っている以上下手な扱いをすると取り憑かれ大神の意識が消え大神の姿はどこにもなくなってしまう。和風の潮風　桜や七色狼　南は簡単には取り憑かれないが、寒気と凍りつくような恐怖心に襲われる。
電光家にしか持てない”恐ろしい刀”とも呼ばれているのだ。
大神「気持ちは有難いが、これは俺個人の問題…悪いがお前は一緒に探さなくても大丈夫だ。」
ブラック「大神…？」
ブラック（なんか、今日の大神は様子が変だな…。）
ブラック（ついて行くか…これ何かある気がする。）
と思ったブラックは大神の後を追った。
月夜を探してもどこにも居ない。大神はさらに焦り始めた。

とりあえず、大神は刀を探させた桜達を一旦人間の里へと招集をかけた。
皆が集まると大神は真っ先に月夜の事について問いた。だが桜は月夜の行方はわからず南にも問いたが南もわからずじまいだった。
すると、黄色い狐が大神の背中に当たった。
その子はごめんなさいと言うとその場を後にした。大神はその黄色い狐に何か違和感があると思い追いかけようとした。日が沈むとその黄色い狐は月夜　桜へと変化した。
大神「やはり…月夜だったか！」
月夜（？）「月夜…ああ、彼女の事ね？」
月夜（？）「あなた知り合いみたいだけど…しばらくこの子借りるわね。」
大神「ッ…遅かったか…。」
月夜（？）「まさかだと思うけど、刀封印しに来たって言うんじゃないんでしょうね…。」
大神「ああ、その刀の能力は危険だ…早く封印しておかないとまた人が死ぬ…また血が流れることになる！」
月夜（？）「やなこった、私もようやく長い封印から解かれて自由の身になれたというのに…なら、貴方の血頂こうかしら…丁度久しぶりに斬れ味も試してみたいし。」
大神「…戦うしかないか、来いよ本気で相手してやる。」
月夜（？）「望み通りに！」
刀に取り憑かれた月夜は大神み襲いかかってきた。
大神の刀と月夜が持っていた呪いの刀がぶつかると月夜は何かに気づいた。
月夜（？）「光…光なの!?」
月夜（？）「私よ、光！」
大神「何言ってんだ…月夜、目を覚ませ！」
月夜（？）「光…私は”あなたのお母さん”なのよ、何故言うことを聞かないの!?」
大神「!?」

大神が攻撃を辞めると呪いの刀に問いかけた。
大神「お前…俺の母親なの？」
月夜（？）「そうよ…私は電光（でんこう）　叶（かな）貴方の産みの親よ。」
大神「ツー！」
そう、大神は覚えていた。
光が2歳の時に刀を渡したのは電光の母電光　叶だったのだ、その事実を知り大神はショックを受けた。
大神はさらに叶に問いた、それは大神が持っている刀に電光　光の魂が宿ってしまっているからだ。光の姿をしている大神は動揺を隠せなかった。
それどころか戦うのを躊躇っていた。
大神「あんたが俺の産みの親なのか…？」
叶「そうよ、信じて！」
大神「でも…。」
大神「でも、危険な怪物には違いないんだ…これ以上あんたに殺戮を許しては行けないんだ母さん。」
叶「…そうなの、なら全力で倒すのみよ！」
そして再び、戦闘が始まった。
大神は後ろに回り込み左斜めから斬ろうとしたが先を読まれており全ての攻撃を弾かれてしまった。
叶の動きは大神よりも素早く、大神は叶の攻撃に防御するのがやっとでとても手が出せなかった。
月夜の身体は徐々に死んでいこうとしていた。
月夜が完璧にゾンビになってしまったら助けようがない、そう思った大神は出来るだけしばらく”隠していた力”を解放し始めた。
大神「…このままじゃ負けちゃうから、もっと本気出させてもらうよ…本当はあまりやりたくないんだけどさ。」
大神が”隠していた力”を解放すると口調が女になった。
しかし、まだほんの2割程度これ以上の力の解放は”暴走”を意味する。
それを見越して2割程度に抑えているのだ。

叶が笑うとおいでよと挑発した。大神はその挑発に乗り、叶の方に向かった。叶は驚いた、その大神がさらに素早くなり刀を強く弾こうとしたのに。叶は一瞬体勢を崩したが叶もちょっとした我流を身につけており倒れる前に片手で飛び右足に刀を持った。

大神（回し落とし斬り!?）

そう、その攻撃は叶のちょっとした我流。体勢を崩された場合に使える。

叶は倒れる寸前に片手で飛び、刀を足に持ち替え、落ちる瞬間に身体を回し連続斬りをする。そうすると相手に致命傷を負わせすぐにトドメをさせる。叶が死ぬ前に考え作り出した”落とし斬り”、彼女の斬り技だった。

大神にも同じような技があるが、大神のは刀を取り上げられる寸前に、足で持ち替え逆さ立ちで、ダンスのように回りながら連続斬りをする攻撃だった。それを大神や光は回し斬りと呼んでいた。

叶の技は大神には理解ができなかった。

大神が次の攻撃に移る度に叶の攻撃はどんどんと強くなっていき、次第には身体に斬り傷が増えて行った。

叶「あらあら、そんなものなの貴方の攻撃は！」

叶「あはははは、そんなんじゃ私から刀を取り返すことは出来ないわよ！」

大神は必死に攻撃をした。

だが、大神は叶の攻撃を弾かれてしまい刀を取り上げられてしまった。

しかし、それは大神の中に何かを目覚めさせるものが見栄えだ。

叶が次の攻撃をしようとした瞬間、大神は何処かに飛んでいきそうになっていた刀を手で掴まず口にくわえ裾に隠していたクナイを出し叶に攻撃をした。

叶「やるわね…この短時間でさらに新しい技を繰り出してきたわね。」

大神「私、攻撃している度に気付いたんだ…防御と攻撃を同時にするのはどうすればいいか、そしてこの方法を思いついた！」

叶「そんなのただの見かけ騙しよ、勝てるかしらその体で、そのフォーメンションで！」
と叶が言いながら、大神に襲いかかった。
大神はクナイで攻撃を抑え、口で攻撃をした。そして叶の魂が宿った刀を取り上げることに成功した。すると、月夜の意識が戻り何が起こったか理解できなかった。
月夜「あれ、なんで私…木刀持ってるんだろ…。」
大神「すまないがそれ返してくれないか？」
月夜「あ、ご、ごめんなさい…。」
大神「いいのさ、色々聞きたいことあるかもしれないが俺もいっぱい聞きたいことがあるから後で聞いてくれるか？」
月夜「う、うん…。」
叶『やはり、光…いえ電龍　大神…前は全然小さかったのにこんなに大きくなって…。』
叶『いいわ、大人しく貴方の右手になりましょう、私は貴方の成長ぶりをみれて良かったと思うわ。』
と叶の魂が宿った刀から聞こえてきた。大神はそれを受け止め、刀を木刀の中に閉まった。
すると一気に緊張が解けたのか、大神はふらつきその場からしゃがんでしまった。大神が必死に立とうとした瞬間、団子屋こ影で見ていたブラックが手を差し伸べてきた。ブラックが大丈夫かと聞くと、大神は大丈夫だと言い大神はブラックの手を借りて立ち上がった。
ブラック「そんなに大事な物ならよ、俺をもっと頼ってくれたってよかったじゃねぇか…1人で抱え込んで大馬鹿者だよお前は！」
大神「す、すまない…でも…。」
ブラック「でもじゃねぇよ、こんなに傷だらけになって…俺も友達だろ！」
大神「とも…だち？」
ブラック「ああ、友達は仲間当然もうちょっと俺に頼れよ！」
大神「…悪かったブラック、お前は俺の友人だその大事な事を忘れて我先へと探し人の事で頭がいっぱいになっていた。」

ブラック「探し人？」
大神「いや、気にしないでくれ…さてことは丸く収まったことだし…団子でも食うか！」
ブラック「お、いいのか!?」
大神「俺の奢り、好きなの食べていいぞ！」
と言うと団子屋の方へと大神達は向かった。
南達がその現場を見ていた。
南「友達…か～、”あれ”以来友達って言わなくなっちゃったなぁ。」
桜「大神様…いえ、光様は以前は親友だったのでしたよね？」
南「ええ、今のあの子は男の子当然…女としては見てくれてるけど親友だった頃の時はもう戻せない、出来ることなら私は…恋人になる事しかないのかしらね。」
桜「そんなことは無いと思われますよ、私は大神様は恋人以上の関係だと思います。」
桜「だって、大神様は私の”命の恩人”であり…今でも大神様は南様のこと好きでいらっしゃいます、それは親友としてでもあり初めて恋をした男の子なのですから。」
南「…ちょっと気持ち悪いわ。」
南はその事を聞くとドン引きをした。すると桜がカンカンになって怒った。
桜「そんな、酷すぎますよ～！」
南「あはははは、まぁ…あの子がいつかはちゃんとした女の子に戻るんだったら…今の現状を楽しまないきゃ行けないわよね…。」
桜「今度、大神様と南様で温泉旅行に行ってはよろしいかと。」
南「私と大神だけで？」
桜「私はあくまでも護衛です、なので外で待機しておきますので敵の心配はご安心ください。」
南「そんな、それじゃあなたが可哀想だわ…なんでもあなたに任せっぱなしじゃいられないし…貴方も温泉旅行に同居しなさい。」
桜「よ、宜しいのですか…私と一緒入ることは大神様の記憶に悪影

響を及ぼす危険性がありますが。」
南「大丈夫大丈夫、紫の能力は”あらゆる境界を操る程度の能力”。」
南「私のはもうひとつの能力…”先を読み境界を操る事が出来る程度の能力”で、大神と同じく暴走しそうになる時がたまたまあるのだけれど私達であの子の記憶を奪ったの。」
桜「な、なるほど…でも私のはたまたまその境界が壊れて…。」
南「大神には内緒よ、しかるべき時がきたら話して頂戴。」
桜「承知致しました…。」
月夜「ねぇ、その温泉旅行私も連れてってくれない？」
南「ダメ。」
桜「彼女も参加させましょうよ、流石に彼女だけ除け者扱いは彼女が可哀想です。」
南「月夜は何をするかわかったもんじゃないから連れて行けないわよ…。」
すると桜が南の方を見てじっと見つめていた。
南の目線からはとても可愛らしい目をしており、誘惑されそうな匂い、ぬいぐるみみたいに可愛い顔。それを見た南は顔を真っ赤にし両手を顔に当て首を横に振った。それもそうだ、南からしたらこんなに小さい子供がそうおねだりすると断れないのが普通なのだ。しかし、南も負けてはいられないその誘惑に負けてしまっては月夜を連れて行く羽目になる。南は必死にダメだと伝えようとし、両手を顔から離しダメだと言おうとした。
だが潮風　桜の誘惑はさらにエスカレートし、南は心を打たれてしまった。
南「イ、イイワ今回ダケヨ。」
と南は横を向きながら言った。誘惑に負け南は悔しがっていた。
たが南の心の中では悔しい、だが後悔はしていないと思った。あんなに可愛い子がこの世に居るとは想像もつかない程。彼女はそう思ったのだった。
続く

温泉

翌日、大神は桜と南に誘われ４人で妖怪の山にへと出かけた。
しかし大神はあまり気が進まず、南達に誘われるがままついて行くことしか出来なかった。
だが何故、大神は気が進まなかったかと言うと。
月夜がいるからである。
月夜「まさかあの大神と一緒に温泉に入れるなんて…夢見たいね！」
南「夢ならとっくに覚めてるわよ…なんでこの子も連れていかなきゃ行けないわけ～？」
大神「今日の南はご機嫌ななめだねぇ、俺が好きでべったりくっついてる訳じゃないんだから。」
桜「まぁまぁ、楽しく仲良くですよ。」
南「はいはい、楽しく仲良くね～。」
南は不機嫌なまま、温泉へと向かっていた。月夜が大神ばかりくっついているのが妬ましくて仕方なかったからだ。
つまり嫉妬していた。
しばらくして守矢神社が見えてきた、大神は周りの目線ばかり気にし南より後ろに下がった。
南がなんで後ろに下がるか聞くと、大神は新聞の記事にされたくないと言い大神はチラチラと月夜を見ていた。
大神「悪いんだけど…そろそろ離れてくれないかな…歩きにくい…。」
月夜「大丈夫よ、歩きやすいようにしてるんだから～。」
と話していると写真のシャッター音が聞こえ後ろを向くと射命丸文がそこにいた。それに怒って大神が刀を出した。
文「あやややや～、今回の特集は”電龍　大神ついに春訪れる”ですかね～？」
大神「文～、勝手に写真撮るな～！」
文「あややや、ここは私達のテリトリー…ここで刀を出すのは自

殺行為なのではないのでしょうか？」
南「大神、やめなさい…ここは天狗と河童が住まう場所なの下手に攻撃すると八つ裂きにされてしまうわ。」
南「文も勝手に私達の写真撮るのやめて頂戴、勝手にネタにされるの困るのよね。」
文「あや～、困りましたねぇ折角の貴重なネタだったのに。」
南「早く消しない、さもなければ今すぐに殺めてもいいのよ？」
と南は笑みを浮かべながら言ったが、それにはとても恐ろしく身の毛も凍りつくほどの恐怖心に襲われた。
南は怒ると怖い性格だ、笑みを浮かべ相手に恐怖を与える、さらにエスカレートすると目付きが変わり問答無用で妖怪を殺す危険な狼だ。
文は恐ろしくなったのか、月夜と大神のツーショットが入ったカメラのデータを必死に消そうとした。
大神はホッとしたが、南は昔から怒ると怖い性格なのであまり怒らせないようにしていたのだ。だが南はあまり身体は強くなく体力は陸上競技で考えると、１５００ｍのやく６５０ｍちょっと走ればいい所。
体力には自身がなかった、つまり南は長期戦には向かず中期戦もしくは短期戦でカタをつけるのだ。
またしばらく歩くと間欠泉が見え、ここですと桜が言った。
奥には滝らしきものが見えるが他は間欠泉ばかり、旅館と思えるものは見当たらなかった。
大神「えと…旅館が見つからないんですけど？」
桜「ここではありますが、着いたとは言っていませんよ間欠泉の間を通れば旅館に辿り着きます。」
月夜「ま～だ歩くのぉ～？」
桜「そこまで遠くはないと思いますし、良い運動になると思いますよ？」
桜は笑みを浮かべ下へ飛び降りた。
南も続いて飛び降り、大神は仕方ないという顔をし飛び降り月夜も

それに続いた。
間欠泉か連続して湧き出してくるのでそれを気をつけながら歩かなければならなく、時々走らなきゃ行けない。
奥へ歩き続けると、いきなり間欠泉の湯が噴き出し走ることになった。
しかし、大神は石につまずきその場に倒れてしまった。
大神「ギャー！」
南「子供みたいな叫び方してコケたわね。」
またしばらく歩くと旅館が見えてきた。
南達は、疲れて息切れをしていた。だが桜と大神は息切れをしていなかった。それは以前幻想郷に来る前に電龍　大神になる前に、学校の体育や部活の成績が高く体育祭の１００ｍ走やクラス対抗と学年対抗リレーでは1番であった。家では筋トレをしており、１８０ｃｍ級、１９０ｃｍ級の男性に負けないくらいの力はあった。
桜は常に歩いており、本当に使いたいと思った時だけ空を飛ぶ能力を使っている。なので体力は大神よりはないが南や月夜以上の体力はある。
月夜「や…やっと着いた…。」
南「誰よ…〟そこまで遠くないって言ったの〟～…。」
皆は旅館の中に入り、受付に南の名前をいい部屋の鍵を借りた。
桜「いいですか、部屋は2人一部屋です…どちらの部屋に行くか決めてください。」
月夜「私、大神の部屋に行くー！」
大神「…俺は、み…どっちでもいいや。」
南「右に同じく。」
桜「それじゃー。」
大神（どうせ、南は桜と俺は月夜とって部屋割りになるんだろうな…。）
桜「南様と大神様、そして月夜様と私と言うことでよろしいでしょうか？」
南と大神は驚いた。普通ならさっき大神が言った通り、南は桜と大

神は月夜とという部屋割りになると思っていたからだ。これも桜が計画していたもので、南と大神を合わせ二人でいる時間を増やすという計画で桜はそこまで考えていたのだ。
南「／／／」
大神「み、南と一緒か…／／／」
月夜「意義あーり、大アリだよ！」
月夜「なんで大神と一緒じゃ駄目なの!?」
桜「もう決まってしまったことなので…。」
大神「月夜、もう決まっちまったんだワガママ言わずに我慢してくれ。」
月夜「え～。」
南達は自分達が泊まる別々の部屋へ向かい、桜が5時に先程の受付前に集合して温泉へ行きましょうといい時間になるまで大神達は部屋で待機していた。
だが、南と大神は黙り。大神はベランダに出て外の景色を見に行った。
すると、南もそれに釣られるかのように外の景色を見に行った。
しかし、それでも黙ったまま。南は顔を真っ赤にし、大神と目を合わすと目線を逸らしてしまう。大神も顔を真っ赤にし、あまり南と目を合わせないようにしていた。
そしてようやく、南が口を開けこう話した。
南「久しぶりね、こうして2人で景色見るのって。」
大神「…そうだな、以前は中3の修学旅行だったっけ？」
南「そうね、確かがやがやしてる中…あなたは1人で月を見ていたわ。」
大神「それに、お前が一緒に月が見たいって言って一緒に見てたら”月は狼人間を呼ぶ、レア物の月よ”なんて言ってな。」
南「そんなこと言ったわね、それで大神にそれは満月の時だけ…三日月とかじゃ狼人間なんて呼べないわよなって言ってね。」
南「あ～、懐かしい…また昔みたいに友達と一緒に旅行でも行きたいわ。」

大神「…俺がいるだろ？」
と大神が言うと、柵の上に乗っけていた南の手を大神が繋ぎはじめた。
南は驚き、手を振り払ってしまった。以前は電光　光の時はこんなことしなかったのでさらに顔を真っ赤にし。フラフラになりかけていた。
南が大神の顔に近づき、キスをしそうになった。
しかし、大神は女。そんなことをしてはダメだとと思った南はキスをやめた。だが、大神は俺は男だぜ上は女でもといいキスをしようとした。南は抵抗する気もなく、キスをしようとしたがドアノックが聞こえいきなりドアが開いた。
桜「南様、そろそろ時間なので…。」
それは桜だった、だが桜が２人でベランダに出ているのを見るとこう言い始めた。
桜「お忙しいようだったのですね、少し来るタイミングを間違えたみたいです…失礼しました引き続きお二人でどうぞ。」
と恥ずかしいと顔をし、桜は静かに戸を閉めようとした。
大神「違う違う違う違う、誤解、単なる誤解！／／／」
南「そうよ、勘違いしないで！／／／」
桜「いえ、私が悪いので失礼します！。」
大神「こら、逃げるな！」
南「本当に誤解なんだって～！」
そしてなんやかんやあって、南と大神は温泉へ向かった。
脱衣所に着くと、大神は男湯と女湯どちらに入るか悩んでいた。
南「あんたはこっち！」
南がそう言うと南に女湯へと連れてこられた。
服を脱ぐとタオルを身体に巻き、温泉へと入ろうとした。
温泉の中に霊夢と魔理沙がそこにいた。大神が霊夢と魔理沙は何してるんだと聞くと。温泉に入りに来たんだよと言った。聞くと霊夢の家には風呂が一切なくあったとしても外の世界に落ちてきたドラム缶を使い、湯を沸かし風呂に入っているのだという。それで魔理

沙が気晴らしにと温泉に誘い一緒に入っているのだ。
大神はどこのサバイバル生活だと思い、少し呆れた顔をした。
体や頭を洗うと、魔理沙が毛むくじゃらの身体って洗う時大変じゃねーのと聞き大神は子供の頃は本当に大変だったよ、クシは毛で絡まって抜けなくなるし動物のようにバサバサって身体全身で降っちゃうからって言って身体についていた泡を落とした。
南と大神が一緒に入ると、身体を洗い終わった月夜が飛び込むように温泉へ入った。大神は飛び込むなと言った。
月夜「ねぇねぇ～。」
大神「なんだよ…。」
月夜「大神は私ものよ、だから絶対渡さないんだからね～。」
大神「おいおい…。」
南「何よ、別にあげてもいいわよ？」
月夜「べーーだっ！」
南「ムカッ。」
大神「おいおい、ここまで来て喧嘩するなよ…。」
南「知らないわよ、こいつが喧嘩売ってきたんじゃない！」
大神「だからってよ…イヤッ！／／／」
月夜がいきなり胸揉み始める、南より大神が胸が大きくどんなものかと思い揉んできたのだ。
月夜「私より胸大きい…胸筋も鍛えてる？」
大神「ヤダ、揉まないで…やめて！／／／」
月夜「やっぱ揉む時…光ちゃんの声が聞けて好きだよ。」
大神「やめろぉぉおおお！／／／」
月夜が大神の胸を揉み続けると南からゲンコツが入った。
すると、月夜が船のように浮かんだ。南は行こうといいサウナの方へ入った。
桜は、頼んでいた酒をたらふく飲み酔っていた。
桜「極楽～うぇへへへ～、ヒック。」
サウナに入ると。南は謝り始めた。
南「ごめん、なんだかムカついちゃった…。」

大神「いやいいんだよ、あのままやられ続けたらさすがに白目むいちまう。」
南「そうね…私、やっぱ大神…いや光のことが好きかも…／／／」
大神「い、いきなり何言い出すんだよ！／／／」
南「あのね、これは私の本当の気持ちなの…／／／」
大神「南…もしかして酔ってるのか？」
大神「ムグッ!?」
南は部屋でできなかったキスをし、それは1分以上も続いた。
南「これが私の気持ちなの…こんな形でしか伝えられないけど…／／／」
大神「南…。」
南「さてと、長いことといたからちょっとのぼせちゃった…外出て風に当たりましょ？」
大神「そう…だな…。」
大神（…南らしいな、やっぱそういう所は昔のまま…。）
大神は南のあとを追うように、サウナから出た。
サウナから出ると霊夢から、今日この旅館で宴会するから是非参加してねと言われ大神らわかったと言った。
しばらく、南と一緒に夜風に当たり南が口を開きこういった。
南「そういえば、今日ここで宴会するんだったわよね？」
大神「ああ、霊夢が言っていたが…酒は持ってきてないぞ？」
南「大丈夫、他の下僕に酒を持ってくるように言っておいたから宴会が始まる前には間に合うわよ。」
大神「そうか、それは良かった…。」
大神「南って兄弟とかいるのか？」
南「…一応いるわ、話してなかったっけ？」
大神「いや…。」
南「私には妹と弟がいた、けれど父は交通事故で母は先に七色狼家で伝わる言い伝えであるとんでもない妖怪を退治するために命を犠牲にしたわ。」
南「それで私は母親同様に弟と妹を大事に育てた、バイトにも明け

暮れてまでね。」
南「でも中学の時に、姉貴達に縛られるのは嫌だこんな生活耐えられないって言って家出をしてしまった。」
大神「…その弟とは連絡は取れてるのか？」
南「いいえ、中学の時からずっと音信不通…電話番号も住所も何も言わずに行方不明なのよ。」
南「昔は、響（ひびき）…あ、弟の名前響って言うんだけど…響が家出したあとすぐに帰ってくると思っていたのだけれど、結局あの子は帰ってこなくて警察にも相談したけど結果行方不明のまま…それで1年もたって警察からは1年も家出をしているのならもう生死も問われるけど探すねって言われた。」
南「それでも、見つからず…6年が経ってしまったの…一体どこに行ってしまったのかしら。」
大神「響…か、いい名前だな…見つかるといいな幻想郷で。」
南「そうね、もう6年もあってないもの、幻想郷（ここ）で会えたらいいわね。」
といい、もう一度温泉に浸かりに行った。
しばらくすると、南は上がろうといい大神は南と一緒に温泉から上がった。濡れた身体を乾かし、クシで絡まった毛を研ぎ服を着替えた。
宴会場へと行くと、皆が集まっていた。
桜はさらに酔いが回っているせいか、踊り狂っていた。
ブラックは、赤ワインを片手に持ち悪者みたいな笑い方をして待ってたぜと言った。スペードもブラックの横におり同じようにワインを飲みトランプを机に置いた。月夜は日本酒のせいかとても酔っており、刀を振り回していた。
大神達はなんだこの惨状はと思い呆れた。
そして、南はせっかくの宴会なんだから楽しもと言いブラックの前に座った。大神はあまり気は進まなかったが、スペードの前に座り日本酒を注いだ。
しばらくして、南は桜と同じように踊り狂っていた。

南「大神～、一緒に踊りましょうよ～。」
大神「結構、２人で踊ってなよ。」
南「連れないわね～…、楽しみましょ…後の事なんか気にしないで…。」
大神「楽しんでますよ～だ。」
???「ほぉー、あんなに飲んでも潰れないとはねぇ…あんた結構強いほうだろう？」
大神「萃香…これでもまだ４杯も飲んでないぜ？」
萃香「でも、この日本酒は１杯５杯分のアルコールが入ってるから普通のやつなら２杯で潰れるんだ…鬼の私には叶わないがな！」
大神「へぇ～、でも俺は飲み比べるつもりはないから。」
萃香「まぁまぁ、”九尾”殿は鬼と付き合いがいいって聞くからな！」
大神「知らないよ…ていうか鬼と”九尾”って仲良かったっけ…？」
大神「ていうか、俺は白狐…九尾は”あっちの”こと言うだろ。」
というと大神は、八雲藍（やくもらん）を指した。
だが、萃香はアンタの背中から九尾のオーラが漂ってるんだよねと言われ。大神は刀を触った。
すると、月夜がベッタリくっついてきた。しかし、月夜の力は今までより強く引き剥がすのにとても苦労した。
大神「やめ、暑苦しい…！」
月夜「いいやないのぉ～、減るぼんじゃだいじぃ～。」
大神「いくらなんでも飲み過ぎだぞ、呂律回ってないじゃねーか。」
月夜「そんにゃごどだいわよぉ～。」
南「あらあら～、すっかり酔いつぶれちゃって～私のはまだまだよ～。」
大神「お前も同類だ！」
桜「はにゃはははは、ウエッ…うぇへへ、ヒック。」
大神「桜はもうこれ以上飲むな、ぶっ倒れるぞ…。」
４人「大神も飲め飲めぇ～！」

大神「やめ、ヤメッ…やめろぉぉおおお！」
２時間後
大神「ふぇ～、なんでごんなにのまぁされだんだっけ～？」
大神「まぁ…いい…。」
大神は日本酒を２０本開けてしまっており、完全に酔い潰れてしまった。
その場に倒れてしまった大神は、気を失い完全に酔いの舞になっていた。
すると、大神は突然立ち上がりこういった。
大神（？）「痛った～…、完全に死ぬ程飲んじゃってるよ…もう大神の馬鹿…止められたでしょ…。」
大神（？）「仕方ないし…あと片付けして、みんなを布団に連れていきますか…。」
と大神は言ったが、それ話し方は大神ではななくまるで南達がよく知る人物の喋り方であった。大神が宴会場に布団を用意すると皆を寝かし、机を片付け、南と月夜と桜を自分達の泊まっている部屋に連れていった。
続く

原因

次の日、南が目覚めると宴会で散らかった酒などを片付けようとした。

しかし、自分は何故か部屋におりどうやってここまで来たのか覚えていなかった。宴会場に行くと酒瓶や机は片付けられており、皆は布団を敷いて寝ていた。南は疑問に思い大神の部屋に行くと、見に覚えがある姿になって布団の上に寝ていた。

南「光…？」

大神「ぬぁ？」

大神「俺のこと呼んだか？」

南「いや…ごめんなさい見間違えたみたい。」

大神「そうか…やべぇぶっ倒れる後の記憶が全くねーわ…頭痛いし。」

南「私もよ、流石にあの酔いじゃここまで来れないはずなのに。」

南「…ちょっと刀触ってもいい？」

大神「…大丈夫か、ずっと触ってると気失うぞ？」

南「ほんの2，3秒程度だから大丈夫よ。」

南が刀を触るとわずかに電光　光の魂と狐の九尾の妖力そしてそれ以上の物を感じた。あの呪いの刀、電光　叶の魂が宿った死の刀と同じ存在だった。南はこう思った、大神が所有しているあの呪いの刀は大神が愛用している刀のパワー増幅機なのではないかと。

再び温泉に入ると、南は考え事をしていた。

しかし、大神は何も言わずにただただ南にふっついて一緒にいることしか出来なかった。南が大神の存在に気がつくと顔を赤くし、手を繋いだ。

大神も同じように手を繋ぎ直した。だが、その時間は月夜によって壊された。月夜が風呂に入るとずるいといい、大神の方へよって行こうとしたが月夜は何か気が付いたのか洗い場へ行った。

南「…光。」

大神「…。」

南「もし貴方が男だったら、私本気で貴方のこと愛してた。」
南「でも、貴方はどちらかと言うと女の子…これからも親友同士よろしくね。」
大神「…悪いがそんな簡単に悪切れないわ、光だってお前のこと好きなはずだ友達としてじゃなく…幼馴染みとしてでもなく…1人の女として。」
南「大神…貴方の魂がそのうち消えちゃう魂なら、それだけ伝えておきたかったのよ…。」
大神「…流石に俺もゆっくりは出来ねぇよな…。」
南「大神？」
桜「一風呂浴びたらそろそろチェックアウトしますので、上がったら支度をお願いします。」
南「分かったわ。」
大神「さてと、俺は上がるわ。」
大神がそう言うと脱衣所の方へと戻って行った。
南は疑問に思い大神を追いかけた。服を着替えると大神はとっさに自分の部屋に向かった。
大神を追いかけた先は南が泊まっている部屋に着いた。
大神は自分の持っていた袋を開けると呪いの刀を持ってきており笑っていた。母さん私と合わせればアイツといい勝負になるわ…確実に勝てる…もう二度と同じヘマはしないといい恐ろしい笑い方をし大声で笑った。
南が大神と叫ぶとどうしたと言った。
南が大丈夫と聞くと全然大丈夫と大神はいい、服を袋に詰めた。
これは明らかに大神の様子がおかしいと思った南は刀を大神から取り上げた。
すると大神がよせといい南を止めた、南が1，2秒しか刀を持っていないのにも関わらず身体のあっちこっちに痛みがはしり身体が変形しそうになっていた。
南「な、何よ…これ…。」
大神「日が出てて直ぐには変形しなかったが…もし、満月だったら

確実にお前ここ滅んでたぞ…。」
南「こんなに危険なものだったの…？」
大神「ああ、そりゃそうだ電光家の刀は相当やべぇからな。」
南（大神…死ぬ気…？）
大神「さてと、俺はロビーに行くわ…南も荷物まとめろよ？」
そういうと大神は部屋を出てロビーへと向かった。
南はこれ以上のない恐ろしいと思ったことは無く、もし大神が光や大神じゃ無くなってしまったらどうすれば良いかそう思うと怖くて怖くて仕方なかった。
２時間後、南達が荷物をまとめ部屋を出ると桜がそこにいた。
桜が一緒にロビーに行くと、月夜と大神がそこにいた。
チェックアウトをし、旅館を出ると南は思った。このままだとブラックが危ないと。幽幻村に帰ると真っ先にブラックがいる魔法の森へと向かった。
南は身軽な姿で向かったので魔理沙達に驚かれた。
魔理沙「南、な…なんだよその姿…水着みたいなの来ちまってよ。」
魔理沙（裾も水で出来たやつなんだろうけど…。）
南「もしもの為の服よ、いざ戦いになったら大変でしょ？」
魔理沙「そ、そうか…てっきりそういう趣味があるのかと思ったぜ。」
南「うんそういう趣味はないかな少なくとも。」
と南は汗だくになりながら突っ込んだ。
魔理沙「いやいやいや、わからないじゃないかもしかしたら本当に―。」
南「誤解を招く事を言うんじゃありません!!」
魔理沙「嘘つけ絶対あるだろ、大神私を見てとか言ってんだろ！」
南「ないから、ってなんであんたが私が大神のこと好きだって知ってんのよ！」
魔理沙「私は冗談で言ったつもりなんだが？」
南「あっ…。」
魔理沙（マジかよ…面白ぇ図星かよ。）

南「い、いいい今のは忘れてね、ね？」
魔理沙「お前のおかげでいいこと聞きました♪。」
南「忘れなさい。」
魔理沙「ハイ、ワスレマシタ。」
南「よろしい。」
南「さてと、もうそろそろ行くわ…それじゃね。」
魔理沙「アッハイ、ソレジャ。」
と言うと南は森の奥へと向かっていった。
魔理沙（南って時々幽香みたいに怖くなる時あるよな…。）
南が奥へ行くと、とあるツリーハウスを見つけブラックの名を呼んだ。
しかし、何度呼んでも出てこなく南は留守なのかと思い帰ろうとした。
だが、ブラックが待ってと言いツリーハウスから飛び降りた。
地面に着地すると、南にどうしたと答えた。
南「どうしたもないでしょ…全く全然出てこないんだから。」
ブラック「悪いって、着替えてたから答えられなかったんだ。」
南「着替えてても返事くらいは出来るもんだと思うのだけれど…。」
ブラック「ちょっと待っててなんて言いずらいだろ？」
南「いや、唐突に待てって言ったじゃない…。」
ブラック「そうだけど…って…どうしたんだよその服装…目のやり場に困るんだけど。」
南「チャイナ水着苦手かしら？」
ブラック「ちょっとな…ていうかどうせお前の勝負服とか巫女服とかなんだろ？」
南「正解、まぁ普段は着ないからね…祭りの踊りとかで着るヤツなのよこれ、でもこれ時より勝負服や巫女服にもなるから時々来てるのよ。」
ブラック「でもなんでまたこんな時に…。」
南「実は…大神が…。」
南はブラックに大神のことをうち明かした。

刀の事や、電光　光のことを。
するとブラックは全部知ってると言い南に自分のこともうち明かした、だがこれは俺と南との秘密だぞと言われ2人の秘密が出来た。
ブラックはとにかく大神を止められるのは俺しかいない、でも俺がやばい事になっても大神が自分で止めるしかないといい。南は怒り歯を食いしばった。
南「何とかできないの!?」
ブラック「南も知ってる通り…だからもしかしたら人を殺すかもしれない…。」
ブラック「俺もそうなったら大神に助けてほしんだ…あいつとは仲のいい友達だから…。」
南「！」
ブラック「だから…大神の問題は自分で解決して欲しい…でも俺が人を殺さずに済めば大神を助け出せるかもしれない…わかってくれ。」
すると、南はその場に泣き崩れた。
南「だったら…私はどうすればいいのよ…私は大神…光しかいないのに、たった一人の親友だって言うのに…大好きな大神が消えるのだけはごめんよ!!」
ブラック「済まない…でもきっと助け出してやる…いいな?」
南「ブラック！」
南はブラックに抱きつき思いっきり泣いた。しかし、今後どうなってしまうのか南には知る由もなかった。
そう、木の影に隠れていた大神がそこにいることに関しては。
次の日、南は大神が言われるがまま幽幻村から見える湖に向かった。
すると大神からこんな言葉が出た。
大神「南…お前…ブラックと付き合ってんだろ?」
南「ええ…!?」
大神「昨日見てたんだ、お前がブラックと抱きつく所。」
南「ご、誤解よ別に付き合ってもないし、ただ相談に乗ってもらっ

てただけよ！」
大神「俺の事の相談ねぇ…余計なお世話さ…。」
南「何言ってるのよ、貴方このままだと…！」
大神「とにかく恋愛は自由さ、でも俺に恋してたって嘘をつくのは行けないことだ…もしまた俺を裏切る事があるなら…見逃さん。」
南「大神！」
南「大神、お願い目を覚まして！」
南「なんで…！」
大神は南のことを置いてどこかへ行ってしまった。
南はその場に泣き崩れ、大神の名を叫ぶことしか出来なかった。
一体大神に何が起こってしまったのかそれはわからかったが、南は泣いてハッキリした。大神は徐々に光の性格に戻って行っており、誰かを殺してまでヤンデレを探そうとしているのだろうと。
夜、南は外の景色を見ていた。
大神はどこに行ったかわからずただただ月を眺めることしか出来なかった。そんな中、桜が襖を開け南にこういった。
桜「大丈夫ですか、南様。」
南「ごめんなさいね、大神のこと裏切っちゃった…。」
桜「そんなことないですよ、誰かに相談することは良いことです。」
桜「ですが…私からも謝る事があります。」
南「え？」
桜「折角の旅行で南様の関係台無しにしてしまいました…申し訳ありません。」
南「そんな、貴方は悪くないわよ…いい温泉旅行だったわ、いい思い出出来たもの。」
桜「ですが…。」
南「なんか貴方の顔を見たら、元気が出てきたわ。」
南「大丈夫、絶対に大神は私が連れ戻すわ…絶対に…心を鬼にしても。」
桜「それはいけません、貴方の裏の能力…もしその能力を解禁してしまったら南様、力を制御しきれなくなります！」

南「かもね…でもそれでもいいわ、大神の為なら私出来ることならなんでもする予定だったんだから…。」
といい、南は勝負服に着替え始めた。
南はやる気だったのだ、刀の力と光の性格を止める為に。
南は、光がこのまま戻ってきてもよかったけれどまだ戻って来る時期が早すぎると思い。南は大刀に持った。
南「さて、用意して…大神を取り戻すわよ。」
桜「…ですね、南様お供します。」
南「悪いわね…さてと”妲己”は大神を連れ戻すことを命じるわ！」
桜「ハッ！」
南達は空に飛び、大神が行きそうな所を探し回った。
しかし、魔法の森や紅魔館などを探したが見当たらなかった。
そこで南は人間の里にいるのではないかと思い、人間の里へ向かった。
行ってみると、村の住民は人殺しと叫びながら逃げていた。村の人間が南にぶつかり突然、助けてください、あの狐人殺しですと泣きながら言ってきた。南は落ち着いてといい村の奥へと向かった。
すると大神が他の住民の家に入っていくのが見え、南はそこへ向かった。
そして案の定、大神はその住民に向かってヤンデレ・スカーレットは知らないかと聞いていた。
村の住民の家族は知らないと言ったが、大神が知らないのなら死ぬしかないねといい刀を振りおろそうとした。
だが南によってそれは止められた。
大神（？）「んん、何かな…僕はいま物凄く忙しいんだよ…後にしてくれないかなぁ？」
南「光、やめなさい…このまま人を殺すと、死ぬわよ？」
大神（？）「光…何言ってるだよ、僕は電龍　大神だよ…それに僕は不死身だ死ぬことはまずないさ。」
南「そう、ならそんなに斬りたいのなら…私を斬りなさい！」

大神(？)「あはは、君面白いこと言うね…僕はただヤンデレ・スカーレットを探してるだけなのに、君を殺してなにか得があるのかな？」
大神（？）「それとも君、あの子の居場所知ってるのかい？」
南「ええ、知ってるわ…でも私に勝てたらその居場所を教えてあげる。」
大神（？）「あはははは、どうして勝てると思うのかな？」
南「だって脚が震えてるじゃない…まだ心の中では私を斬るのが怖いのよ。」
南「私だってわかっているんでしょ、なら私の名を呼べばいいのに。」
大神（？）「君の事なんて全く知らないよ、まぁ名前を知った所で君はもう死ぬんだし…殺されちゃう人間が名前名乗っても意味ないよね？」
大神（？）「可愛がってあげる！」
と言うと大神は南を襲いかかってきた。南の大刀は槍みたいな刀で大神の刀より大きいので、制御がとても難しい。
さらに、南はスペルカードと能力と弾幕で生きてきた狼で大刀を使う事はあんまりなかったのだ。少し不慣れな南に針を刺すように大神の刀は襲いかかってくる。攻撃を防御している間にも大神の攻撃はどんどん強くなっていく。南はとても焦った。そして南はこれ以上防御仕切れず、大刀を取り上げられてしまった。
しかし、桜が大刀を持つとすぐさま大神に攻撃をした。
桜「南様1人じゃやられてしまいます、ここは人数が多ければ多いほど強いんです。」
桜「さぁ、人の子よ早く逃げるのだ…そなた達もここで死にたくはないだろう？」
南「ありがとう…桜。」
南「この子の言う通りよ、早く逃げなさい？」
人間「あ、ありがとうございます!!」
人間の里の住民は家から出ると、桜はすぐ様クナイに持ち替えた。
さらに、南は桜から大刀を受け取り抵抗した。

大神は、酷いなそういうの数の暴力って言うんだよといいさらに素早くなってしまった。だが、2対1との勝負何処から来ても必ず勝負が着くと思っていた。大神の攻撃になる前までは。

大神（？）「全く、鈍いなぁ…全部避けきれちゃったよ…もっと早く来なよ！」

大神（？）「来ないならこっちから行くよ！」

すると、大神は天井の壁に張り付き南達の方へ飛んできた。

南はこれを喰らうまいと防御をした。そして桜が飛び大神をスペルカードで眠らそうとした。しかし、もう一本の刀を脚に持ち信じられない回転斬りをし始めた。南達は攻撃を食らってしまった。桜はしばらく立ち上がる事が出来なかった。南はその場に倒れ込むしかできなかった。

霊夢達が異変の噂を聞きつけ、大神達が戦っている場所に向かった。

すると、危険な惨状になっていた。霊夢は南を助けようとしたが大神が用意していた札のせいで中に入ることが出来なかった。

攻撃しても攻撃を抑制され、中に入ることが全く出来ずただ霊夢はその場を見るしかできなかった。

大神（？）「君…狼なのに美味しそう…血も良さそうだけど他はどんな物を出してくれるのかな？」

南「大神…貴方そんな奴じゃなかったでしょ…やめて…!!」

大神（？）「さぁ、叫べ、泣け、血を出せ！」

南「大神！」

桜「…させるか！」

大神（？）「なっ！」

桜は大きくおならを出した、何故出したのかというと彼女の本性はスカンクだからなのだ。南はハンカチを出し顔を被った。

すると大神の攻撃が止み、大神はその場に倒れ込んだ。

そう桜のスペルカードで大神は眠ってしまったのだ。桜のおならは催眠効果があるためほとんど人間や獣人でもその場に倒れ込み眠ってしまうのだ。しかし、倒れたはずの大神が起き上がってこう言

い始めた。
大神（？）「…ふふふ…あはははははは、はははは…無駄だよ、僕の能力は全部の”スペルカードや能力を無効にする程度の能力”…僕を倒す事は決して不可能！」
大神「ってな、はぁ…南…ごめん。」
南「へぇ？」
大神「今ここで謝る、俺はこの刀の力に負けかけてた…それは焦りまくって全てこの刀に頼っていたからだ。」
南「それじゃ…貴方、本物の大神なのね!?」
大神「この通り、南、桜…みんなに迷惑かけてごめん…ブラックに相談してたのにも関わらずあんなこと言って！」
南「大神ー！」
南「大丈夫、私は許す…どんな事があっても貴方がさっきみたいに間違えても!!」
南「うわあああああん！」
大神は霊夢の方を見て土下座をした。すると、霊夢は笑みを浮かべ首を振り神社へと帰って行った。南は大神に抱き着き泣き続けた。泣きやみきちんとスッキリするまでずっと。
文の新聞には、幻想郷の怪物現ると言う記事で大神や南の記事は全く書いていなかった。それは紫が書かないように念押しされていたのだ。
紫は隙間から大神達の勝負を見てハッキリわかったことがあったからだ。
大神が間違った方向へ行っても自分から間違えと気付き皆を正しい道へと導くと思ったのだ。だがまだその刀を力はさらに増す事になる。
それは大神の死、そして今後の物語を大きく左右される事になる。

せめて、自分も

1ヶ月後、大神達は完全幻想郷に溶け込んでいた。
大神は長いこと帰れずに帰れる方法を考えていたが、今では南がそばにおり寂しさを紛らわせていた。だが徐々にヤンデレに殺された時の記憶を思い出しつつあった。それは紫にとって、非常に変だと思った。それは紫が隙間を使って大神の記憶を完全に抜き取ったはずだったのが徐々に思い出しきているのは有り得ないことだからだ。
そこで、桜と南を紫の家に呼んだ。
桜「紫様…どうされたのですか？」
南「そうよ、別にこれと言ってやばい異変とかないわけでしょ？」
紫「そうね…他の人からしたらほんの些細なことかもしれない、でも貴方達も気づいているんじゃないかしら？」
紫「隙間から見てて思った、彼…いいえ彼女は徐々に”ある子”の事を思い出し始めてるの…。」
南「それってヤンデレの事？」
紫「それだけじゃないわ、他にももう一人いたことは貴方にも話したでしょう？」
南「ええ…でもそれと”あの子”が大神の人生を深く帰るとは思えないのだけれど…？」
紫「それはね実はかなり関係あるのよ…” 刀にいる彼女”を目覚めさせる程の関係が…。」
桜「大神様は善悪を区別し悪人だけを裁いてきたと聞いております。」
紫「そう、彼女はそんな子だった…そのたまたま居合わせた子は普通の善人…大神が斬る理由がないのに、大神はその子を庇い一緒に死んでしまった。」
紫「大神はヤンデレ・スカーレットを恨んでいるわ、南をここに連れてきたのは大体私だしね。」
紫「プラス、全く無関係の獣人を殺してしまった時点で彼女は怒り狂うに違いないわ。」

南「まさか…それで大神が暴走するっていうの!?」
紫「恐らくね…霊夢にはもう言っておいたわ…もしあの子が暴走し刀にいる彼女の魂が目覚めでもしたら…。」
紫「もし大神がここに残りたいと望むなら…出方次第では峰打ち程度で済むはずよ…そう…霊夢に伝えといたから…。」
南「出方次第って…じゃあ大神はどうなるって言うのよ、もし大神を殺すことになったら私許さないからね、絶対絶対紫や霊夢を許さないからね！」
南は紫の首を両手で持ち上げそういった。だが桜は、落ち着いてくださいといい南を止めた。
紫はこう告げたあと隙間に消えていった。
紫「大丈夫…彼女少なくとも心の底に幻想郷に居たいっていう気持ちがある…彼女次第でここに暮らしていく人生が変わっていく…あとは大神がどうしたいかそれだけなのよ。」
南達が紫の家に帰ると南は寄り道をしに行った。
南が魔法の森に行くと、ブラックが魔理沙の家の中を覗いていた。
南は魔理沙の家の中を見てみると、魔理沙が1人で熱心に本を読み珈琲を飲んでいた。
魔理沙が読んでいた本は魔導書ではなく小説であった、普段は魔導書しか読まない魔理沙が小説を読む事は非常に珍しい。だが、ブラックは魔理沙の顔ばかり見ていた。ブラックが魔理沙の顔をみているのは珍しくはないが今回のブラックはとても顔を赤くし魔理沙の顔を見ていたのだ。
桜が変だなと思った瞬間南は桜の肩を置き、ブラックの裾を引っ張り魔理沙の家を訪ねた。
ブラック「な、何すん――！」
魔理沙「よぉ、ブラックと南どしたよ今日は。」
南「仕事帰りよ今一人？」
魔理沙「そうだぜ？」
南「上がらせてもらってもいいかしら？」
魔理沙「いいけど…あまりいいものは出せないぞ？」

桜「大丈夫ですよ、すぐに帰りますんで。」
南「また散らかってるのね…私達で片付けとくから、魔理沙はお茶でも淹れて頂戴。」
魔理沙「なんだよ…いきなり上から目線でよ。」
南「まぁまぁ…私なりのお節介だから気にしないで。」
魔理沙「まぁ、最近廊下歩きにくかったからな…頼んだぜ。」
すると、南は桜とブラックと一緒に散らかった本や食べ物を片付け始めた。南は本棚を桜は食べ物をブラックは服の片付けと分担して行っていた。そして綺麗になった瞬間、桜は台所に向かい魔理沙と一緒に散らかった皿などを片付けていた。
するとようやく南が話し始めた。
南「魔理沙のことが好きなんでしょ？」
ブラック「べべべ別にそんな事ないぞ!?」
南「じゃあ魔理沙の家覗き見してなのはなんだったのかしら？」
ブラック「なっ、見てたのかよ!?」
南「それは図星ね、顔を真っ赤にしてそう言ってるってことは恋してるっていう予兆よ？」
ブラック「あのな～…。」
南「まぁ、別にいいわ…魔理沙は人気者ねアリスやパチュリーにまで愛されて。」
ブラック「え…パチュリーって言うやつはともかく、アリスまで魔理沙のこと好きなのかよ…そうは見えなかった！」
南「アリスはあまり顔に出さないからね…普通は魔理沙のことどうだってことないって澄まし顔でいるけど、アリスの裏の顔は魔理沙がとても好きなのよ…魔理沙もそれを知ってる、まぁ長いこと一緒にいる友人らしいしそういう所はよく分かるのねきっと。」
ブラック「なんか…振られた気分になるなぁ…ちょっと落ち込む。」
南「でも魔理沙が好きなのはいい事かもね、あの子結構元気あるしね…アリスやパチュリーに負けないくらい好きだってこと教えてあげればいいのよ、そうすれば魔理沙はあなたのことも好きになるかもしれないわ。」

ブラック「マジで!?」
南「たーだーし、告白を過ぎに迫っちゃうと魔理沙が困惑しちゃうわ…もうちょっとお互いの事を知って…まず自分からどうしたいか考えて、自分から行動すること…それで上手くいかなかったら諦めることしかないかしらね…。」
ブラック「行動すること…か…やってみるよ…。」
と話している内に魔理沙と桜が台所から出てきた、おぼんには紅茶が入っており4人で紅茶の味を堪能した。
しかし、Tパック入りの紅茶とはいえあまり美味しいものではなかった。
桜が台所にいきTパック入りの箱を持ってリビングに向かうとこういった。
桜「魔理沙さん…これ…賞味期限…5年前の日付なんですけど…。」
一同「…」
魔理沙「だ、大丈夫だろ…5年前とは言えど開けてなかったし…。」
桜「あれ…これ前から〝空いてた〟ってさっき言ってましたよね?」
魔理沙「…」
魔理沙「ごめん用事思いー。」
南「ちょっと待て」
南が魔理沙の肩を掴むと、肩に激痛が走った。
南は笑顔のまま肩を掴み続け魔理沙に後ろを向かせようとした。
桜は、ブラックを刺激しないように部屋の外へ出ていった。
ブラックは恐怖心のあまり体が動かなかった。だが桜の問い掛けのお陰で部屋に出ることが出来た。
すると南が口を開けた。
南「うん、美味しかったわよ貴方の紅茶。」
魔理沙「ほ、本当ですか南さ―。」
南「ただしもっと早く気づくべきだったんじゃないかしら…?」
魔理沙「は、はい。」
魔理沙「でも、南のお陰で部屋も綺麗になったし…前から探してた

紅茶の箱まで見つかったし―。」
と言ってもだが南は笑顔のまま。
魔理沙は恐怖のあまりその場から逃げることが出来なかった。
魔理沙は一刻も早く逃げようとしたが体が動かず、八卦炉を取り出すことが出来ずただ南の顔を見ることしか出来なかった。
南「魔理沙…逃げるのなら今よ…逃げたら残機1機減らしてあげる。」
南「ただ謝るなら、これ以上は言及しないわ…。」
魔理沙（マジか…バレた…で、でも謝るなら今のうちだけど、そんな性格じゃない私は絶対謝らない…だって5年前の賞味期限なんて誰も気づかねーし…。）
だが、南は目を開き笑顔のままこう言った
南「変なこと考えてないで謝るなら…今のうちよ…。」
魔理沙「ハイ、スミマセンデシタ…。」
と魔理沙は南の声と顔の威圧のせいでつい声が出てしまった。
すると桜達は事が収まったと思い部屋の中に入ってきた。
南は平常心に戻り、4人で一緒に賞味期限切れの紅茶を飲み干した。
しばらくすると南達は帰って行った。
南「また来るわ、それじゃ。」
桜「今日はご馳走様でした。」
ブラック「今日は…ありがとうな。」
魔理沙「いいんだぜ、別に…さてと私も行かなきゃ行けないところがあるから、じゃあ。」
といい魔理沙達は別々の方向へ。
南は真っ先大神の家に向かった。
南の家に入ると大神は料理の支度をしていた。
大神がおかえりと言うと、南は大神に抱き着きに行った。しかし、大神から微かに臭った臭いが大神の臭いではないと思いこう答えた。
南「あら…他の狼の臭いがする…まさか月夜とあった？」
大神「どうしたよ、たまたまあって剣術指南してただけだよ。」

南「え、そうなの？」
大神「ああ、俺の足で刀を持つ回転斬りを伝授したいって言ってて
さ…あれ結構簡単なものじゃないんだよ逆上がりのままやらなきゃ
行けないし。」
大神「それに、まだ飛び回し切りも上手く出来ないのに教えてく
れって言ってきたんだよ…そこまで剣術指南して欲しかったのかと
思うとちょっとびっくりした。」
南「それにしてもあの月夜がそんなこと言い始めるなんてね、きち
んとした剣術ちゃんと出来てるんだから大神の我流の剣術を教わる
必要ないんじゃないかしら…。」
南「あの足の回転斬りはゲームの技を真似てやったんでしょう、現
実離れしてる動きを覚えちゃう貴方相当天性の才能を持ってる気が
するのだけれど。」
大神「まぁ…親似だしな仕方ないさ（汗）。」
と言っているうちに料理が出来上がり、二人分の皿が並べられた。
南「あれ、これ私の分？」
大神「ああそうさ、ここに来ることはわかってたしな。」
南「ありがとう～!!」
大神「ちょ、いきなり抱き着くな…皿が置けない…！」
桜（ああ、今日も平和だ…大神様と南様が仲良くしてるシーンなん
て絶対見れないなぁ～。）
紅魔館、魔理沙は紅魔館にいきパチュリーがいる地下図書館に向
かった。
しかし、後ろから付けられていることも知らずに。
ブラックは魔理沙のことが気になったのか魔理沙と同じ方向へ向
かった。
それは紅魔館だった。
魔理沙が地下図書館に行こうとしていたので、ブラックは影となっ
て隠れて尾行し始めた。
魔理沙が1階に降りると、そこには長机の上に本棚が置いてありそ
こに机に向かって本を読んでいたのがパチュリーであった。

ブラックは益々魔理沙を尾行し始めた。それは、魔理沙が好きだからという理由もあったがそれだけじゃなかった。
パチュリーやアリスにどのような態度を取っているのかそれを観察しようと思い尾行していたのだ。
魔理沙はパチュリーと話しているが、何を話しているかわからずただそれを見守ることしか出来なかった。
すると小悪魔が空を飛んでいたのでそれに混じって下に下っていった。
魔理沙「悪いな、いつも返せなくて…今日はちゃんと返したからな。」
パチェ「…どういう風の吹き回し、貴方がいつもは返さない本を返すなんて。」
魔理沙「小説は長いこと深読みすることが出来るけどよ、魔導書は覚えるまでが大変だならなかなか返せないんだ…でもこの小説面白かったし出来ることなら早めに返そうと思ったんだ。」
パチェ「面白ならしばらく読んでおけばよかったのに…。」
魔理沙「そうなんだけどさ、これ読んでるとなんか申し訳ないって思ってきてさ…だから今日返しに来たんだぜ…次の日ももう1冊返すよう努力するからよ。」
ブラック（えええ、嘘だろ…あの魔理沙がちゃんと本を返した!?）
魔理沙「いやぁ、この小説切なくなってさ結構深読みしたしパチュリーが大事にしてた本なんだしそれくらいはいいだろ？」
パチェ「まぁいいけれど…貴方最近強くなりたくて筋トレ始めたでしょ？」
魔理沙「あ、わかるか？」
パチェ「まぁ近頃、霊夢や咲夜とかあの外から来た南と大神が強いって噂だし、貴方も負けてられない物ね…。」
魔理沙「別にそういう訳じゃないぜ…ただ霊夢達とは長い付き合いだろ、だから親友としてきちんと見て欲しくて…さ…。」
パチェ「…まぁ気持ちはわかるわ、でも霊夢には他人としか思われる部分がいくつかあるわけだし…そこは仕方ないんじゃないかしら

…私も霊夢に他人として見られてる部分ある訳なんだし。」
パチェ「どうしても振り向かせたいのならこの本貸してあげる、結構奥の深い小説だから…霊夢との付き合い方も変わるはずよ？」
魔理沙「へぇ…友人関係の小説か…私不幸になるやつあんまり嫌いなんだがな…。」
パチェ「大丈夫よ、これはハッピエンド用の小説だし…貴方が嫌いな要素も少ないわ。」
魔理沙「ならいいんだが…。」
ブラック（そういえば魔理沙は霊夢と古い仲だったよな…忘れてた、でもパチュリーも友達には優しいんだな…色んなことは無関心なのに。）
すると魔理沙がしばらく話終えると、地下図書館へ出て行った。
ブラックもそれを追いかけようとしたが突如時がいきなり止まり体が動かなくなってしまった。そして自分が時が止まっていることも知らずにナイフを連続で投げつけられていた。
気がついた時には、ナイフが全身に刺さって行った。
瞬間咲夜の攻撃だと思い、バレるはずがないのに何故バレたかそれは謎だった。そして、ブラックの肉体は砂とかし消えていった。
すると、ブラックが土管から出てきてなぜ気付いたと大きい声で咲夜に解いた。咲夜が言うには魔理沙の影の形が微妙な違いがあったため誰だと思いナイフを刺したらしい。
咲夜は魔理沙を尾行するのはあまり良くない、やめておいた方がいいと言われ。しばらく咲夜とレミリアと一緒に紅茶を飲んでいた。
ブラック「すまないな…紅茶までご馳走になっちまって…。」
レミィ「まぁ、聞きたいことがあったからね…私の姉…”ヤンデレ・スカーレット”が消えもう１８年以上も経つ…大神が言っていたことなのだけれど…。」
レミィ「貴方、”ヤンデレ・スカーレット”じゃないかしら？」
ブラック「ッー！」
ブラック（…大神のやつ余計なことを…！）
ブラック「ちょっと待ってくれ…確かに”ヤンデレ・スカーレット

”ってアンタの姉さんだけど、俺がヤンデレって言う奴の可能性はないだろ…村中に捜索願いが出てるけど俺は何も知らないし、みんなが言うようにみんな”ヤンデレ・スカーレット”って言ってるけど俺はヤンデレってやつじゃない！」

レミィ「落ち着きなさい、まだ半信半疑なのよ…本気で疑ってるわけじゃないわ…。」

ブラック「何言ってんだ、そんなに俺もいちいち”ヤンデレ・スカーレット”って奴に疑われてたらやってられねーよ、俺はもう行く！」

ブラック「それじゃぁな！」

と言うと窓を開け外へ出て行った。

レミリアは、少し申し訳ない気持ちになったが大神が思うようにブラックが”ヤンデレ・スカーレット”の可能性がある内はなんとも言えないのだ。

そこであなたは、無実ですと言ってもブラックの気持ちは晴れないまま。さらに貴方は”ヤンデレ・スカーレット”だと確信を持っていえるものでもなかった。しかし、霊夢達は既に気付き始めている。

ただ、大神は薄々は気がついているがもしかしたら本当に人違いだったら俺はもう大事なヤツをも殺す人間だと思っていた。

ブラックは魔理沙が行く方角的にアリスの家に行くと思い、アリスの家に向かった。

すると、魔理沙とアリスが茶を飲んでいた。

アリスと魔理沙の姿を見ているととても楽しそうに話していた。

いつも仏頂面のアリスが魔理沙と一緒にいると笑顔を見せ魔法のことや最近の出来後を話し、楽しく話していた。

そんな魔理沙達を見ているととても羨ましく思え、とても怒りを持つようになった。

午後2時になると、魔理沙はアリスの家に出て霊夢の神社へと向かった。

ブラックは必死になって追っていた。

次第にブラックは魔理沙の愛する気持ちがどんどん強くなって行った。

博麗神社に到着すると、神門の影に隠れ霊夢のことを見ていた。
霊夢は退屈そうに話、魔理沙は楽しげに話していた。
時より霊夢は笑い興味を持つが、魔理沙は少し不満そうだった。
すると魔理沙はこう言い出した。
魔理沙「なぁ…霊夢…私の事きちんと友達として見てくれてるか？」
霊夢「何よいきなり、当たり前じゃない。」
魔理沙「本当のこと言えよ、私はお前と異変解決した仲じゃねーか…なのに最近は適当にあしらわれ…私ってそんなにここに来るの駄目だったか？」
霊夢「そうは言ってないでしょ、何を言われようと貴方に危険が迫った時は助けてたじゃないもっと自信持ちなさい。」
霊夢「それに、私は貴方のこと親友以上だと思ってる…昔からの旧友だし。」
魔理沙「霊夢…。」
霊夢「さてと私ちょっと手席外すわね。」
霊夢が居なくなると、しばらくブラックは魔理沙の事を見ることしか出来なかった。しかし、後ろから妙な視線を感じ振り向いてみると霊夢がそこに立っていた。
霊夢「貴方ずっと魔理沙の事付けてたわけ？」
ブラック「うわっ、さっき便所行ってたんじゃなかったのかよ!?」
霊夢「全く1度こっちに飛んできたんだから、いちいち空飛ぶの嫌なのよだからどうしてずっと魔理沙の事を見てたのか教えて欲しいのよ。」
ブラック「そ、それは…ッ――…。」
霊夢「わかった、言い難いことなら無理に話さなくていいわ…でもずっと誰かに助けて貰って魔理沙と一緒に話してたらキリないわよ？」
ブラック「…。」
霊夢「いつもそんな感じだと魔理沙と話出来なくなるわよ。」
ブラック「それは嫌だ…。」

霊夢「そうでしょ、いつまでも物陰に隠れて魔理沙を見てるようじゃダメなのよ。」
霊夢「ほら、今回は私が一緒について行ってあげるから今度から魔理沙と話したければ、自分から動きなさい。」
ブラック「お…おお…。」
霊夢「お？」
ブラック「お母さーん！」
ブラック「おっおっおおお！」
霊夢「やめろ、色んな意味で！」
霊夢「ていうかなんだその泣き方!?」
しばらくすると、霊夢はブラックを連れて魔理沙の方に行った。
ブラックは魔理沙に俺は魔理沙にもっと見てもらいたい友達以上に恋人みたいにといい赤面した状態で言った。すると、魔理沙と霊夢は顔を赤くし霊夢は片手を顔に当てた。
魔理沙はしばらく黙り、考え込んでしまった。
そして、1時間後。ようやく魔理沙が口を開いた。
魔理沙はきちんとお前のこと見てやるが、恋人みたいに接するのは今の私には出来ないだからこれからも友達で、いや友達以上の友人として接していこうといいブラックは喜んだ。
しかし、魔理沙の今後の行動と紅魔館の行動によりブラックの人生が大きく変わってしまうのであった。

暴走

数日後、ブラックは魔理沙と仲良くなり魔理沙が行く所は何処へでも行くようになった。そしてブラックは魔理沙と一緒に約束し嘘や隠し事はしないようにしようと誓った。

だが、そんな生活は続かず魔理沙がブラックを残し何処かへ行くようになってしまった。ブラックは気にかかったのか魔理沙の後を追うようにした。するとブラックはとんでもない場面に遭遇する。

なんと、ブラックはアリスと会って一緒に茶を飲んで楽しんでいたのだ。その当の本人も楽しんでおりブラックは置いてきぼりにされた気分になった。ブラックは辛くなったのかその場を後にし幽幻村へ向かった。

着くと、南は大神に向かって何かを唱えていた。

それと同時に大神も南が言っていることを唱え、大の字になり立っていた。だがブラックには大神が浮いているようにも見え大神の身体は水色にそして黄色に輝いていた。ブラックはその場面を目撃してしまい恐怖した。大神が目を開けると浮いていた体が地面につき、南も閉じていた目を開け眼帯を付けた。そう、南は眼帯を外し詠唱を唱えていたのだ。それを唱え終わった為大神達は目を開けたのだ。南達は持っていた札をしまいブラックに話しかけた。

南「あら、ブラックじゃないどうしたの？」

大神「おっ、ブラックじゃん。」

ブラック「何してたんだよ…。」

南「大神が、もしもの決闘の時に私の力を分け与えていたのよ。」

大神「プラス暴走しない様に封印してたわけさ。」

南「この札役に立って良かったわぁ。」

大神「ああ、最近意識が保ってられないからコイツは最強だ。」

ブラック「そ、そうなのか…ってそれより相談に乗ってもらいたいんだけど…。」

２人「相談？」

ブラックは２人に、魔理沙がアリスといた事を伝えると。大神達は

話に乗ってくれるようになった。だが、アリスと魔理沙が一緒にいることは当然の事で、ブラックに言わずにアリスの家に行ったのも単に忘れてただけかもしれないと大神は言ったものの、ブラックはますます暗くなってしまった。南は尾行を提案し、3人で尾行することにした。

魔理沙の後を追うと、向かった先は紅魔館だった。

大神は紅魔館だと咲夜に気付かれると判断したのか大神は影そして体を透明化させ、音も周りに聞こえないように音を消した。

大神達が向かった先は紅魔館の大図書館、ブラックが見たものは魔理沙とパチュリーが寝込みを襲っているようななんとも卑猥な場面に出会してしまった。魔理沙は顔を真っ赤にし、ごめんといい逃げるように、図書館を後にして行った。パチュリーはしばらく床に寝込んだまま、顔を真っ赤にさせ両手を顔に押さえた。ブラックはその場面を見てしまったおかげで怒りに怒り、紅魔館を憎み始めた。魔理沙がフランの部屋を訪れると、フランに算数などを教えフランと楽しんでいた。だがまだ顔が赤く、魔理沙は少し後悔をしていたのか時より顔を両手で隠す素振りも見せた。フランに算数を教え終わると、フランとおもちゃで遊ぶようになりめいいっぱいあそんだ。しばらくすると、魔理沙はフランの部屋を後にしレミリアの部屋に行った。レミリアにはかなり仲良しで、かなり親しくしてくれていたのだ。お茶もだしなんとご馳走まで魔理沙におもてなしをした。

それもそうだ、最近の魔理沙は日頃良い行いをして行きパチュリーに返せずいた本を1冊返したのだから当然良い事をしたのだ。だが、ブラックがそれを見ているともっと怒りが込み上げてきた。最終的にはナイフで刺し殺そうかと思った考えていた。それはみんなに良くされ自分のものなのにみんなに奪われていくなんて最低最悪だと自分で思ってしまったからである。するとブラックは自分の家に戻って行った。しかし、南は追いかけようとしたが大神は何かに勘づいたのか南の肩を掴み首を横に振った。

ブラックは自分の家に帰り、1ヶ月以上家から出ることは無かった。

南が紅魔館に行くと、レミリアに会いたいと美鈴にいいレミリアにブラックとヤンデレのことを話した。
南「ということで、あの子の行動は確信に変わったわ…けれどあの子はいつ襲ってもおかしくない…だからあまりあの子を刺激しないようにね。」
レミィ「やっぱり…そうだったのね、大神に言われて薄々気がついていたのだけれど。」
レミィ「大神は、信用し難いけど…貴方なら信用出来る。」
レミィ「昔世話になってるし、何しろ中国とかである紅茶をお裾分けしてくれる優しい…お、お姉さんだしね…。」
南「おい、噛むな。」
レミィ「スミマセンデシタ…。」
レミィ「でもまぁ、貴方なら信じられる。」
南「…それはありがたいわ、でも大神を何故信用出来なの？」
レミィ「それは、アイツが辻斬りだって事よ…悪人しか斬らないけど元を正せば普通の人間を斬っているのには変わりない…ご子息とか残してるかもしれないのに…。」
南「確かにそうよ…でもあの子は正義を貫き、残されたもの達に苦痛を与えないようにして生かしてるとか言ってるけど…あの子だって本当は殺したくは無いのよ…。」
レミィ「でも、なんでそんなことしなければならないの？」
南「先祖が遥か前…鎌倉時代初期から代々伝わる決まりなの、そうしなければ腰抜け呼ばわりされるかその名前で生かしてもらえないから。」
南「それが大神が電光家に伝わる言い伝えらしいわ…あの子…電光家でも無いのに…。」
南はレミリアと長らく話していると狐火が紅魔館の中に入っていき南の目の前に止まった。すると火の中から桜が映し出され、南はどうしたのと説いた。桜は驚き動揺した様子で南に言った。
ブラックが動き出したと。
物凄い殺気があり、外にいた妖精達は恐怖し物陰に隠れていた。

人間の里では、猟銃を持った人間達がおりさっさと立ち去れこの化け物と言われた。が、ブラックは一向に引かずナイフを斜め右に振ると猟銃を構えていた人間達があっさりと斬られ死んでしまった。
それを聞いた、大神は自分の刀と呪いの刀を持ち外へ出掛けに行った。桜もついて行こうとしたが南に紅魔館まで来てくれと言われ紅魔館に向かった。しかし、大神は空に上がったまま何処にも行かず周りを見渡していた。そうブラックが動くのを待っていたのだ。
すると、ブラックの身体に変化があり姿形が女へと変貌。
そして大神はその姿を見た事がある。
大神（ついに…見つけた、ヤンデレ・スカーレット！）
大神（復讐とかそんなの今はどうでもいい、とにかくレミリアを殺されないように守らなければ！）
ブラックだったヤンデレは紅魔館に向かい笑いながら。
大神もその後を追うように向かい、復讐という言葉を忘れ必死に全速力で紅魔館に向かった。
一方、南と桜の方では門の前で桜に色々なことを話した、すぐには理解できなかったらしいが納得しもし桜の事がバレてもいいように準備はしておいた方がいいと南に釘を刺された。
南は封印の札を持っている為、いつ大神が暴走してもいいようにしている。しかし、南にはやらなければならない事がある。それはブラックだったヤンデレを止めなければ行けないのだ。ヤンデレがやってくると南は眼帯を外し呪文を唱えた。
南の片目は紅く、他とは違う力を持っていた。南の目は光り輝くのでいつも眼帯から目が見えているように見えていた。南のその力を解放し目からまゆの辺りまで黒く染ったそれは波動を持ったモンスターのような姿。
これが南の第1段階の力である。南はスペルカードを持ち、ヤンデレを止めようとした。しかし、ヤンデレのスピードは今までより早くなっており
止めるのは困難になっていた。魅せるよりも殺す方の執念が強くヤンデレにはスペルカードが通用しなくなっていた。

だが、南にはまだ力が残っており第2段階まで解放させた。それでもヤンデレは早くなるばかり、それどころかワンパターンだった攻撃がランダムになり更に力を増して行った。
南（ど…どんだけ速いのよこの子…。）
南（こうなったら仕方ないわ…私も暴走しかねないけど…。）
桜「まさか…お辞め下さい南様、”アレ”を開放してしまったらあなたの身体が危険です！」
南「下がってなさい桜、貴方まで怪我されちゃ溜まったものじゃないわ。」
桜「嫌です、リスクが大きすぎます…今なら2人で攻撃すれば！」
南「下がってなさい！」
桜「ッ―!?」
南「貴方は大事な大事な下僕…いえ…。」
南「桜は1人の家族なんだから。」
桜「!?」
南「中に入って準備しておきなさい、必ず全員生きて帰るわよ。」
桜「…はい！」
と言うと桜は門を開け、紅魔館の中へ走っていった。するとようやくヤンデレが口を開くようになり、こう言い出した。
ヤン「良かったのかしら、本当にそれで…私にいつ殺されても可笑しくないのに？」
南「桜はまだ死なす訳には行かないわ。」
ヤン「なんにもわかってないのね…あの子本当はスカンクのホムンクルスだって言うのに？」
南「だからよ。」
ヤン「？」
南「あの子はあの子で外の世界で色々とあった獣人…でも私がこうして親しくしているのはなぜだか分かる？」
ヤン「さぁね、気にしたことも無いわ興味無いもの。」
南「そう、じゃあ教えてあげるわぁ。」
南「あの子が可愛くて優しくてパワーがある天然さんだけど…私は

そんな子嫌いじゃないしむしろここに私の下僕に着いた時点であの子は家族なんだから！」
南「当然じゃなぁい!?」
南の姿が変貌し第３段階の力を開放した、一瞬暴走しそうになるが力でなんとなくねじ伏せ口調も少し代わり妲己その物の姿へと変貌した。だが、南は第４の力。〝覚醒〟を待ち望んでいた。〝覚醒〟しても姿は変わりはないが目が黄色くなり本物の妲己になれるのだが、ヤンデレを殺す訳ではなく止めることが目的その〝覚醒〟をさせないように
だがヤンデレは殺る気満々で南に攻撃を続ける。上から南を見ていた大神は危険を感じたのか大神も参戦した。
大神「何やってんだよ！」
南「あら～…大神じゃ…ない…はぁ…はぁ。」
大神「全く、１対１じゃ負けるぞ…あいつ攻撃する度に強くなってんいってんだからよ。」
南「どうしましょうか…これで２対１にはなったのだけれど。」
大神「どうするかなんて簡単さ、殺す気で攻撃すんだよ！」
南「そしたらこの子死ぬわ!?」
大神「おいおい、それでも幽幻村の女王の妲己様かよ…こういうのは半殺しって言うだろ？」
南「あなた物騒なこと考えるわね…。」
南「まぁいいわぁ、殺られる前に殺る多少怪我させてもいいとにかく闘わないとよね！」
南「楽しませてよ、この勝負。」
レミリアの方ではいつでも戦えるように準備が出来ていた。桜も大神が暴走した時に使う札を持ち、呪文を唱える準備も出来ていた。
外から聞こえる爆発音、ナイフと刀が弾ける音。そして何かが斬れる音が紅魔館の中に響いた。すると音が鳴り止み、ドアが開かれた。その瞬間２人の影が見え桜は南と大神だと感じた。しかし、その瞬間絶望へと変わる瞬間でもあった。ドアが全開まで開かれると２人はその場から倒れた。そうヤンデレがドアを開け２人の死体を見せつ

けたからである。
魔理沙もそこにおり、驚いて声出なかった。それどころか足がガタガタと震え、この世物かと疑っていた。
ヤンデレは2人の死体を持ち上げた、左手は大神の耳を掴み右手は南の耳を掴んだ。そしてヤンデレは魔理沙にこう言った。
ヤン「あはは、見てみてまりさぁ！」
ヤン「魔理沙は私のモノ、誰にも邪魔させないんだから…魔理沙も他の奴らと付き合ったらこうなるから…ね？」
魔理沙「ば…化け物…!?」
ヤン「あれ～おかしいなぁ…ムカつくやつがいっぱい…殺してやる…！」
ヤン「あはははは！」
ヤンデレは2人を掴んでいた手を離し、ナイフを持ち替えた。
南「…くらぁ…にゲ―。」
ヤンデレは南の声が聞こえたのかナイフを南の喉に刺しトドメを刺されてしまった。今のヤンデレには、周りの者達が魔理沙を取る妖怪に見え笑いながら周りの者達を殺そうとした。
小悪魔、美鈴も抵抗するが及ばず怪我をおってしまう。ヤンデレがトドメをさそうとした瞬間パチュリーが攻撃を止めた。その瞬間ヤンデレの標的はパチュリーに変わった。パチュリーは様々な魔法で反撃するが、ヤンデレには効果がいまひとつどんどん進化していくヤンデレを前にパチュリーは固まってしまい魔法をかけようとしたがナイフが腹に刺さってしまった。それは奥深くまで刺さり、貫通するかしないかの境目でナイフが抜かれた。それを見た咲夜は怒り狂い、時を止め得意のナイフで攻撃をした。しかし、その攻撃はヤンデレには効果がなく死んだと思った時には紅魔館にあったドアから出てきたのだ。するとヤンデレは素早い動きで攻撃を行った。だが、早すぎて攻撃をしたか咲夜にはわからなかったが「えっ」と言うと咲夜はその場に倒れてしまった。
レミィ「咲夜ぁ！」
フラン「お姉様、逃げようよ〟この人〟怖いよ!!」

ヤン「ふふ…私を目の前にして恐怖した？」
ヤン「そうよ、やはり今の当主は私が相応しいわ…そうね…魔理沙は地下牢に閉じ込めて監視でもしておこうかしら？」
レミィ「お姉様…いえヤン！」
レミィ「貴方は紅魔館当主にはなれない、何をしようとも貴方は危険な妖怪よ…だからこの怒りは１０倍にして返してあげるわ。」
ヤン「いいわよ、どっちがスピア・ザ・グングニル使いか教えてあげる！」
ヤンデレとレミリアは1対1の勝負をしようとしていた。だが今のヤンデレに勝てる見込みは約2割と言っていい。しかし、レミリアも色んな修羅場を乗り越えてきた身ここで負ければ姉より成長した意味が無いと思い今持ってるスペルカードを全部使い切ろうとした。だがその攻撃は全て避けられヤンデレに大きな傷をおわれてしまう。どうしてか急所には当てずただただ斬ったり刺したりの繰り返しだった。レミリアがまだ本気で刺しに行っていないと言うことがわかると、苦しみ悶えながらもスピア・ザ・グングニルを撃った。だがヤンデレもそれを来ることを分かっていたのか同じスピア・ザ・グングニルを撃った。レミリアのは紅く輝いていたがヤンデレのは紫色になっており紅いオーラを放っていた。２つの槍がぶつかり合うとどちらかが押し出す形になったが弾き返されヤンデレの槍がレミリアに向かう向かったいちは頭で一撃で死ぬ危険性があった。その時槍がレミリアの頭の目の前、わずか１０ｍ位でその槍は止められていた。それはレミリアが止めた訳ではなく全身に突き刺さっているような感じであった。そしてその物にレミリアは身に覚えがあった。
それは、レミリアの妹、フランドール・スカーレットだった。
フラン「…生き、て…おね、さ―。」
ヤン「邪魔。」
フランはヤンデレの攻撃により、頭を一撃で刺された。刃は頭を貫通しレミリアの頭に向かって行こうとしていた。レミリアは完全に死を覚悟し目をつぶった。しかし、その攻撃は止められていた。だが一体誰が止めたのかそれはわからずいた。レミリアが目を開けると

周りを見た、桜は南を必死に起こそうとしていたのが見え他は紅魔館の住民が横たわっているか怪我を抑えている。けれど1人の人物が居なかった。
目の前を見ると、その人物に身に覚えがあり帯が黄色く、白色の巫女服。その瞬間レミリアはわかった。
大神「間に合ってよかった…しばらく南には寝ててもらうけどここからは俺の決闘だぜ…。」
レミィ「大神！」
大神「悪いな、遅れちまった。」
レミィ「いいえ、貴方だけでも生きててよかったわ…私は皆を連れて―。」
大神「桜！」
桜「は、はい…。」
大神「あいつは大丈夫、直ぐに起きるさ…だから皆を連れて逃げてくれ。」
桜「で、ですか…大神様！」
大神「行けェ！」
大神「これ以上負傷者を出したくないんだ…頼んだよ桜。」
桜「ッ―！」
桜は大神に言われた通り、紅魔館の人間全員を連れ永遠亭に連れていった。だが1人、紅魔館当主のレミリアは柱の方に行きその場を見ていた。
そして、大神とヤンデレの1対1の勝負が出来るようになった。
大神は刀をしまい、ヤンデレをじっと見ていた。
そう、戦った時の記憶を思い出していたのだ。以前は不意をつかれ負けてしまったが今回はそんなことも無い1対1の勝負が出来ると考えていた。だがその点、レミリアに当たれば即死なのは目に見えていた。しかし、比較的に攻撃を受けずらい位置にいるためレミリアは怪我をせず済む。
レミリア柱にいる所に運ばれた南は完全に傷が塞がり喉を刺された傷もすっかり癒えていた。すると南が起きると、周りを見渡した。

南は大神がいつ暴走してもおかしくないことに気づき、封印の札を懐から出し呪文を唱える準備を行った。
ヤン「よかったのかしら、今度は1対1よ？」
大神「ああ、これで対等だろ？」
ヤン「それもそうね…でも貴方は今重要な事忘れてるわ。」
大神「ここに来て心理戦か？」
ヤン「いいえ、貴方には知った貰いたいのよ…知れば面白くなるしね。」
南「まさか…罠よ、聞かないで大神！」
大神「罠？」
ヤン「あの時貴方と一緒に死んだリスちゃん…実はね。」
南「やめなさいヤン！」
ヤン「潮風　桜　ちゃん、なのよ、リスから転生してスカンクになっていたの。」
ヤン「これ、本当の話よ？」
大神「！」
南「ッ――！」
それを聞いてしまった大神は、ヤンデレが言った言葉を信じてしまう。その瞬間身体に異変が起こる。
果たしてどうなってしまうのか。そしてヤンデレに大神は勝てるのだろうか。

決着　終　番外編（獣神化編）

大神は、桜があの時いたリスだと気づくと頭痛を起こし頭を抑えた。

酷く痛み、立っているのもおぼつかない程だった。その瞬間、桜が大神と一緒に殺された事を思い出した。その時身体全身に異変が起こった。

大神「うわあああああああああああッ！」

大神は叫び身体中に痛みが走った。我慢出来ずに眼帯を外し全力を解放させてしまった。その瞬間叫び声が、獣の雄叫びとなりガリ股立ちし背中を後に下げ中腰気味になった。だがそれは床に着くほどで両手を広げ何かを唱えていた。その時大神の顔が笑顔になり。しばらくその体制のままピクリとも動く事はなかった。

ヤンデレが攻撃をしようとした瞬間、激しい光に包まれ外では雷がなっていた。しかし、外は雲などなくそれどころか雨すら降っていなかった。

その激しい光が消えると、大神だった姿はもはや誰かすらわからなかった。髪の色は白く金髪になり、目が紅く染っていた。片目に傷があった所は紋章と化し、身体中に何かの一族が付けた紋章が傷として出来ていた。

そして、南はそれが誰か感じ取ることが出来た。

南「光！」

光「あ～ぁ、久々のシャバの臭いだわ。」

光「久しぶり、南…今私こいつを倒したくてうずうずしてるの。」

南「まさか…ヤンを恨んでるの？」

光「それもあるし…あの時のリベンジをね。」

すると、光は刀を入れる木刀を南に投げつけた。

南が受け取ると、大神の気配を完全に感じ取ることが出来た。

光「そうでしょ、大神？」

大神（ああ…でもお前…最大の禁忌は起こすんじゃねぇぞ、ここが滅ぶかもしれないからな。）

南「ちょ…今サラッと言ったわよね…。」
ヤン「やっと本性を現したわね…さぁその恨みを私に晴らしなさい！」
ヤン「そして、魔理沙に近づいたことを後悔させてあげるわ!!」
光「面白いこと言うのね、恨みだけじゃこの勝負勝てないわよ？」
光「ふふふ、悪いけど大神の言った〝アレ〟約束出来るかわからないわ。」
大神（おい…マジで頼むぞ…。）
光「ふふ、大丈夫大丈夫峰打ちで済ませるから。」
南「…悪いけどそうはさせないわ。」
光「どうしたのよ…私が妖転生したから妬ましく思ってるの？」
南「そういうわけじゃないわ…貴方の力は本当に危険なの！」
南「だから…この手で…封印を！」
南は封印の札を光に向け詠唱を唱えた。だが封印の札をビリビリに斬られてしまい、札が使えなくなってしまった。光はおっと危ない危ないといい、南に光についている紋章と同じ傷をつけ動きを封じこめた。
もはや南を支配下に置いてしまった光。大神や光の為ならなんだってすると思っている南だが、光にはまだ死んで欲しくないと思い近づく。しかし、〝見えない壁〟のせいで近づくことが出来なくなっていた。
すると、南の身体が水色に光り全身麻痺をさせられてしまった。
南「ッ―…なんで…どうして…うぐッ―！」
光「悪いけど邪魔されたくないのよ…私も1人の獣としてサシで戦いたいのよ。」
ヤン「そうでないとね…先の楽しみがなくなってしまうわ～。」
光「そうね…いざ参るわ！」
そう言うと刀を抜き、素早い動きでヤン近づく。ヤンは信じられない早さだと思い光に顔を近づかされる。光がそんなものなのと言うとヤンは紅魔館の大きな窓ガラスまで吹っ飛び窓ガラスが割れ窓ガラスをさえていた木の板鉄板が粉々に壊れ崩れた。ヤンが戻ってく

ると、笑ったままこう問いかけてくる。
ヤン「そう、これよ…全てを壊したくなるこの感じ！」
ヤンデレは紅い満月のおかげで紅く光っているように見えた。だが、電がヤンに直撃。体は焼け焦げ、湖へと落ちていった。しかし、今度は別の所のドアからヤンデレが出てきた。すると、ヤンのスカーレットディスティニーの集中攻撃により光が後退する。光の足が床にめり込み相当な重みがかかっているといえる。そしてヤンが光に近づき、腕を上にあげた。
その攻撃は刀により抑えることは出来たが、斜め上に上昇し吹っ飛ばされた。さらに、天井の半分を粉々に破壊し空が見えるようになった。
そして光もスペルカードを出し、雷を一斉に出した。
その名前は、”終焉「落雷」”だった
しかし、スペルカードを避けられてしまいさらに反撃する光。
ナイフと刀とのぶつかり合いで泥のぬかるみのように足が床にめり込み、ヤンを押し出すか光を押し出すかの形で床はコンクリートどころが木材や土にまでめり込んで行った。それはまるで月にあるクレーター並の深さだった。南は、ここまで強くなった光を見たのは初めてで光が辻斬りと言うことは知っていたのだが南が知っている以上に力があり、唖然とするしかなかった。どんどんと強くなる光とヤン、いつ更なる暴走が起こるかわからなかったがヤンを倒す、光にはそれしか無かった。
ヤン「なかなかね、よくスペルカードや刀技使っても息が切れてないし…それどころかフラフラにもなってない。」
光「そんなの簡単よ、運動神経がいいのよ。」
ヤン「そんなの理由にならないわよ…。」
ヤン「でも、まぁいつまでも持つ訳でもなさそうね…そろそろお得意の二刀流出したらどう？」
光「お得意の？」
ヤン「そうよ、貴方の更なる暴走…見てみたいわ…。」
ヤン「でも、魔理沙は渡さないわよ…もし奪いでもしたら…。」

光「……だから?」
大神（おいやめろ、”アレ”やったら…！）
すると、光は刀を自分の胸に刺し自決をした。その瞬間光はその場に座り込み力尽きた。しかし、ヤンは不服そうな顔をしもう終わりかと思った。だが、光は自分の刀を抜きしばらく背中を後にそったまま唸っていた。
すると全身が紅くなり、本物の獣のようになった。光に問いかけても声は届かず言語も理解出来ず話すことも出来なくなっていた。唸る、雄叫び、鳴くの狼みたいな事が出来なくなっていた。南は虎や狼などの肉食動物などの気配を感じ南は恐怖した。光の前髪は上に上がり、体についていた毛は抜け落ち褐色の肌の獣人が出来上がった。片目は黒色で何やら危険なプレッシャーまで感じ取ることが出来た。光は2本刀を持ち、ぐったりと前傾姿勢のままヤンデレに近づいた。時々四足歩行になりかけるがまだ人間の自我が残っているのかそれとも大神が操作しているのか不明だが二本足で立とうとしていた。その気配に気づいた霊夢は紅魔館にやってきた。
霊夢「な、何よこの有様!?」
南「霊夢、大神…光を助けて!!」
霊夢「ちょ…光って　あの電光　光!?」
南「ええ、いまはそれの成れの果てだけれど…お願い霊夢このままじゃここが滅ぶどころかあの子元に戻れなくなる！」
霊夢「全く、面倒な事しか持ってこないのね…あいつって…！」
光「ガルルルルルル…。」
ヤン「ッ――！」
霊夢「どうやら、話が聞ける相手じゃなさそうね。」
ヤン「博麗の巫女、私達の勝負の邪魔をしないで！」
すると、ヤンが左手をぐっと握りしめると空にヒビが入る。
そして、ドアにもヒビが入り幻想郷が滅びる寸前だった。霊夢はさらに気配を感じ、札を持ち攻撃の準備をしていた。
南もそれを感じ取ることが出来、光にはまださらに上があると気づく。

光は猫のように鳴くと、その場で手を舐め始め毛ずくろいを始めた。
南達は少し拍子抜けな顔をしたがヤンが遊ぶなと叫び攻撃すると、光は猫のように飛び、兎のようにそして鳥のように飛び、刀で攻撃をした。
南がよく見てみると爪が鋼の爪になって刀のように斬れ味が良いものになっていた。
ヤン「痛ッ――！」
ヤン「何よこいつ…究極体生物かなにかなの!?」
ヤン「私が見た中で1番怖い生物な気がするわ貴方。」
光「アリ…ネ。」
ヤン「ありがとうって言ったんだろうけど…さすがにこれじゃ楽しめないわ…。」
ヤン「予定変更よ、貴方をこの世から消すわ…博麗の巫女もいる訳だしね。」
ヒヒはさらにでき、ようやく紫が隙間から出てきた。
紫「霊夢、光はこの幻想郷に居られないわ…流石にこの子に管理は出来なかったみたいだしね。」
霊夢「はぁ、管理ってなによ…こいつあんたと同じく監視役だったって訳!?」
紫「いいから、結界が壊れかけているの…幻想郷と妖怪を知られてしまえば外の世界の人間が死ぬ事になるわ！」
紫「ほら、また異変よ…また体が変化し始めているわ。」
紫が言った通り、体が黒くなり髪も黒くなり眼球や目のふちまでが黒くなっていった。爪も黒くなりツヤのある黒色のへと変化して行った。
紫はそれが何かを知っている。そして南もその症状を知っていた。
南「し…シンビオート…。」
霊夢「何よそれ宇宙から来た生命体?」
紫「それも最悪な物だけれどね…シンビオートはスカーレット家当主だった、ジュール・R・スカーレット博士がシンビオートの研究を

とある会社から引き受けたの。」
紫「シンビオートは危険な存在よ…人の様々な感情に侵食し、元々存在していた宿主の力を抜き取ってさらなる進化と侵食が始まるの…。」
紫「多分このシンビオートは光の居心地が良すぎて、力は光の力を蓄えながら生きているそんな感じね。」
南「それに…噂で聞いた話よ…外の世界の現代科学ではシンビオートに弱点だった超音波や陽の光を抑制または完全になくすことが出来るようになったらしいのよ。」
南「でも光に乗り移ってるシンビオートは…多分古い方のやつよ。」
霊夢「陽の光や超音波を流せばいいのね…。」
南「それに、全部の力を解放させているおかげで怪我の治癒力は凄いけど…不死身ではないわ、瀕死状態にさせれば私の札でなんとか出来るはず…。」
ヒビがさらに入る。ヤンデレと光はまだ戦いを続けている。
そこに南達が参戦した。南はヤンデレを抑え、霊夢は光を抑えたが結果ダメージを食らうことになった。光は唸り、噛み付こうとするがヤンデレが避けダメージを軽減したが避ける度に速さは増していき攻撃を受けてしまう。両腕で手を抑えられると倒れ込み肩を噛み付かれた。光が不味いと一言言うとさらに噛みつき、胴体が全て食いちぎられた。
そして、ヤンデレは死んでしまった。他のドアから現れると思ったが現れることは無かった。結界が割れる寸前まで来ると紫は結界の修復を諦めた。理由は、結界を修復する度にさらに割れていくからである。
これ以上は、保つ事が難しく紫は涙した。
さらにヤンデレのうなじの辺りにあった紋章が完全に喰われており、回復することも、復活することも無くなってしまったのだ。
すると、なにか胸騒ぎがすると思ったレミリアは紅魔館に戻りヤンデレが倒される惨状を目の当たりにすると物陰から出てきた。
レミィ「お姉様！」

南「レミリア、逃げなさいと言ったでしょう!?」
霊夢「いいわ、紫お疲れ様あとは巫女の仕事よ…。」
霊夢「光、貴方を退治するわ！」
南「無駄よ、攻撃する度に速くなるのよ貴方の攻撃は光には通用しないわ！」
霊夢「だから？」
霊夢は素早い動きをし、光に近づいた。その瞬間光は地面まで吹っ飛び、地面に埋もれた。南は理解出来ず驚くしか無かった。紫に霊夢に何が起きたかと聞くと、霊夢は覚醒し近づいただけで即死するレベルだと言った。
そう霊夢は素早い動きをし、光に近づくと同時に攻撃をしていたのだ。だが、攻撃したと言ってもほんの一瞬の話だった。周りの人間にはただ近づいただけのように見え、およそ数秒の速さで攻撃したのだ。
光が起き上がると、さらに攻撃を始める。しかし、霊夢にその攻撃を避けられてしまう。霊夢が反撃すると、そこで勝負は決まっていた。
光はボロボロになり、立っているのもおぼつかない程だった。すると光は、幻想郷と外の世界と繋がってしまった外の世界へ逃げてしまった。
霊夢はあとを追い、光を探した。
光は物陰に隠れていると、少しずつだが言語と意識が戻って行った。しかし、光の意識が戻っただけで体はまだ極反応を起こしている。
まだ喰い足りない、まだ殺したいと言う耳鳴りが聞こえるようになっていた。ビルの裏路地の端っこに座り込むと、霊夢にバレてしまった。
霊夢は意識は一応元に戻ってるみたいだし南に遺言か何か言ったらどうなのと言われ光は口を開いた。
光「やっぱり、これが私がなる最後の人生か…。」
光「殺りなよ…どうせ幻想郷を元に戻すのにかなり時間もかかる

し、妖怪を見られてしまった以上…ほとぼりをどうやって抑えるか知らないけど、こうやって幻想郷のルールと自分で最大な禁忌を出してしまった以上…私は生きる価値はないわ。」

霊夢「…。」

霊夢「いえ、貴方は幻想郷の中では輝いていたと思う…でも貴方を見逃す訳には行かないわ、南に言うから遺言か形見を渡して。」

霊夢「まぁ、あるならだけどね…。」

光は意識が朦朧としている中、力を振り絞って刀と眼帯を霊夢に渡した。

そして笑みを浮かべこういった。

光「南にはこう伝えて、貴方には悪いことばかりしたわね…でも私はあなたの味方、そして貴方は唯一の親友…ずっと友達だよ…向こうで見てるから…あと。」

光「大好きな大神と幸せに…。」

と言ったあと3秒程沈黙した後霊夢が光を切り刻んだ。

これが光と大神が犯した禁忌の末路と言えるだろう。しかし、本当にこの結果で良かったのかそれとも…。

だが、これがまだ終わった訳では無い。光が亡くなっても、幻想郷の欠片が外の世界に舞い妖怪達が居る世界になってしまった。

これをどう戻すのか、そして更なる敵と南達は立ち向かわなければならない。光が死ぬ結果で良かったのだろうか、そして幻想郷が滅ぶ世界でよかったのか。これで…。

大神「嫌だ！」

光「嫌だ！」

大神が目を覚ますと、そこは自分の家だった。

周りを見渡すと何も割れておらず、空も日の出の綺麗な空が広がっていた。大神が夢だと思うと体に痛みが走った。

体をよく見てみると、浅いが切られた後がくっきりと残っていた。傷からしては大神についていた目の古傷と同じだが。夢なのに別世界で負った傷だとは大神は未だに思っていなかった。

外に溜まっていた水の壺に両手を突っ込み顔を洗うと、巫女服に着

替えるとブラックが大神の家にやってきた。しかし、何故か夢でいたブラックがヤンデレ・スカーレットになってしまう事を思い出し少し警戒してしまった。だが、よく見てみるといつものブラックだとわかると大神はほっとした。月夜と南が現れると南が私の力分けてあげるといい札を出し詠唱を始めた。少し”デジャブ”を感じたが大神は気のせいだと思い、南に合わせて呪文を唱え始めた。

しかし、それは大神が見た夢の繰り返しに過ぎなかった。

決着（獣神化）編　終

決着　終　（覚醒編）

大神が目を覚ますとそこは元の幻想郷だった。いつものように布団から出ると、南がやってきてもしものために備えてお祓いするわよと言い出した。その時、大神はデジャブ感を感じた。そしてふとある事を思い出した。大神は別世界でブラックと勝負し幻想郷を崩壊させたのに気づいたのだ。しかし、周りを見る限り暴走する前の時間に戻ったと言える。だがもうあの時と同じことは二度と起こさないと大神は心から誓った。

南にブラックと大神との関係を聞くと、仲がよく警戒するどころかいい関係だと大神に話してくれた。前の世界ではブラックと接触せず、ブラックの私生活を観察するほど仲が悪く話しても全く会話が噛み合わず所々で黙ってしまうことが多かった。

しかし、ブラックの行動の様子から”今回も”レミリアを殺しに行くに違いなかった。そうブラックは魔理沙が好きで好きでたまらないほどに。夕方、ブラックは紅魔館に行くはずだろうと踏み、空へ飛ぼうとした。しかし。

???「大神さん！」

大神「なんだ、桜…今俺は忙しいんだ。」

桜「行かないでください…。」

大神「なんでだ、こうしている間にも南とレミィが！」

桜「行かないでください！」

大神「…」

桜「行ったら…また…殺戮の繰り返し…どうしてあなたが違う次元から来た記憶を持ってこの元の世界にやってこれたのか…。」

桜「それは私の”能力”のおかげであなたをこの世界に呼ぶことができたんです。」

大神「桜の…”能力”!?」

大神「教えてくれ、お前が持ってる４つの能力からその能力は！」

霊夢「そうね私にも教えて欲しいわ。」

と言いながら霊夢は寺の柱から出てきた。

大神「れ、霊夢…お前も。」
霊夢「ええ、最初は夢かと思ったけれど…まだあの感覚、大神…いや光を”殺った”時の感覚覚えてるもの。」
桜「普通は、この”能力”は使えないのですが…もし私の身に危険が起きたり、大神さんが暴走して止められなかった時の緊急で使える能力。」
桜「”時を巻き戻せる程度の能力”を持っています、もちろん緊急時以外は皆さんに秘密にし…大神さんに対しその能力を発動させていただきました。」
霊夢「でも、その能力が私にも発動し一緒に時間が巻き戻ってしまったわけね。」
桜「はい、ですが当然昨日のように記憶や感覚が覚えてしまうのはそこまで時間を巻き戻すことはできないからです。」
桜「しかし、大神さんは感覚が覚えていたとしてもずっと暴走状態になるわけではなく、自分の能力自体は発動する前に戻ります。」
大神「でも戻ったのなら、俺とブラックの仲は険悪なはず…。」
桜「それは、一度失った時間軸は次の時間軸に移されてしまい例え元に戻れても完全には元に戻れることはないということです。」
霊夢「でも時間を巻き戻すことができるんだったら、自分が死ぬ前の過去に巻き戻って死ぬのをま逃れたじゃない…大神だってここに来ることもなかったわけだし。」
桜「それは何度も行いました、でも死をま逃れようとしてもその時間軸は完全には元に戻れない…あるのは死だけでした。」
桜「私が過去の世界で死んだら現代に戻ることはできますが、１日から５０日以内だと死んでも戻るのは今いる時間軸のみです。」
大神「つまり…死んだらまた今日の朝みたいなことが繰り返されるのか？」
桜「いえ、私が再び緊急能力を使わない限りは死んだままです。」
桜「それに精神状態も前より少し不安定なはず…一度墜ちた一時的殺意と精神は先ほど言った時間軸のように精神が回復してもある程度か、大体数字で表しても８０％くらいしか回復しないんです。」

霊夢「んで、また同じようなことがおきて同じような能力を使って元の世界に戻ろうとすると、今度は―。」
桜「およそ１０％減り、７０％くらいしか精神は回復できません…もし繰り返し使えば最終的に一時的狂気のままゲームオーバーです。」
大神「チャンスはこれを合わせて最後か…。」
大神「でも行くよ、時間軸が変わってるんだったら尚更やりやすい…こんどはみんなが生きて帰れる世界に変えるんだ…俺が…いや俺達がこの手で！」
というと全速力で空に飛びブラックの後を追いかけた。桜は待ってと言った瞬間、南に狐火を飛ばし一刻も早く南に知らせようと心がけた。霊夢も大神が大異変を起こさないよう尾行を始めた。
すると様子がおかしいブラックが紅魔館の方へ向かい歩いていた。大神は止めに入ろうとしたが凄い殺気を感じ、血の気が引いた。しかし、大神は勇気を振り絞りブラックを止めようとした。
大神「ブラック、紅魔館に行くんじゃない！」
ブラック「…」
大神「魔理沙はたまたまレミリアに呼ばれただけなんだ、別に魔理沙はレミリアのことはただの友人としか思っちゃいないさ！」
ブラック「…」
大神「ブラック、魔理沙はお前のこと良く思ってたじゃねーか！」
ブラック「…」
大神（聞こえていないのか…まるで操られているかのように歩くのをやめない…。）
大神（マズイ…このままだと紅魔館に着いちまう…。）
大神は予定を変更し、美鈴にブラックのことを報告した。身の危険の事を伝えると美鈴は紅魔館の中に逃げ込んだ。大神はこれで時間稼ぎができると判断したのだが、南がやってきて大神を止めようとした。
南「ダメよ大神、〝あの子〟と接触しちゃ！」
大神「退いてくれ、俺はやつを止めようと！」

南「接触自体ダメなのよ、だってあの子はや――！」
大神「”ヤンデレ・スカーレット”なんだろ？」
南「知ってたの…なんで知ってるのよ…？」
大神「色々と事情があってな…ほらきたぞ、レミィ達を外に逃がしてくれ…もう死体は見飽きた。」
南「…馬鹿…。」
と捨て台詞を吐き、南は紅魔館の中にもどり大神に言われたとおりに行動した。
ブラックが近づくと、ブラックがある事に気が付く。
ブラック「いつも…門番…いない…。」
大神「今回は俺が門番だ、中には絶対に入れさせねぇ…。」
と大神がブラックにいうとブラックが正体を表した。ブラックはヤンデレ・スカーレットに変身し、大神にこういった。
ヤン「なんだ…あの門番だと思ったのに…なんで大神がいるわけ？」
大神「お前の暴走行為を止めに来たんだよ。」
ヤン「でも、私に勝てるのかしら？」
大神「今回は…。」
光「一味違うわよ？」
というと大神はスペルカードを取り出し場所を強制的に移動させた。物もなにも壊れないただの空の上。下は地面がない奈落の底だった。光が刀を抜くと、こういった。
光「ヤン…あなたは絶対に私が止めてみせるわ。」
ヤン「これで閉じ込めたつもり…あなたは知らなければならないことがあるは？」
光「へぇ～…それは何？」
ヤン「”潮風　桜”は外の世界で殺した、リスなのよ…。」
光「…で？」
ヤン「!?」
光「前々から桜は、あの時殺ってしまったリスだってことは知ってたのよ。」

光「まぁ、謝っても謝りきれないけれどね…。」
ヤン（前々から知っていた…何故、幻想郷来たときは全く知らなかったはずなのに！）
ヤン「まぁいいわ…まさか私の策が簡単に破られるなんてね…まぁこんなことしてもフェアじゃないしね、正々堂々勝負してあげるわ。」
光はヤンに攻撃を開始した。ヤンは光の攻撃を避けヤンの攻撃、光は刀で防御したり槍の機動を読み華麗に避けた。その攻撃は繰り返し続いた。するとヤンは攻撃をやめ、スペルカードを取り出した。
ヤン「同じ攻撃ばかりはつまらないわ、私も本気を出すことにするわ。」
というとヤンはスペルカードを使い、光に攻撃をした。ヤンの体は赤光っており、これがＥｘバージョンになった私と光に言った。以前のヤンより動きが素早く攻撃をかわしきれずに深いダメージを覆った。しかし光も負けておらずできるだけ自分の持っているスペルカードを使い、ヤンに攻撃をしたが全く攻撃が当たらず全てよけられてしまった。
光（こんなに攻撃を華麗に交わされたことは初めてね…全て見えている証拠のかしら…。）
光（でも、運命は変えてみせる…例え私が暴走しても…）
大神『ああ、光…運命は変えてみせよう！』
光「大神?」
光「…そうね、変えてみせましょう…。」
というと体が黄色く光、何かに目覚める感じがした。そうそれは暴走のさらにうえ、覚醒だ。
大神と光の魂を一心同体にし、心は完全に一つとなった。そしてこの覚醒は元には戻れない。なぜなら二人はもう名前や過去に縛られずに生きることが出来るからだ。そして名前は。
大神「そう…名前は大神のままでも私たちは一心同体、この運命だけは絶対に変えてみせる。」
ヤン「こ…これは。」
一方南達はというと、たまたま貼っていた札のおかげで別次元に

行ってしまった大神達の様子を狐火で見ることができた。
そして南は大神の運命という意味を理解し覚醒したことを知る。
南「こ、これは…覚醒？」
南「一体どうして…これ以上の力は感じられなかったわ。」
桜「〝運命を変えようとする力〟が大神さん達に新たな能力を与えた…。」
レミィ「え？」
桜「つまり〝愛情〟ですよ。」
覚醒した大神は、ヤンに反撃した。ヤンはいつものように避けようとしたが、ブーメランのように帰ってくる攻撃に避けるとができなかった。ヤンも攻撃するが、大神に華麗によけられ最後の一撃を刺そうと決意していた。しかし、ヤンの残っていた最後のスペルカードを使い、大神は大ダメージ。片腕が動かなくなってしまい体中ボロボロになってしまった。
だが、走馬灯のように蘇る幻想郷にいた記憶。そして親友の南との記憶。それを思い出すたび涙がこぼれ皆に、桜に、南に感謝するしかなかった。とにかくヤンを止めいつもの楽しい日常を戻すために大神は最後の攻撃、最後のトドメを刺しに行った。同じくヤンも反撃し、二人は同時打ち。その時大神の意識が飛び、周りが真っ白になった。
すると、誰かの声が頭に響きわたる。それは母なのか、それとも紫なのか、それか自分自身なのか。ただ微かに聞こえる声はこういっていた。
???「運命を変えることができたのね…もし苦難や困難、恐怖や絶望といった運命がやってきたとしても、その事実を受け止め大きく生きていくのよ…。」
???「そうすれば、あなたの人生はきっと幸せなものになるわ。」
とすると真っ白な世界に眩しい光が差し、手を顔にかざし眩し光を浴びないようにした。気が付くとそこは幻想郷にいた。周りは紅魔館と幽幻村の住民全員が大神のことを心配していた。
大神「ここは…ッ――！」

南「まだ動いちゃダメよ光、かなり怪我してる。」
大神「え、ええ…ここは紅魔館？」
南「ええ、光…あなたが元に戻って帰ってきてよかった…多少姿は変わってなくても、あなたが帰ってきてくれるだけで本当によかった…。」
大神「ありがとう、そしてごめんね…心配かけちゃって。」
南「大丈夫よ…大丈夫…。」
一方ヤンとレミリアというと。レミリアはヤンの頭を膝に乗せ、頭を撫でていた。フランは不思議そうにヤンのことを見ているとヤンは目を覚ました。
ヤン「…レミィ…。」
レミィ「馬鹿お姉さま、どんだけ心配したと思ってるの！」
ヤン「ごめんなさい、レミィ…心配かけちゃって、ごめんなさい…喧嘩までした挙句家出までしちゃって…。」
レミィ「謝るのはこっちのほうよ…私も妙なこと考えてしまったのが悪かったの、本当に…ごめんなさい…お姉様…。」
フラン「お姉様…なんで泣いてるの？」
レミィ「ああ…しょ、紹介するわ、この人は、私とあなたの姉…ヤンデレ・スカーレットよ。」
ヤン「初めましてね…フランドール…。」
フラン「やんお姉ちゃん…。」
こうしてヤンとレミリアは和解し、ヤンは紅魔館に暮らすようになった。しかし現時点での紅魔館の当主はレミリアということは変えることはできず、ヤンは思わず抗議したが。最終的にヤンは納得し、紅魔館の当主の座を譲った。あれからヤンはブラックとして魔理沙と仲良くし、一緒にゲームしたり、魔理沙の家に泊まったりして楽しくときを過ごしていた。
そして、ブラックとして住んでいた家は時々紅魔館まで帰るのが面倒なときの寝床として扱っていた。そして月夜　桜と仲良く歴史文化について教え合い、良い日々を過ごしていた。一方大神はというと、あれから口調が光の時の頃に戻ることはできたが体の異変を解決

することができずにいた。しかし、あの異変以来南とかなり仲が良くなり結婚まで考えるようになったのだ。だが外の世界同様、女同士で結婚することは不可能だったが。紫の説得の末、特別に南と大神との結婚が許可されたのだ。（大神の下が男なのは言うまでもない。）

そして、ある日を境に大神の神社には参拝客が増えお祓いをしてくれという依頼が耐えなかった。村もどんどん発展し、最終的には外の世界と繋げ観光地にしようと大神がとんでもないことを言い出し、外の世界の人間を喰らわないという条件を逆手にとり幻想郷と外の世界と境界を開通。どんどんと発展を見せ、最終的に幻想郷は京都一良い観光地と名称され。人々に愛され続けた。